

外国語の学習と獲得

—知識と運用—

はじめに

多くの本やマスコミで、日本人の外国語能力、とくにオーラル・コミュニケーション能力の低いことが議論の的になっています。かならずしも個人の努力が足りないわけでもなく、また学校教育でおろそかにされているわけでもないのに、日本人が外国人との「会話」でうまくコミュニケーションができず、つい尻込みをしてしまうことが多いのはなぜでしょうか。中学校、高等学校、そして大学でも外国語教育・学習に多大の時間がかけられているのに、その成果が芳しくない、ということならば、教師と学習者はなんらかの具体的な対策を考えなければならないでしょう。

学校教育や個人的な学習法のあり方に疑問をもち、その解決策を探して書店を巡ることがあります。そこには、多くの勉強法に関する本や、いわゆる「英語本」が並んでいて、数々のベストセラーを生んでいます。このタイプの出版は、日本社会の中で一大産業を築いている、と言えるほどです。なるほど提唱されてきた数々のメソッドには説得力があります。音読、新聞購読、ニュースや映画を見る、シャドウイング、イメージングプログラム、要約、日記、…などなど、枚挙にいとまがありません。どれも継続できれば効果があると思われまます。

しかし、もし英語本で推奨されている方法が本当に一般的に効果があるのならば、それが実証され、応用され、普及し、非能率

な外国語教育学習の問題はとっくに解決されているはずですが、なぜ、このような理想が実現されていないのでしょうか。私は、その理由は提唱されている方法が個人の体験（と限られた応用）に基づいているからだと思います。著者の提唱する方法は、本人が納得してして築いたものなので、本人にとってはもちろん効果はあるでしょうが、それが必ずしも一般的に応用できるとは限らないのです。

私は実際に自分の頭や身体を実験材料にして数々の方法を試してみました。しかし、そのエクササイズの効果が出るまでには多くの時間と労力がかかるので、長期間維持することができませんでした。たとえば、テキストの音読を最低でも 20 回、理想的には 100 回、というエクササイズは、受験生でもないかぎり、常人にはなかなかこなせないと思います。他の方法もいろいろと試してみましたが、恥ずかしながらすべてにおいて挫折しています。そもそも忙しい勤務の間にそれだけの時間を作ることは困難です。たしかに時間については休日などを利用すれば回復できるかもしれませんが。問題は勉強の気力の維持のほうです。

私は言語情報科学という大学院の専攻に属し、言語情報分析という授業を担当しています。隣接の分野に外国語教育があって、そちらの専門家たちや学生との交流があり、いただいた論文や著書から多くを学んでおります。また、学部教育ではスペイン語を担当しています。スペイン語学においても教育法がさかんに論議されています。多くの先行研究の中から、私でも実行できることや、なるほどと思われる見解や実験結果を見ることができます。これらは個人的な体験ではなく、実験や授業によって実証されたことが紹介されているので安心です。とくに、**意識的な「学習」による外国語の知識と、自然な「獲得」による潜在的な外国語の運用能力**の関係に興味があります。その関係の中に外国語教育学習問題の解決の突破口（ブレイクスルー）が見つかるのではないかと思います。

仕事の関係でスペイン語の4技能（読む、書く、聞く、話す）を使わなければなりません、まだまだ力不足を嘆いています。その上、最近ではスペイン語圏以外の人々とのコミュニケーションの必要性が増加しているので、英語の勉強もおろそかにはできません。また、専門分野では中世スペイン語とラテン語の読解力が必須です。さらにポルトガル語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、アラビア語も無視できないのです。私のような怠け者でも外国語や古典語を獲得できるのでしょうか。このシリーズでは、本や論文を参考にして、皆さんといっしょに実験をしながら確かめ、普通の人でも続けられる方法を探っていきたいと思います。

普通の人が続けられる方法として、勉強を義務化することと勉強を趣味にすることが考えられます。義務と趣味は背反することが多いのですが、もし両者が一致すれば理想的です。そこで、私たちの毎回の授業（「スペイン語の教育・学習法」）という義務を縦軸にして、毎回のテーマについて調べて自由に考えたことを横軸にして、「外国語の学習・獲得」という織物を仕上げていきたいと思います。

プリントの各単元の第一部では、いろいろな人との交流のなかで、また、書物と研究報告を読んで私が気づいたことを、すべて都合よくまとめるために、いろいろな架空の登場人物による「対話」という形式をとってみました。それは多くの人の考え方や書物の内容を私なりに解釈して、脚色したものです。それ続く第二部「講義」は授業内容を文章化したものです(*)。受講者（読者）の皆さんの感想やご意見をお寄せください。

それでは、早速「外国語の学習・獲得」という織物をご一緒に紡いでいきましょう。

(*) これを「スペイン語を学ぶ・教える」というタイトルで『NHK ラジオスペイン語講座』（2004年4月号~2005年3月号）に掲載

1 オリエンテーション

いたしました。NHK から許可をいただいて転載いたします。追加、訂正などを行っているので一部内容が異なります。

1. オリエンテーション



Tejido de alpaca, Salta, Argentina

1.1. 対話（メール）

教室の準備

〇〇先生

メールで失礼します。△△大学の教務担当の☆☆です。
先生の来年度のご講義「スペイン語の教育学習法」の時間割についてご相談させていただきます。来年度も今年と同じように金曜日の4限でよろしいでしょうか。また、ビデオやPCの関係で教室に必要な設備をお知らせください。
どうぞよろしくお願いいたします。

☆☆様

ご連絡をありがとうございます。来年度も同じ時間帯にさせていただきますようお願いいたします。教室では、ビデオとPCにつなぐプロジェクターを使わせていただければ幸いです。OHCもあるとよいのですが、これも可能ならばお願いいた

します。それから、椅子が固定されていない教室を希望します。

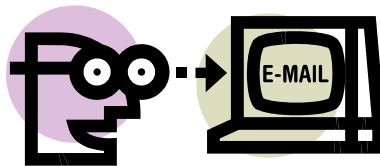
どうぞよろしくお願いいたします。

〇〇先生

了解しました。60名の教室を予約しました。ビデオ、OHC、プロジェクターが備えられています。インターネット接続も可能ですから、よろしければお使いください。椅子は固定されていません。

来年度もどうぞよろしくお願いいたします。

了解しました。どうもありがとうございました。



1.2. 授業

みなさん、こんにちは。私は今日から「スペイン語の教育学習法」を担当する〇〇です。どうぞよろしくお願いいたします。今日は、最初の授業なので、オリエンテーションとして授業内容の説明と成績評価の方法を説明します。

教科書とプリント

私たちの授業では、教科書として Isabel Santos Gargallo の *Lingüística aplicada a la enseñanza-aprendizaje del español como lengua extranjera* (Madrid, Arco Libros, 2004)を使用します。これは小冊子ですが、専門的な内容が扱われているため、難解な部分

があります。授業では、そのような部分を解説しますが、このプリント教材でも関連した問題を扱いますので、これも参考にしてください。

このプリント教材では、授業で説明しつくせなかったことを補います。専門用語については、レポートを書くときや、本の索引やインターネットの検索語として使いやすいように、スペイン語も載せます。このプリントはウェブサイトアップしておきますから、参考にしてください。

外国語としてのスペイン語の教育・学習

さて、教科書の序文(Presentación, Introducción)では、「外国語としてのスペイン語の教育・学習」が応用言語学の一分野であることが述べられています。さまざまな研究分野の中で「外国語としてのスペイン語教育学習」がどのように位置づけられるかを探ってみましょう。

スペイン語の諸相

スペイン語に限らず、一般に言語はけっして等質で理想的な状態で存在しているのではなく、いろいろな条件にしたがってさまざまな諸相を示します。それらの条件のなかでとくに重要なものとして、地域差 *diatopía*、時代差 *diacronía*、社会層差 *diastatía*、文体差 *diafasía* があげられます。

スペイン語の地域差としては、しばしば、「スペイン」と「南北アメリカ大陸」に分けて考えられますが、たとえば音声と文法について見るならば、むしろ、「スペイン中北部」と「スペイン南部・南北アメリカ大陸」に分けるべきです。そして、とくに語彙のバリエーションを扱うと、さらに複雑な分類になります。このことを研究するのが、方言学 *dialectología* や地理言語学

geolingüística です。方言学では一定の地域の言語特徴を研究し、地理言語学では多くの地域の言語特徴を比較します。

言語の時代差を研究するのが歴史言語学 *lingüística histórica* です。スペイン語で書かれた最初の文献は十世紀ごろのもので、それ以前になるとスペイン語の文献は見つかっていませんが、当時の書き言葉であったラテン語の文章の中にスペイン語の特徴が見られることがあります。スペイン語の歴史言語学では、中世、近代、現代の言語的特徴が研究されています。

同じ時代で同じ地域においても、異なる社会層の話し手や書き手のスペイン語の間に大きな違いが観察されます。社会言語学 *sociolingüística* はこのバリエーションを研究しています。とくに教養層と非教養層の言語の違いが目立ちますが、他に年齢差や性差なども重要です。これまでのスペイン語学の世界では「教養層の話し方」 *habla culta* の研究が多く、成果をあげています。

そして、同じ人が異なる場面で、話し方や書き方のスタイルを変えることがよくあります。書き言葉、あらたまった場面、ふつうの場面、うちとけた場面、仲間同士のくだけた場面には、それぞれ、文語体、格式体、普通体、口語体、俗語体のスタイルがあらわれます。このバリエーションを研究するのが文体論 *estilística* です。とくに使用される語彙の文体的な違いは辞書で確認することができます。話し言葉によるコミュニケーションをめざす外国語教育では普通体や口語体が重視されますが、専門的な語学教育では文語体や格式体のスキルも要求されます。また、文学や映画などを理解するためには俗語体の知識も必要です。

理論的な研究と記述的な研究

さて、こうした条件によるバリエーションを念頭に置いた多くの研究が、音声・音韻 *fonética y fonología*、形態・統語 *morfología y sintaxis*、語彙・意味 *léxico y semántica* のレベルで蓄積されてい

ます。これらは理論的な研究 *estudios teóricos* と記述的な研究 *estudios descriptivos* に分かれます。理論的研究は言語の本質を追究し、記述的な研究は言語の現実を追究します。

応用言語学

こうした純粋科学 *ciencia pura* としての言語研究のほかに、応用科学 *ciencia aplicada* としての応用言語学 *lingüística aplicada* の研究があります。応用言語学の分野として、機械翻訳 *traducción automática*、言語政策 *política lingüística*、言語治療学 *terapia del habla*、母語獲得研究 *estudio de la adquisición de la lengua materna*、第二言語教育学習 *enseñanza- aprendizaje de segundas lenguas*、外国語教育学習 *enseñanza-aprendizaje de lenguas extranjeras* などがあります。最後にあげた外国語教育学習の中に、これから私たちが勉強する「外国語としてのスペイン語教育学習」*enseñanza-aprendizaje de español como lengua extranjera* が位置づけられるのです。この分野は、ほかのさまざまな研究分野と関連しているので、一部だけ取り出して特殊化するのではなく、全体の中で相対的・総合的に考察することが大切です。

隣接諸科学

そして、言語科学 *ciencia lingüística* という枠を越えて、社会学 *sociología*、心理学 *psicología*、文化人類学 *antropología cultural*、教育学 *ciencias de educación* などの隣接諸科学 *ciencias conexas* との関連も忘れてはいけません。この授業では、教科書に沿いながら、隣接諸科学の問題も扱います。

参考書文献

参考書文献は、日本語で読める本や、とくに重要なスペイン語や英語の本を載せることにしました。大学の図書館などで調べてください。また、インターネットのサイトにも有用な情報がたくさんありますから、これらも紹介していきます。授業では本やサイトから勉強するだけでなく、自分たちでいろいろな作業をしながら、確かめていきたいと思います。ぜひ積極的に参加してください。

授業

授業では出席を重視します。毎回の課題は、教科書で指定した部分の翻訳と授業内容についての皆さんの自由研究とフィードバックです。授業内容について考えたこと、疑問に思ったこと、自分で調べたこと、自分の経験、授業内容・方法についての希望・提案などを書いてください。テーマを自分で考えることがむずかしい人は、【課題】から選んでください。最終試験や最終レポートはありません。毎回の翻訳と課題で成績を評価します。1つを選んでレポート用紙1~2枚にまとめなさい。できるだけワープロの練習をして、印刷して提出してください。書くための言語は日本語、スペイン語、英語、フランス語の中から選んでください。2カ国語以上で書いてもよいでしょう。

それでは、来週までに教科書の p.7 の第1段落を翻訳しておいでください。翻訳は3行ずつにして、1行目にスペイン語、2行目に日本語、3行目は空けておいてください。3行目は来週の授業中に確認したことを書いてもらいます。なお、ホームページの掲示板もチェックしておいてください。

【課題 1a】 スペイン語の発音、文法、語彙の地域差、時代差、社会層差、文体差について、知っていることや調べたことを書きなさい。

【課題 1b】 スペイン語の発音、文法、語彙の勉強が、人の心理、社会、文化の理解とどのように関係するのかを、例をあげて考察しなさい。

【参考文献】 Referencias

Gili Gaya, Samuel (1961) *Nociones de gramática histórica española*.
Barcelona: Bibliograf. 松野道男 (訳) (1984) 『スペイン語の歴史』 東京：南雲堂.

Lapesa, Rafael (1981) *Historia de la lengua española, novena edición*.
9^a edition. Madrid: Gredos. 山田善郎 (監修) , 中岡省治・三好準之助 (訳) (2004) 『スペイン語の歴史』 京都：昭和堂.

Lipski, John (1994) *Latin American Spanish*. London: Longman.

*Gili Gaya はスペイン語史のコンパクトな解説書です。Lapesa はスペインやラテンアメリカで使われている標準的な教科書です。Lipski はラテンアメリカのスペイン語の特徴を国別にして記述しています。

2. 言葉が伝わらない

2.1. 対話

授業がうまく行かない

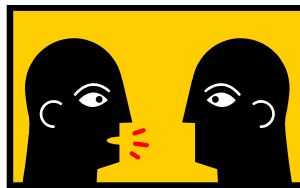
(...)

- ：実は、最近、初級の授業がうまく行かなくてね。学生から何の反応も返ってこないんだ。
- ：僕の授業でも同じだよ。自由な意見や質問などがあるのか聞いてみても、教室は静まりかえっているし…。
- ：教室が静かだといっても熱心に授業を受けているわけではなく、関心は別のところにあるみたいだ。または、そもそも関心の対象がなく、授業も上の空で話を聞いているみたい。
- ：そう、そう。
- ：以前は授業内容を説明し、質問があれば答えて、試験で習得の程度を評価すれば一学期は終わり、というプロセスだったけれど、これが最近うまく機能していないみたいなんだ。何か手だてはないかな。
- ：うーん。
- ：僕の教室へ向かう足が重く感じることもある。君はどう？
- ：僕もだ。…。でも、はじめはそうではなかった。何よりもスペイン語が好きで専攻を選び、卒業してもその研究を続けながら、教室でも好きなことを教えていただけるのだから、こんなに恵まれたことはないと思った。当時は気合いが入っていた。情熱もあった。
- ：若いときはね。それが最近はどうも…
- ：年のせいかな？

- ：それもあると思うけど、どうも環境の変化というか、教室の雰囲気の変化というか、それがあって今では変な閉塞感を感じてしまうんだ。
- ：でも、そもそもスペイン語を教えることは好きだろう。
- ：そりゃあ、学生のほうがやる気を見せてくれたらね。90分間立ち続けていてもぜんぜん疲れない。
- ：僕も授業は好きだ。でもそれが一方通行になっていると問題だ。
- ：まさに一方通行で、こちらからどんどん材料を出しても相手からはそれが返ってこない、という状態が続いている。双方向のコミュニケーションにならないんだ。そもそも現代の高等教育における教師と学生間のコミュニケーションの可能性については、かなり懐疑的な意見もあるようだけど…¹。

コミュニケーションの図式

- ：僕らが学生だったころ、言語学の教科書で最初に出てきたコミュニケーションの図式にこんなのがあった。話し手と聞き手の間に通信回路が設定され、同じ通信コード、つまり僕たちのケースでいえば、同じ言語を使うことによって、コミュニケーションが成立する、という図式だ。



¹ ブリュデュー他（安田尚訳）1999『教師と学生のコミュニケーション』藤原書店

- ：僕らが最初に課題図書として勉強したブルームフィールドの『言語』で説明されているジャックとジルの話を思い出したぞ。確か、おなかをすかしたジルが何か言うとジャックがリンゴをとってあげる、というシーンだった。
- ：そこでブルームフィールドの考え方によれば、「意味」とは言葉の発話と実地の出来事から成る、ということだったね。
- ：なんだか意味そのものと、発話・出来事とは別なんじゃないかな、と思ったけど。
- ：うん、それは当時の行動主義的な「意味」のとらえ方であって、現代ではもっと人間の認知や感情的な側面を重視しているよね。
- ：あの当時のブルームフィールドも、ここで「もしジルが内気であるとか、ジャックとおもしろくないことがあったとかすれば、空腹でありリンゴを見ても何も言わないかも知れない。もしジャックがジルに悪感情を抱いていたら、ジルに頼まれてもリンゴを取ってやらないかも知れない」と言って、「ことば行為が起こること（および、[…]その言い回し方）と、それに前後する実地の出来事の全経過とは、話し手と聞き手の全経歴に依存している」という前提で自説を展開していた²。
- ：その通りだ。そもそも、話し手と聞き手の間に通信回路があり、共有された言語を使えばコミュニケーションが成立する…、なんて信じられない。そんな単純な問題じゃない、と思う。

共感

- ：それよりも複雑なことが別にある、というわけかい？
- ：複雑なこと、というより、根本的に重要なことがある、と思うんだ。そのような図式に欠けているのはシンパシーという

² ブルームフィールド（三宅鴻・日野資純訳）1962.『言語』大修館書店 p.27。

要素だ。スペイン語にすれば *simpatía* だから、これは「共感」と訳してもよいだろう³。さっきのジャックとジルの間にも共感がなければコミュニケーションが成立しないんじゃないかな。



- ：スペイン語で「シンパティコ」*simpático* というと「感じがいい」という肯定的な評価になるし。
- ：たしかにシンパティコと言われれば、スペイン語が少しぐらいできなくても、コミュニケーションはスムーズになるよ。
- ：僕も、それってとても大事だと思う。もしかしたら動詞の活用変化よりも大事かもしれない。
- ：活用形が正しくできていても相手の共感が得られなければ、言葉は伝わらないからね。
- ：逆に、動詞活用がかなりいいかげんでも相手の共感を得ていれば、言葉は通じている。
- ：そうだとしたら、コミュニケーションの成立条件の基本的な部分に、この「共感」をあげるべきではないかな。
- ：先の図式のどこに共感を置けばよいのかな。少なくとも音声は物理的に聞き手の聴覚器官に達していると仮定すると、聞き手の脳内に共感があればよいのかな。
- ：聞き手の共感も大事だけれど、そもそも話し手に共感がなければ、言葉が出てこないだろう。
- ：結局両者に必要だということ？

³ <ギリシャ語：sym「共に」：pathos「感情」

- 〇〇：それだけでも足りないと思う。話し手と聞き手に共感があっても、話題に共感を感じていなければ、やはりコミュニケーションは成立しないだろう。
- ：そりゃそうだ。関心がないことを聞き続けるのはつらいし、ましてや関心がないことを話し続ける、というのはもっとつらい。
- 〇〇：また、コミュニケーションの場にも共感がないと…。いくら関心があることでも、こんな場面で話す気にも聞く気にならない、ということもある。
- ：コードにも共感がないとね。僕はメールでの言葉使いに共感が感じられないので、そこでは事務的な事柄だけに限って伝達しているんだ。
- 〇〇：ということは、コミュニケーションの要素すべてに共感がなければ、コミュニケーションは成り立たない、ということになるんじゃないかな。
- ：だから、根本的な問題だということか。

教師と学生の間

- 〇〇：うん。同じことが教師と学生の間にも起きているんじゃないかと思う。授業がうまくいかないときは、やれ、教師の力量だの、やれ、学生のモチベーションだの、教材の質だの、教室のIT化だの、ということが問題にされがちだけれど、本当に一番大切なことは何か、と考えてみると、最終的に共感じゃないかと思う。それがなければ、これらはすべて無駄になってしまう。逆に共感があれば、これらの問題は少しぐらい未解決でも、けっこううまく行く。
- ：結局よく言われるように「あの先生はいい先生だ」、「あの先生が好きだ」ということが学習を動機づけ、学習効果に大きく影響する、ということかな。

- 〇〇：そのように慕われている先生がいることは確かだね。うらやましいと思うけど。
- ：現実には「学生にやる気がないのだから、こちらがどんなに努力しても無駄だ」と考えている教師もいるみたいだし…
- 〇〇：共感も相互的だから、自分が共感を感じていなければ相手も同様に自分に共感を感じないだろう。スペイン在住の森本祐子先生はその著書の中でこんな経験を話しているよ。講演会か何かで自分が真面目に話しているのに聴衆がなぜかみんなニコニコしている。変だと思って司会者に聞いたところ、「あなたがニコニコしながら話すから、思わず同調してニコニコしちゃう」、という返事だったそうだ⁴。
- ：それは対人関係だけでなく対物関係でも同じで、たとえばスペイン語に共感を感じない人には、スペイン語からの接近はないんじゃないかな。「好きこそものの上手なれ」ということは確かにその通りだと思う。嫌いなことはなかなか身につかないし、上達しないよ。
- 〇〇：うん。われわれも外国語という教科の魅力を学生にうまく伝えられるといいんだけどね。
- (…)

『ドン・キホーテ』の方法

- ：ところで全然関係ないけど、このわれわれの会話はなんとなく不自然な気がするんだけど。何か特定の目的や結論に向かって、最初から組み立てられた「やらせ」のような感じがする。どうしてかな。
- 〇〇：気づいた？これはこのプリントの著者が序文にも書いているんだけど、「外国語の学習・獲得」という主題に向かって

⁴ 森本祐子 2008. 『会話にスパイス más más おいしいスペイン語』NHK 出版.

論を進めるには対話式が便利で書きやすいと思ったからだよ。著者がこれまでいろいろな人と話して意見を聞いたり、本で読んだり、自分で気づいたりしたことがあるそうだけど、それを僕たちに代弁してもらいたいんだそうだ。いいかな。

□□：そういうことか。いいよ。一緒に考えながら対話を続けていこう。何回か対話をして、それで一つの教材の内容になるといいね。

〇〇：書物の中でその書物そのものを話題にする、というアイデアだよ。

□□：その手法は四百年も前にミゲル・デ・セルバンテスがやっているから、とくに新奇ではないけどね。

〇〇：そうそう、あの近代小説の嚆矢となった『ドン・キホーテ』⁵だね。

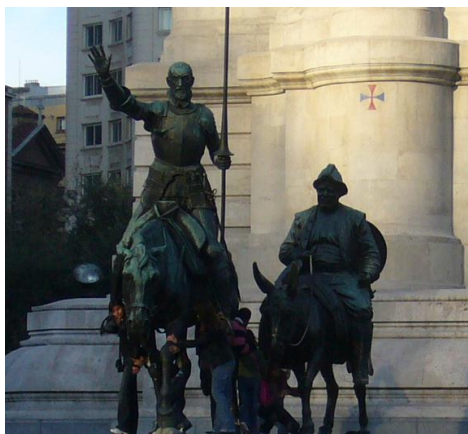
□□：ここでは君がドン・キホーテで、僕がサンチョ・パンサかな。あの小説の中でも二人には共感があるから会話は絶妙だね。われわれの会話も共感と内容のあるものにしたいね。

〇〇：さて、そろそろ授業の時間だ。君は「テキストの科学」の演習だったね。僕は「スペイン語教育・学習法」の講義だ。演習ならば眠る学生は少ないだろう？講義はね、単調にすると学生はバタバタとうつぶして倒れていくんだ。

□□：演習でも同じだよ。今度また話す機会があったら、眠くならない授業とはどのようなものか、一緒に考えてみたいものだね。

〇〇：うん。そうしよう。

⁵ セルバンテス作・牛島信明訳『ドン・キホーテ』（全6冊）岩波書店。



Don Quijote y Sancho Panza, Plaza de España, Madrid

2.2. 授業

読解法

今日の授業では文法訳読法について考察しました。教科書の読解に入る前に少し読み方の方法を考えてみましょう。

予備知識

外国語の学術的な文献を読みこなすには、単語と文法の知識の他に、扱われている内容についての予備知識が必要です⁶。でも、私たちは新しい未知の内容を勉強しているのですから、予備知識が必要だと言われても困ってしまいます。そこで、はじめに本の内容で前提とされている知識が私たちにあるかどうかを判断しなければなりません。本の内容が専門的すぎてさっぱりわからない、ということでしたら、はじめにその分野の入門書を読んでおかなければならないでしょう。

⁶ 学術的な文献ではなく、小説や随筆などの文芸作品は読み方がかなり違います。これについては文学の授業や文学概論の本で勉強してください。

ここで、教科書として取りあげた本は学部学生向けの入門書なのですが、スペイン語で書かれているので、ちょっとハードかもしれません。でも、困難な部分は授業で解説しますから安心してください。

構成

それから、外国語の文献を読むとき、もう一つ大切なことがあります。それは、全体の構成を構造的に分析する力を養うことです。1冊の本を最初の1ページの1行目からすぐ取りかかって読み進めるのではなく、はじめに本全体がどのような構成になっているのかを把握することを勧めます。本には必ず目次がありますから、これが地図の役割をします。この地図にしたがって、パラパラとページをめくってみましょう。それぞれの場所にどのような内容が書かれているのか、おおよその見当をつけておくとよいでしょう。

それぞれの章や節が何というテーマを扱っているのか、全体の中でどのような位置にあるのか、そしてそのテーマが、前後のテーマとどのような関係になるのかを知っておくと、私たちは本の中で迷子にならないはずです。いきなり、最初の行から単語を調べはじめたりすると、暗闇の中でトンネルを掘っているような感じになると思います。

それでは、目次を見てください。目次の意味がわかったらそのページを開けて確認してください。この作業を少しやってみましょう。

(…)

序文・「はじめに」

次に本の内容に入ります。ふつうはいきなり本文があるわけではなく、序文や「はじめに」という前書きなどがあります。これを読み飛ばす人がいますが、ぜひしっかりと読むことを勧めます。なぜなら、ここに、本が書かれた意図、どのような読者を想定しているか、そして本全体の構成などが示されているからです。序文や前書きを読んで、これから始まる本文の内容の概観をつかんでおくと、その内容がずっとわかりやすくなります。授業開始時のオリエンテーションと同じです。

段落とキーワード

さて、今日の実習では、段落の読み方について一緒に考えてみたいと思います。一つの段落には、基本的に一つの内容が展開されているはず⁷。そこで、一つの段落全体が扱っているテーマを一つ書き出してみましよう。段落内に書かれてある言葉がキーワードになることが多いです。これをマークしたり、余白に書き出したりしておくと、後で読み返すとき便利です。なお、このプリントではキーワードを太字にして段落のはじめに載せてありますから、参考にしてください。たとえば、この段落のキーワードは「段落とキーワード」です。

⁷ また、複数の段落が一つの内容になることもあります。しかし、逆に、一つの段落が複数の内容になることは、少ないでしょう。内容が複数になるときは改行して段落を分けるのがふつうだからです。

段落全体の構造：句読点

それでは、はじめの段落を見ることにしましょう。でも、まだ訳し始めないでください。ここでも段落全体の構造をつかんでおくことが大切です。まだ内容がわからないのですが、とりあえず、句読点に注目しましょう。皆さんがノートに書き写した本文には、ピリオド punto (.), コンマ coma (,), コロン dos puntos (:), そしてダッシュ raya (—)がありますね。それを、赤のボールペンでマークしてください。他にも重要な句読点としてセミコロン (punto y coma)があります。これらの句読点を目印にして、全体の構成をつかんでおくのとよいでしょう。ピリオドは文の単位を示し、コンマは一定の概念のまとまりを示し、コロンは具体的な説明を示し、ダッシュは挿入された内容を示します。

文の続き方：接続詞

次に、いよいよ内容の理解に入ります。句読点の切れ目を意識しながら、最初はゆっくりと読解を進めていきましょう。そのとき、文や節のはじまりにある接続詞に注意してください。接続詞は論の進め方を示していますから、読解のための重要な標識になります。マークしましょう。たとえば、o は機械的に「または」と訳してすませるのではなく、A or B で選択しているのか、A すなわち B ということと言い換えているのか、を考えなくてはなりません。表面的に対応する日本語を探すよりも、文中で果たしている役割を考えるべきです。

さあ、いよいよ内容理解の段階です。文の構造を意識し、単語や句の意味を理解し、わかりやすい日本語に翻訳しましょう。訳文を読む人の立場を考えて…。

訳文の比較

プロジェクターに私の訳文を映します。以下、解説をしていきますから、自分の理解・訳文と比較しながら、気づいたことを余白にメモしてください。

(…)

活動：相互学習

さて、これで本文の訳読を終えます。次に、本文の理解を確かめる作業として相互学習をしましょう。隣に坐っている人でペアまたは3人のグループを作ってください。一人に教師の役をしてもらい、もう一人（または二人）に学生の役をしてもらいます。教師は学生に本文の構造と意味を教えてあげてください。2つめの段落については、役割を交替してください。4～5分の時間を使います。その結果を今日の活動記録に書いてください。

(…)

最後に、今日の活動をして気づいたことをレポートに書いてください。授業はこれで終わります。



2.3. レポートから

相互学習についての意見

- 生徒同士が教えあうことによって、わからないことを補うことができました。

- 教師として説明をしてみて初めて自分がわかっていないことがわかった。
- このような経験ははじめてで、新鮮だった。おもしろい。これからもやってみたい。
- 教えたり、教わったりして知識が定着した感じだった。
- 自分個人だけで納得するのではなく、ペアの相手と意見を交換していくことで答えの導き方を見つけることができた。
- 生徒同士だと間違えていても気がつかないことがあるのだが、授業の内容のノートを見ることで確認できた。
- 教師側がきちんと理解していないといけないので、責任を感じて、がんばるようになった。
- 自分では構造と意味を理解していたつもりですが、いざ説明しようとする、それがうまくできなかった。
- 相互学習をすることで、文の内容がよく記憶されているように感じた。
- 説明しながら、自分の中で論理を組み立てていることがわかった。
- 論理的な思考方法を、ただ考えるだけでなく、実際に声に出して思考を実行している相手や自分の姿を見ることができた。
- ・友達に教わるより、先生に教わる方が正確に覚えられるし、教え方も先生のほうがスムーズだと思う

3. 枠組みを作る

3.1. 対話

(…)

□□: 先週の「スペイン語教育・学習法」の講義はうまくいった？

○○: う～ん。ちょっとね。とにかく、教科書の最初の段落から、かなり難解だったので苦労したよ。僕の訳文の日本語もずいぶん不自然だったし…。学生もちゃんと理解できたかどうか…わからない。とにかく学術的なスタイルなので、教科書といってもまるで論文みたいなんだ。君の教材は何？

□□: 僕の授業は「テキストの科学」ということで、映画のシナリオを読んでいるんだけど、スタイルはまったく口語体で、俗語もたくさん出てくるので、これも説明するときは苦労する。教室で教えていいのか、どうかわからない。でもスペイン語の現実だということ、理解してもらっている。

読み方

○○: 論述文とシナリオでは読み方が違うね。論述文だと論理的な構成があるから、その目次などによって構造を把握しながらの読解になるけれど、シナリオだと場面のシーケンスを見ていくことになるよね。

□□: そうだ。はじめから全体の構成なんかわかってない。そもそも目次だってないし。シナリオや小説ができあがる時も、たぶん、最初にプロットはあるんだろうけれど、その場その場で生成されていく過程が大事なんだと思う。

○○: 逆に学術的なスタイルでは全体の整合性が重視されるので、それぞれの部分が全体の中でどのような位置にあるのかを

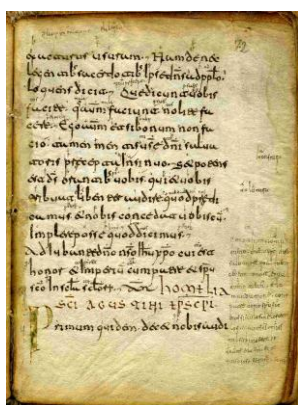
意識して書かれているわけだし、それを読むときは全体の議論の構成を考えていかないと迷子になってしまう。

□□：そうそう。いきなり読み始めると、最初は単語をよく調べたり、赤線を引いたりしているんだけど、途中で迷子になって、数ページでやめてしまうことがあるよね。

○○：古本屋さんで見かける洋書には、そのような書き込みが多いんだ。僕の書棚にある本もそうになっている本が多いけど…

□□：そうそう。最初だけががんばっている…。でも続かない。そうならないようにするのはどうしたらよいのかな。

○○：うん。『サンミリャン注解』 *Glosas Emilianenses*⁸には書き込みだらけだね。中世の修道僧たちががんばってラテン語のテキストを読んでいるとき、ラテン語の意味を当時の話し言葉で書きこんでいるから、これが貴重な歴史的資料になっている。



『サンミリャン注解』（王立歴史アカデミー提供）

□□：これは最後まで書き込みがあるよね。

○○：とにかく全部読むことが修道僧の使命だったんだと思う。モチベーションも高かったんじゃないかな。僕なんかそんな

⁸ 10世紀にスペイン語で書かれた最初の文献。

ことができないから、読了すべき本と参照すべき本に分けて
いるよ。

- ：小説なんかは読了すべきだけど、辞書や参考書は最初から
最後まで一気に通して読む物でもないしね。
- ：うん。それから「パラパラ読み」もよくやるなあ。
- ：とくに図版が多い本…。
- ：そういうの、楽しいからね。
- ：そして気になったり、興味があつたりするところだけを読
んだり…。でもこれって、あまり勧められない読書法じゃな
いかな。理解が表面的になるから。
- ：ケースバイケースだよ。「パラパラ読み」は、とにかく最
初に全体をざっと見通すのによい方法だと思う。本全体の構
成や枠組みがわからないと、個別の内容の意味や意図もわか
らないことがあるし…。
- ：そうそう。言葉の意味がわかっても、なんでここでそんな
ことを言っているのか、意図がわからない、ということがあ
る。
- ：僕は文学作品を読んでいるときに、そんな気持ちになるこ
とが多いんだ。意味はわかるんだけど、意図がわからない。
作者の意図が最後までわからないことがあるよ。
- ：うん、とくに純文学はね。大衆小説ならばよくわかるんだ
けど。映画でもそういうことがある。「えっ！、なぜここで
終わっちゃうの？」って感じ…。
- ：多様な解釈が可能だから…。作品は作者だけのものでなく、
読者や鑑賞者も参加して作り出しているんだと思えばいい
んじゃないかな。
- ：なるほど。そうだとすると、たしかに文学や映画など芸術
作品の読み方は論述文とずいぶん違うね。

ネイティブの先生

〇〇：そう、違う。僕らが学生だったころ、とにかくいろいろなテキストを読まされたよね。その読み方がよくわからなかったの、とにかく最初からできる範囲でがんばった。読んでいるうちにスペイン語の感覚も身についていく、と信じて…。

□□：そうそう。とにかく、本格的な文章を多読することが大事だった。でも、なかなか…。

〇〇：なかなか…ね。大変だったよね。なかなかできなかった…。僕は翻訳を見ながら『ドンキホーテ』を3回通読したけれど、その時スペイン語の実際的な能力が向上した、という印象はあまりなかったな。なにかすぐには表面に現れないような潜在的な力がついたんじゃないかな、というような感じだった。実効性がすぐに感じられたのはスペイン人の先生の授業だったと思う。



□□：それから、教師ではないけれど一緒にスペイン人のレッスンを受けたよね。あれはたしかに良かった。

〇〇：うん、それから、スペイン人の先生の妹さんが日本に来たとき東京案内なんかして…。

- ：あれは楽しかったなあ。あのとき大学で習ったスペイン語が本当に通じるんだ、って実感した。本当に感動した⁹。
- ：うん。日本人の先生の授業では文法の体系を学び、ネイティブからは実際の会話の姿を知ったね。
- ：両方が連携していると理想的だよね。僕らの大学ではなかなかそれがむずかしい。
- ：同じ教材を使うといいんじゃないかな。教材が共通していれば、必然的に連携すると思うけど…。
- ：それがね、ネイティブの先生は僕らのやり方、つまり文法項目順の配列だとやりにくい、むしろ文法よりも会話中心でやりたい、文法を意識しているとアウトプットができないから、と言うんだ。
- ：うん、それもわかる、わかる。僕も文法を意識しすぎると、話なんかできなくなる。むしろ会話の例文をたくさん覚えたほうがよい、と思ったことがあるよ。
- ：僕は今もそう思っているけど…。

会話の例文

- ：うん、会話の例文を覚えることは確かに大事だけれど、僕はそれをリストにして覚えるのが苦手だね。たまたま、そんな例文を使う機会があれば、まさにピッタリした表現になるんだけど…。
- ：ドンピシャリ、でも、なかなかそんな場面に出会わない…。
- ：そうそう、むしろコミュニケーションはそれぞれの人の関心にそって自然に流れるのだから、そのコンテキストから抜き出した例文は、あまりいきいきとしていない感じで、覚え

⁹ 関口一郎『「学ぶ」から「使う」外国語へ』（集英社新書：2000, p. 189-192）は「生まれて初めて外国語で普通の人と普通の会話をした経験」がとても貴重であることについて語っています。

るときも機械的な丸暗記になってしまう。それがなかなかつらい作業になる。僕なんか全然うまくいかない…。

□□：え〜と、例文は丸暗記するものではないの？

○○：たしかに試験のためには暗記すべきだと思うけど、実用のためには丸ごと暗記するよりも、それを応用できる力のほうが大事だと思うけど…。そもそも、いつか出会うかも知れない場面を想定しながら勉強するよりも、どんな場面にも応用できるようにしておくほうがいいんじゃないかな。

□□：なるほど。でも、それってどんな教育・学習方法になるのかな。

○○：うん、僕が考えていることを今度、またゆっくり話すよ。今、次の授業のテキストの読解を準備していて、その使い方を考えているんだ。

記憶法

□□：材料は何？

○○：スペイン語圏の広がりについてなんだけど、スペイン語を公用語にしている国が 20 か国あるよね。スペイン語必修の学生ならこれを全部知っていることが必要だと思うんだ。



□□：うん、これは暗記しておかないと。また、丸暗記か…。

○○：丸暗記ではつらいし、うまくいかないんじゃないかな。関心と時間と練習量が十分にあればできるだろうけど。

3 枠組みを作る

- ：そう、小学生はポケモンの登場人物を全部覚えられるからね。あれはすごい迫力だった。
- ：でも、大学生にはそんなに時間がないし、それぞれ忙しいし…。それに、大人としての記憶法があるんじゃないかな。
- ：う～ん、たとえば？
- ：たとえば、地図を使う。
- ：なんだ、当たり前だと思うけど。
- ：それが、僕の以前の授業の経験ではそうでもないんだ。スペイン語圏 20 か国を取りあげたテキストを読んだ後で、それらの国名を紙に書いてもらおうと、思いついた順番で書く人が圧倒的に多いんだ¹⁰。
- ：はじめから 20 か国全部あげられる人はいないだろうね。アフリカの赤道ギニア共和国の公用語がスペイン語であることはあまり知られていないし。



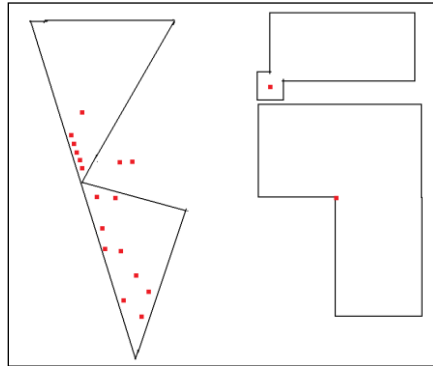
赤道ギニア共和国の首都マラボ：港と町並み

- ：うん、それでも 19 か国を並べることができる人はほとんどいない。

¹⁰ 今回の授業では、35 名の出席者の中の 5 名が地図を思い描きながら記入し、残りのほとんどの人は思いついた順番で書いていました。その結果、10~15 か国の国名をあげられた人と 16~20 の国名をあげた人が半分ずつに分かれる、という状態でした。

- ：そこで地図の登場というわけだね。
- ：うん、スライドで地図と国名を映し、それをノートに書いてもらおう。その後でテストすると結果はほとんど満点ばかりだったよ。
- ：なるほど、確かに地図という「枠組み」（フレーム）があると、記憶の作業が機械的な丸暗記でなくなるよね。丸暗記だと失敗が多いけど、あらかじめ枠組みがしっかりしていれば、たしかに成績が向上するだろうな。でも、成績が上がったのは、一度テストをして、その後地図学習を導入してからもう一度テストしたからじゃないかな。
- ：うん、二度目のテストは有利に働くのは確かだけれど、実は地図学習をしないまま二度目のテストをすると、あまり成績はあがらないんだ¹¹。
- ：なるほど。とにかくリストを丸暗記してもだめなんだなあ。
- ：うん、このことを一般化すれば、外国語能力を高めるためには、例文をたくさん暗記するよりも、文法の枠組みを理解して応用する方がよい、ということにならないかな。
- ：ちょっと飛躍があるような気がするなあ。単純な国名のリストを暗記することと、複雑なコミュニケーション能力を身につけることは、かなり違うんじゃないかな
- ：うん、確かにかなり違う。でも僕は何か共通する原理があるような気がする。
- ：僕もそんな予感がするんだけど、また今度ゆっくり話そう。もう授業開始5分前だから失礼するよ。
- ：僕も準備しよう。略地図はこんなのでいいのかな…。

¹¹ 今回の地図を使ったグループは「実験群」と呼びます。一方、比較するケースの対象者（地図を使わない）を「コントロール群」と呼びます。実験の効果を厳密に確かめるには、このように二つのグループを比較しなければなりません。

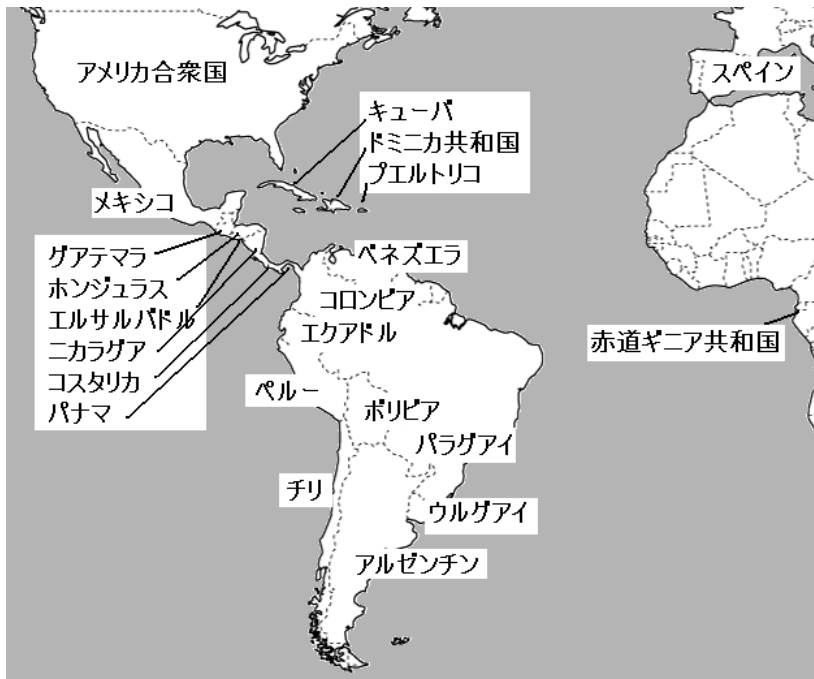


3.2. 授業

スペイン語圏の国々

今日読んだテキストは、スペイン語圏広がりについて扱っています。スペイン語はスペインだけでなく、南北アメリカ大陸の多くの国々、アフリカの赤道ギニア共和国で公用語として使用されています。

3 枠組みを作る



テキストではフィリピンについても触れられていますが、現在スペイン語はあまり使用されていません。でも、次の写真を見てください。これはフィリピンの南の島、ミンダナオ島サンボアンガという都市にあるピラール砦の遺跡を訪ねたときにとった写真です。



フィリピン・サンボアンガ・ピラール砦



「ここにゴミを捨ててください」

その遺跡の中で、上のようなドラム缶を見つけました。ここに **AQUI BUTA EL BASURA** と書かれています。これはラテンアメリカのスペイン語 **AQUI BOTA LA BASURA** 「ここにゴミを捨ててください」とよく似ています¹²。サンボアングで話されている言語はスペイン語ではないのですが、スペイン語から生まれた新しい言語です。

ピジン語とクレオール語

この遺跡ピラール砦は当時のイスラム教徒の攻撃から町を防衛するために築かれたのですが、そのとき集められた現地の人たちがお互いに言葉が通じないので、片言のスペイン語を操ってコミュニケーションをしていました。この状態の言語をピジン語と言います。そして、その子供たちはピジン語を母語にします。これが新しい言語が生まれた瞬間です。このようにして生まれた新しい言語をクレオール語と言います。世界には各地にクレオール語が存在します。

¹² スペインでは **botar** 「捨てる」ではなく **tirar** が使われます。

枠組みを使った記憶法

さて、このようなスペイン語の広がりや新たな言語の誕生を見た後で、もう一度スペイン語圏の国々の名前を思い出してみましょう。教科書を閉じてノートに 20 か国の国名を書き出してください。(…)

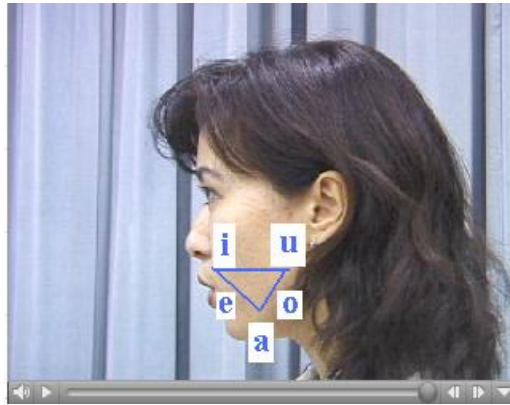
それでは、ちょっと質問します。このようなリストを書き出すときに、いろいろな方法があると思います。たとえば、(a) 思いつくまま、(b) 、(c) 地理的な配列、などがあると思います。皆さんはどの方法を使いましたか。

(【結果】(a) 思いつくまま: 26 名 ; (b) ABC 順またはアイウエオ順: ゼロ ; (c) 地理的な配列: 5 名)

それでは、次にみんなで地図を描いてみましょう。2 名の人に黒板に描いてもらいます。国名も入れてください。皆さんもノートに地図と国名を描いてください。そして書き込みながら国名を覚えましょう。(…)

さて、もう一度、この地図を見ないで国名を書いてください。(…) 結果はいかがでしたか。ノートに気づいたことを書いてください。

言語の学習や研究の面では、この場合の地図のような枠組みをよく利用します。たとえば次の母音の図(写真)を見てください。



母音の発音位置

この図は、スペイン語の5つの母音の位置を示しています。この図を参照すれば、次のような動詞の変化が理解できると思います。たとえば、pedir「頼む」の点過去3人称単数は **pidió**「彼は頼んだ」となりますが、それでは dormir「眠る」の点過去3人称単数はどのような形になるのでしょうか。

pedir : pidió = dormir : X

上の図を見ると、eとiを結ぶ線はoとuの線と平行します。そこで、dormirの点過去は **durmió** であることが予想できます。

規則・体系と事例

言語の教育・学習には概念的な規則や体系を重視する立場と、具体的な事例（例文）に基礎をおく立場があります。どちらも良い点と問題点があるので、一般化していずれかの方法に決定することはできません。むしろどちらの方法も大切にしながら、場面に応じて選択できるようにしたいと思います。たとえば、成人の学習では最初に事例に触れた上で、その後、その規則性や体系的に注目する、という方法が考えられます。また、抽象的な考え方

に慣れていない子供や規則性・体系性を把握することが困難な人には事例を中心にした学習を勧めるべきでしょう。しかし、その時も教師は規則性や体系性を念頭に置きながら指導するほうが、事例をまったくアトランダムに提示するよりも効果的です。教師がそれを意識していると、学習者は自分の中で形成しつつある外国語（「中間言語」とよびます）の中に暗示的な規則性と体系性ができあがり、応用力が増すからです。

3.3. レポートから

地図を使った学習についての意見

- ・視覚と言葉を結びつけることによって、ただ言葉をまとめて覚えるのではなく違った記憶へのアプローチができ、忘れたときに引き出しやすい。
- ・今回の地図に関しては、みんなでパントマイムをするのが効果的だった。
- ・国名を挙げるときに地図を思い浮かべた方が、頭が整理されていて、効率が良いと思いました。
- ・今まで中南米諸国の国々を覚えることは私にはすごく大変で全然できなかったのですが、地図で確認したあとに 20 個すべて書くことができました。本当におどろいて感動しました。
- ・その国がどの辺りにあるのか順番にイメージしながら考えていくと名前も場所も覚えることができ一石二鳥だと思った。
- ・たとえその国の名前を思い出せなくて悩んでいたとしても、「あの国の近く」や「あの国と国の間」、「内陸だったような」という他の情報によって、最終的には思い出せると思った。
- ・地図を思い浮かべながら地名を覚えていると、会話などで地名が話題になったときに、関連する地名についても話すことができる。

- ・地理はすごく苦手でしたが、今日一日でたくさんのスペイン語圏を覚えることができ嬉しいです。
- ・地図にあてはめていくことでパズルのようにどこかの国が欠ければ成り立たなくなるため、必然的にすべてを記憶できた。

活動：協力学習

最後に、今日は「協力学習」の実習をしてみましょう。前回は「相互学習」の実習をしましたが、今回はペアでお互いに地図を見せ合って、地名を話題に出し合いながら記憶する練習をしてください。その結果やご意見をレポートしてください。

協力学習についての意見

- ・人と話しながら学習すると、一人よりも覚えられる気がします。
- ・お互いにわからないところがあると、二人で解決しようと協力し助け合った。
- ・お互いの知識を確かめ合うことで、自分の不完全な点を確認ことができ、また、他の人が不完全な点は、自分の記憶に深く残りやすい。ゲーム感覚で効率よく覚えられる方法だと思った。
- ・自分の思っていることが必ずしも相手も思っているとは限らないし、その反対もありえるので、とても面白いなと思いました。
- ・「協力学習」というこの名前一つ付くだけで、間違えても相手が訂正してくれるし、話しやすい環境の中でできるため、良いと思った。
- ・相手の覚え方を聞いて、自分の学習法の参考になりました。
- ・声を出して相手に言ってみると自分にとって思い出しにくい国がはっきりわかりました。
- ・人は聞いたことよりも実際に自分で見たことの方が印象に残る

3 枠組みを作る

ことがあるように、視覚効果は絶大です。

4. 全体を見る

4.1. 対話

(…)

写真・イラスト・図

- ：このプリント、写真やイラストや図が多いね。
- ：うん、僕写真が趣味でね。イラストも自分の感覚で選択しているんだけど。
- ：著作権とか、どうしてるの？
- ：写真は必要ならば撮影と発表の許可をいただいて自分で撮影したものなんだけど、イラストは使用規定に従ってワープロの素材を使っている。図は自作だ。
- ：それなら安心だね。たしかに文字ばかりのプリントよりも視覚的なイメージがあると、メッセージが伝わりやすいだろうね。楽しんでもらえるし…。
- ：そう、教育・学習は学習者（と教育者）が楽しくないとあまり効果が期待できないからね。

『ルカノール伯爵』

- ：中世説話文学の傑作『ルカノール伯爵』の中も、著者ドン・フアン・マヌエルは「誰でも満足することをよく学ぶので、人に何事かを教えようとする者は、学ぶ者が満足する方法をもって示してやらねばならない」¹³と述べているよね。

¹³ 『ルカノール伯爵』ドン・フアン・マヌエル作（牛島信明・上田博人訳）国書刊行会 1994, p.10.

- 〇〇：たしかに 14 世紀の作者の言葉は現代でも通用する。実際、『ルカノール伯爵』の説話はどれも読んでいて面白いし、原作のそれぞれの説話の終わりには、イラストがあったのではないかと想像できるような言葉が書かれている。イラストが現代まで伝わらなかったのが、とても残念だけれど。
- ：うん、中世のミニチュアの挿絵は、多色で描かれていて見事なものがあるね。
- 〇〇：美術館などで見られるし、今ではインターネットでも鑑賞することができる。
- ：それから、このプリントには図もあるね。自分で描くのは大変なんじゃないかな…。
- 〇〇：いや、パソコンを使えば簡単だし、けっこう楽しい作業だよ。
- ：なんだ、自分が楽しんでいるのか。
- 〇〇：そうそう、僕自身が楽しんでいる。それに、教師本人が楽しくなければ、その相手の学生が楽しくなることはほとんどない、と思う。
- ：うん、でも、教師が楽しくても学生が楽しくないこともあるけどね。
- 〇〇：うん、それは教師が一人でノッテいるときかな。
- ：学生は「なんだ、あいつ」という感じでシラケて見てる…。
- 〇〇：うん、プリントもそのことに気をつけてないと…。

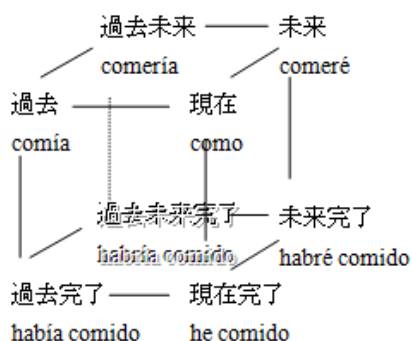


主題としての図版

- ：たしかに写真、イラスト、図など図版は文書に心地よさを添えるのに効果があると思うけど、情報を使えるだけの文書ならば必要がないのかもしれない。文学作品ではとくにさし絵がなくてもいいし、むしろさし絵がないほうが自由な想像ができる。
- ：さし絵があるとそのイメージに縛られてしまう。文学では感性を大切にすし、言語研究では論理が重要だ。
- ：論理的な文章には図が必要になる、ということ？
- ：必ずしもそうだとは限らないけれど、図は論理的な思考を導いてくれるね。
- ：さし絵はどうか？
- ：さし絵だって、議論の主題や背景を示すのに役に立つよ。前のページに『ルカノーラ伯爵』の表紙を載せたけれど、これがあると本の存在が具体的に証明できるし、今、その本のことを話していることが間違いなく伝わる。
- ：僕も、授業で本を紹介するときは、教室に現物を持って行くけれど、プリントの中でも同じことができるわけだ。
- ：現物を示したり写真を見せたりすることは、単につけ足しとしての情報というより、まさに主題そのものである、という重要な役割を果たしていると思う。
- ：このプリントでは囲みや矢印や箇条書きのマークが多いね。
- ：囲みはグループ化するのに便利だし、矢印は関係を示し、箇条書きにすればリストの構造がわかりやすくなると思うんだ。その意味で図は写真やさし絵とは違って、主題というよりも議論の展開を要約している。

サイコロと動詞体系

□□：なるほど…。何コレ？サイコロみたいだけれど。まさか、授業中にサイコロを持ち出すのではないだろうね。



○○：1年生向けの「情報基礎：データ分析」ならばサイコロを使って確率を実感することもできるけどね。でも、これは「スペイン語学習・教育法」の授業だから、もちろんスペイン語についてのサイコロだ。

□□：「現在」、「過去」、「未来」…うーん。なんだコレ？

○○：スペイン語の動詞体系を図式化してみたんだ。学生に聞いてみると、スペイン語文法で一番難しいことは動詞の活用だそう。

□□：僕ら教師もそう思っている。1つの動詞が1つの法・時制で6つの形があり、その変化の仕方が規則形だけでも3種類ある、なんて最初に言ったら誰だって怖じ気づいてしまうよ。

○○：うん、だから、実際の教育現場では、少しずつ出して、少しずつ慣れていってもらっている。

□□：実際に、動詞の活用変化が完璧になるのはむずかしいけれどね。僕らでもいきなり、convertirの接続法過去形1人称単

数は？、なんて聞かれたらすぐには答えられないかも知れない。

〇〇：君は文学が専門だから、動詞の活用形を言語記述用語で答える必要はないし、実際に理解でき、使えればいいんじゃないかな。

□□：そうだ。むしろ僕はそのような動詞の活用形でどのような表現が可能になるのか、どのようにして気持ちが伝わるのか、という実際の側面のほうに興味がある。動詞の活用形をひとつひとつ全部言う場面なんて、現実の世界にも、想像の世界にもないし…。

〇〇：唯一あるのは、教室という現場だけかな。パタンプラクティスではさんざんやらされたからなあ。

□□：あれはすごかった。Yo ... estoy en casa. Tú ... estás en casa, Él ...

〇〇：僕は今でもやっているけれど、ちょっとやり方を変えている。

□□：どうやっているの。

〇〇：このプリントの後で「講義」というのがあるから、それを読んで。

□□：うん。さっきの話題に戻るけれど、このようなサイコロの形をした図式って、役に立つの？

〇〇：このままでは、あまり役に立たない。それぞれの法・時制を学んでいるときに、全体の体系を意識しているかどうかが重要だと思うんだ。つまり、知らない町を地図を見て歩くのと、地図なしで場当たりの歩くとでは、町全体を知る上で効果はかなり違うはずだ。

□□：うん、でも、僕は地図を持たないで歩くほうが好きだ。街角で思いがけず出会う人や建物の魅力が楽しみだし…。迷子になったって、それはそれで面白いし。

- 〇〇：僕は、逆に迷子になりたくないから、地図を見て歩くことが多い。小さな町ならば地図を頭に入れておくこともあるよ。
- ：う～ん。それぞれスタイルが違うね。言語へのアプローチも違う。僕は、構造とか規則とか言うよりも、個々の言葉の個性的な表現を楽しむタイプだし、君は、どうも全体の枠組みを把握しながら規則性などを探っていくタイプだよ。
- 〇〇：文学研究と言語研究の違いかな。
- ：うん、このように簡単に違いをきめつけることはできないと思うけど、何か研究や教育のやり方に傾向があるような感じがする。
- 〇〇：うん、だから面白い。ほかの人の個性や学習スタイルの違いを尊重しなければいけない。自分にとっても、自分のやり方を絶対化しないで、いろいろな考え方ややり方を知ることが、本当に面白いし有益だ。

興味

- ：僕らの会話も、それぞれの意見の押しつけにならないから、うまく進行しているんだ。
- 〇〇：お互いに相手のやり方に興味があるからね。
- ：その興味というのはとても大事だよ。そもそも興味がなければ、会話の意味も失われるし、学習だって効果がなくなるし、…。
- 〇〇：教育だって難しくなる。
- ：うん、でも難しくなっても、とにかく訓練…ということで、パンプラクティス、本当によくがんばったよね。
- 〇〇：うん、がんばった。口は痛くなるし、のどは渴くし、教室内だから飲み物は厳禁だし…。

- ：たしかに、教室では飲食禁止だけれど、自然な外国語学習ではむしろ適度の飲み物ぐらいあったほうがいいんじゃないかあ。
- ：賛成。留学中はカフェテリアでクラスメートと雑談する 때가楽しかったし、そのほうが教室で一方的な講義を聴いているよりも多くのことを学んだような気がする。
- ：学んだことの種類が違うよ。教室の講義では学問的な体系や研究史を教授されたけれど、カフェテリアの雑談ではもっと個人的なことや感覚的なこと、主観的なことを見たり聞いたりした。自分も参加して、お互いにコミュニケーションができた。



再生不可能

- ：うん、だけどね。教室の講義の内容について試験勉強するとき、僕はかなり苦労したんだ。しっかり聴いていたはずなんだけど、いざ自分で復習してみると何も覚えていなかった。講義の直後でさえ何も覚えていなかった。まるで録音したカセットが再生できない、といった感じ。これには愕然としたね。あの講義は何だったんだろう、と思い出そうとしても全然覚えていないんだ。
- ：スペインの文学部の授業では、先生はひたすらに自分のノートを読み上げて、学生はひたすらに書き写す、という作業の繰り返しだった。

- 〇〇：僕ら留学生は、そんなに速く筆記できないから、授業の後にノートを借りて写させてもらった。ノートを借りていたクラスメートは今でも親友だ。
- ：あの BIC のボールペンで、ほとんど全部筆写されていたよね。
- 〇〇：うん、すごかった。でも、情けないことに、そのノートを全部写すことさえできなくて、コピーをしたこともある。
- ：先月、出張でスペインの大学に行ったんだけど、図書館の掲示板に、「君のノートが役に立つ」という張り紙があった。ノートをお互いに貸し借りしているんだ。
- 〇〇：今ではパソコンを使ってデジタルでコピーができるからね。
- ：うん、僕らのころは試験勉強が大変だった。留学生は言葉のハンディがあるから、とくに。
- 〇〇：僕なんか、コピーしたものを覚えようとしても、だめだった。試験問題はいつも1つのテーマについて知っていることを書くことを要求される。2・3行書くと、もう書くことがなくなって困った覚えがある。
- ：同じことをべつな言葉で書き直したりしてね。
- 〇〇：うん、そこで考えたんだ。借りたノートを全部図式にしてみた。そうすると、それが地図のようになって、後はその地図のルートに従って書いていけば、全体が整理できているし、けっこう内容もあるし、いいんじゃないかな、と思ったんだ。
- ：へえー、それで成績はどうだった。
- 〇〇：一度 A をもらったことがあるよ。嬉しかったからクラスメートに見せて回った。みんなも喜んでくれた。そして、今度はノートを貸してほしい、と言われた。
- ：それはすごい。スペイン人の学生が日本人の学生にノートを借りるなんて。
- 〇〇：でも、それが結局だめだったんだ。「君のノートは単語と線ばかり書いてあって、何の意味だかわからない」と言われ

てしまった。結局、それは僕だけが理解できるメモだったんだよ。

□□：他人が書いたメモや手帳を見ても意味がわからないよね。



○○：わかりやすくキーワードを繋げて説明文にしておかなければならない…。でも、そのような説明文は僕のような頭の間には再生不可能になってしまう。

□□：図式にしないと。

○○：そう、図式と説明文との相互作用は個人の頭の中で行われるからね。

□□：このプリントのように、図式と説明文のどちらも示してあれば、理想的だね。そのようなノートならば誰でも欲しがらるだろうな。

○○：うん、誰でもほしがらる。でもそうすると、みんなが同じノートを使うようになってしまうので、個性がなく録音の単なる再生と同じになってしまう。

□□：そんな解答用紙やレポートを読まされるのはつらいね。そこに何かオリジナリティーがあると、嬉しいんだけど。

4.2. 授業

ディクトグロス

今日は「ディクトグロス」(dictogloss)の実習をします。ディクトグロスとは、一定の量の外国語文を理解した後で、それを外国語で再生してみるトレーニングです。はじめに教科書の翻訳練習をします。以下が私が用意した翻訳文です。これから簡単に解説し

ていきますから、皆さんは自分の翻訳と比較して、訂正したりメモを書き込んだりしてください。

理論言語学と応用言語学を区別する境界線は、「純粋科学」と「応用科学」の間、すなわち知識そのものの追究と現実の問題の解決の間に引くことができる。歴史的に見れば、このような区別は自然科学の分野で行われてきたが、社会科学や人文科学の分野ではあまり行われなかった。そこでは(このように区別について)繰り返し疑問が呈されてきたからである。

私たちが応用言語学に認めたそれぞれの特徴を分析し、次にこの研究分野(応用言語学)の概念的な範囲を見よう。

a) 応用言語学は科学的研究である：研究を遂行するための方法や道具の存在が科学としての性格を与える。

b) 応用言語学は理論的活動分野と実践的活動分野の間の媒介である：言語学、心理言語学、社会言語学、教育学で増加する知識の原理を現実の諸問題の解決のために応用する。

c) 応用言語学は学際的分野である：研究対象とする諸問題が多層的・多面的性格をもつために他分野の研究成果を採用することが不可欠である。

d) 応用言語学は言語使用が呈する諸問題の解決を目指す：研究対象とする問題全体および個別の問題はそれぞれ言語の構成要素を共有している。

(…)

これで、教科書の意味の解釈を終わります。それでは、(1)初めに、今読んだばかりの文章がディクトグロスによってどれだけ再生できるかを試してみましよう。本来ならばスペイン語で再生しなければなりません、そのための十分な練習の時間がありませ

ん。ここでは外国語の記憶の問題を扱わず、内容の記憶再生だけを扱いますので、日本語でやってみましょう。隣の人とペアになって、教科書やノートを見ないで、相手の人に話してあげてください。相手の人は教科書やノートを見て、どれくらい再生できているか評価してあげてください。その結果を自分のレポートに書いて、感想や意見も載せてください。

(…)

(2) 次に、少し練習をしたいと思います。リハーサルをしましょう。それではこれから5分間でペアまたは一人で日本語の文章を読み、発表の準備をしてください。

(…)

もう一度ペアになって、今練習したばかりの文章がディクトグロスによってどれだけ再生できるかを試してみましょう。その結果を自分のレポートに書いて、感想や意見も載せてください。

(…)

(3) さて、私が教室を回ったとき、皆さんの中に練習中図を書いていた人が数人ありました。その一人にお願いして、黒板にそれを写してもらいましょう。

←————→

理論言語学	＜区別＞	応用言語学	
純粋科学	＜区別＞	応用科学	
知識そのものの追究	＜区別＞	現実の問題の解決	

＜区別＞歴史的に：

○自然科学 ×社会科学・人文科学

応用言語学：

- 科学的研究る
- 理論的活動分野と実践的活動分野の間の媒介

- 学際的分野
- 言語使用が呈する諸問題の解決

皆さんも黒板を参考にして、自分なりの図式化を試みてください。最後に、もう一度ペアになって、今練習したばかりの文章がディクトグロスによってどれだけ再生できるかを試してみましよう。その結果を自分のレポートに書いて、感想や意見も載せてください。



結果はいかがでしたか？私の予想では、それぞれの効果がずいぶん違ったのではないかと思います。その結果は、私から後で皆さんにレポートします。

私はよく複雑な言語現象を簡単な図式にまとめることにしています。スペイン語文法で一番習得が困難な点は何でしょうか。いろいろな人に聞いてみると、スペイン語の動詞の活用形が一番難しいそうです。私もそう思います。今日は、個々の活用形の問題に入らないで、動詞活用の全体がどのような図式にまとめることができるかを考えてみましょう。

私たちははじめに現在形を勉強します。

現在
como

4 全体を見る

次が過去です。過去形は現在形の左に置きましょう。時間は、ちょうど歴史の年表のように、左から右に進むものとします。

過去 ———— 現在
comía como

次は完了形ですが、これは現在にも過去にもありますから、線を下に延ばして、現在にとっての現在完了形と過去にとっての過去完了形を、それぞれ次のように書いてみます。

過去 ———— 現在
comía como

↓ ↓

過去完了 ———— 現在完了
había comido he comido

それぞれの時制には未来形がありますね。未来形は奥の方向へ伸びる線で示しましょう。

過去未来 ———— 未来
comería comeré

過去 ———— 現在
comía como

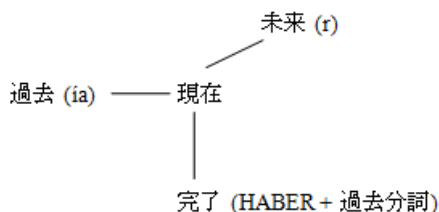
↓ ↓

過去未来完了 ———— 未来完了
habría comido habré comido

過去完了 ———— 現在完了
había comido he comido

このように、スペイン語の全動詞体系は過去に向かう線と未来に向かう線と完了に向かう線で示されます。過去の印は **ia** です。

未来の印は不定詞語尾の **r** です。そして完了の印は **HABER+過去分詞** です。



動詞の時制の名称は、それぞれの形をよく示しています。たとえば、現在完了は現在+完了 (**HABER + 過去分詞**)なので、**haber**の現在形+過去分詞で作られます。過去完了は過去(**ia**)+完了 (**HABER + 過去分詞**)なので、**había comido** になります。未来完了は未来(**r**)+完了 (**HABER + 過去分詞**)なので、**habré comido** になります。そして、この立体形の後ろ側に隠れている過去未来完了は、過去(**ia**)+未来(**r**)+完了 (**HABER + 過去分詞**)なので、**habría comido** になります。

さて、もう一つの過去形、点過去は、この図式に入らないで、独自の位置にあります。特殊な位置にあるので、活用形も非常に特殊です(**comí, comiste, ...**)¹⁴。



¹⁴ 初級の学習者が最初につまづくのが、直説法現在不規則形と点過去です。

接続法は未来も点過去もないので、次の4つだけです。

過去	————	現在
comiera		coma
過去完了	————	現在完了
hubiera comido		haya comido

4.3. レポートから

- (1) [最初] 単語がいくつか頭に浮かんできたただけだった。ただ「〇〇言語学」「〇〇科学」という単語が不正確に出てきた。
- (2) [練習後] 一度目は吸収する、受け止めるのみで精一杯だった。二度目は理解する、説明するという意識のもとで思考したため、大まかな枠組みを自分なりに構築できたと思う。
- (3) [図式化した後] 頭の中だけでの整理（イメージ）より、自らの手を動かして書いてみることにより、より理解できる。「書き出す」ことはやはり大切。頭の中だけだとごまかせてしまう。
- ・（動詞体系）基礎知識の確認など、初期の段階なら活用できそう。

- (1) [最初] 今回の内容は非常にとらえづらく、日本語訳を読んでもいまいち理解するのが難しかった。
- (2) [練習後] 練習をしてから臨むほうが最初の時より少しではあるが、自らも内容をとらえやすく説明できたような気がする。
- (3) [図式化した後] 図式にすることで頭の中で概念的に思っていた事柄がより鮮明に整理される気がした。

・（動詞体系）今までは文法の時制についてただ暗記しただけのぼんやりとした考え方しかなかったが、立方体で図にして体系的に捉えられるようになった。

- (1) [最初] 「応用言語学」とか「自然科学」といった言葉は断片的に覚えていたましたが、ほとんど分かりませんでした。
- (2) [練習後] 何かを覚えるのにももちろん準備は必要だと思うが、応用言語学に関する知識がまったくない状態では準備や練習がかなり厳しいと思った。難しい単語はもともと覚えていて、自分で内容を理解しながら覚えるのが理想的だと思う。
- (3) [図式化した後] ただ文章をだらだらと読んでいるよりも格段に覚えやすくなった。図を思い出しながらアウトプットする効果もあるが、自分で図を書くという作業自体で記憶に残りやすくなったのだと思う。
- ・（動詞体系）とても分かりやすくてびっくりしました。

- (1) [最初] 何も言えなかった。単語レベルで思い出すことはあったが、全体として内容のある文章にすることができなかった。
- (2) [練習後] 80%説明できたけれどいまいち内容を把握できていないという矛盾した状態だったと思う。
- (3) [図式化した後] 大きな枠組みを作ることで説明もしやすかったし、ジェスチャーなどを使って位置関係を示してもらったりしたので、聞いている側も頭の中にイメージが描けてわかりやすかった。枠ができていたので細部を思い出すのも速かった。
- ・（動詞体系）私は今まで普通に覚えていたましたが、こんなにきれいに図になるとは感動です！確かに完了は **haber** など共通点が

それぞれあることに気づいていましたが、図式化したのは初めてです。接続法にも適用できるなんですよと思います。他の図式も自分で作れるような気がするので考えてみようと思います。

(1) [最初] 今学んだ情報なのに、おそらく 10%ぐらいしか記憶していませんでした。内容が難しかったからという理由もあると思います。もしこれが単純なストーリーで印象的だったら完璧とは言わなくても、おおまかな内容を相手に伝えることが出来たと思います。

(2) [練習後] 相手に説明してもらえば理解をより深めることができた。学習というのは予習、練習（復習）によって、より知識として定着するものなんだと思いました。

(3) [図式化した後] 枠組みを用いることによりイメージによる記憶を可能にし、ちょっと難しいことを言っている文章でも分かりやすく、なおかつ全体を把握できたと思います。

・（動詞体系）現在、過去、未来、過去未来が2次元になるという説明は分かりやすい。

(1) [最初] 断片的に単語が浮かび、それでも全体像をつかめてなかったの、10%ぐらいしか言葉にできなかった。

(2) [練習後] 確かに5分練習したら前よりも説明ができたが、内容がまだ理解しきれていなかったの、双方向的に説明し合うことで理解が助けられた。一人より相手がいる方が早い理解になると思う。

(3) [図式化した後] 図式化するとかなりわかりやすくなった。さらに、他の人の図を見ると、図の形は違うが示すことが同じで

おもしろかった。私のペアは図式化に加え、その中の文章を簡潔にまとめて箇条書きにしている、すごくわかりやすかった。

・（動詞体系）時制の図式化によって、動詞の活用は確かに6人称 $X(8+1+4)=78$ 通りあるが、現在形以外の語尾変化は大きく3通りなので、78通りと言えども、それまで複雑でないことがわかった。

(1) [最初] 10%ぐらいは伝えられた。お互い単語とかは少しずつ出てくるが、まとめて話すことができない。

(2) [練習後] 全体を把握してから言えるようになったが、文を記憶しただけで理解しきって伝えられていない。この文を読んだことのない人にとってわかりにくい説明だったと思う。

(3) [図式化した後] 私は(2)の時点で図を書いていたので、(3)では前に出てくれた人のを参考にして更に細かく伝えることができたと思う。やはり、図にして整理することは伝えやすさにつながる。

・（動詞体系）私はすごくわかりやすいと思った。今まで一通りやってきて、何となくふあーっと頭の中で組み立てられるいたものが、図にすることによって明確になったし、点過去が仲間はずれということが明確になった。パターン化することが大切！！

(1) [最初] dictogloss で話を聞いた直後でも、人に伝えられないし、自分でも理解できないのだと感じた。言葉にならず、伝えられず、とてももどかしかった。

(2) [練習後] 練習を5分やっても根本的に自分が理解しきれないことを人に伝えることはとても困難であると感じた。5分間で

文字を頭に「つめこむ」ということはできないのではないかと思った。

(3) [図式化した後] 図式にしてみると理論言語学と応用言語学の区別が絵にしたように頭に浮かぶので効果があると思う。グループ分けして覚えるのが分かりやすく覚えられる方法だと感じた。この方法を練習して繰り返せば、伝えていくことも可能であると感じた。

・ (動詞体系) 一年生の頃、覚える方法として図式で覚えようとしたが、このような立体図にするところには巡りつかなかった。今見てみるとなるほどと納得しやすいし、忘れかけた際はこのように図を浮かべながら答えられればと思う。

(1) [最初] 全文読み通したつもりだったのに、5~10%程しか説明できなかった。説明も断片的で1つの流れとして話すことはできなかった。

(2) [練習後] 全体の50%は伝えることができた。しかし、短時間の練習では自分自身でも教えたいことの概要を理解し、まとめあげることができず、一度目と同じく流れをもって説明することができなかった。

(3) [図式化した後] 図式を描いたことで、3回目は図式を頭にうかべて思い出すことができ、説明の流れを考えることも容易になった。80%は伝えることができたと思う。全体的は把握はここで完全にできたが、細かい部分は図式では省いていたため頭に入りきれなかった。

・ (動詞体系) スペイン語のややこしい時世変化をこのように図式にあらわすことができるのは面白いとおもった。しかし、私にとっては少しわかりにくいおうに思えた。図式がもともと苦手であるのもあるが、時制は立方体ではなく、過去→今→未来、のよ

うなイメージがあるからだと思う。

(1) [最初] 5%くらいしか内容を言えなかった。印象的な単語は覚えていたけれど、内容自体は口で言おうとすると想像以上に理解していないことに初めて気づかされた。

(2) [練習後] 50%ぐらい。覚えなければならぬと分かっているを見ると、(1)よりはかなり覚えていた。

(3) [図式化した後] 図にすると(2)までより格段に頭の中がすっきりし、いい意味で自分のレベルまで簡略できるので非常に効率的な方法だと思う。

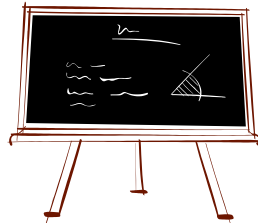
・ (動詞体系) 私は活用が苦手なので、この図は私的にはかなり分かりやすかった。私は数学受験なので他分野(しかも得意科目)に結びつけると、とても頭の中ですっきりとした。

【課題】

教科書以外の材料で L2 (外国語で) ディクトグロスをしてみましょう。そのとき、気づいたことを書きなさい。図式を作成することができるかどうか試してみましょう。テキストの種類(論述文、小説、演劇、など)による違いについて考察しなさい。

5. 変化の仕組みを見る

5.1. 対話



ワード・アンド・パラダイム

□□ : 君の研究室のボードは、いつも数式みたいのが書いてあるね。

○○ : うん、院生と動詞活用形の導出方法をディスカッションしていたんだ。

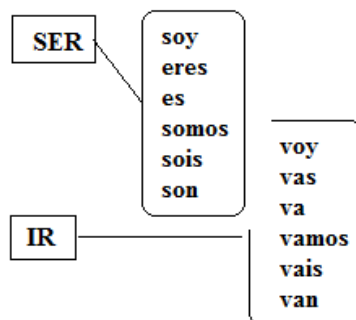
□□ : 君は学生のおかげから数学が得意だったからなあ。

○○ : これ、実は数学というより構造言語学の方法なんだ。

□□ : ふ〜ん。でも記号ばかりだね。

○○ : 言語学は人文科学の中でもっとも自然科学に近い研究分野のひとつだと言われているよ。

□□ : おもしろそうだね。最初の図は何を示しているの。



- 〇〇：うん、これは **SER** や **IR** などの不規則動詞は、6つの活用形をそのまま提示するという方法だ。1つの語(**Word**)から、この場合は不定詞なんだけど、それから活用表(**Paradigm**)の全体をそのまま導くので、**Word and Paradigma** 法と呼んでいる。**WP** 法と訳すこともある。
- ：それって、まったくふつうだよ。僕らも最初にスペイン語を習った方法はこれだったよね。とにかく、活用形を全部言えなくては点数がもらえなかった。「次の動詞の直説法現在の活用形を書け」なんて問題が出たから。
- 〇〇：そう。毎日繰り返し練習したよね。よくがんばった。とにかく基本形の不定詞を見たら、その活用形がすらすら出てくるまで丸暗記した。

アイテム・アンド・アレンジメント

- ：他に方法があるの？
- 〇〇：その次にあるのが第2の方法だ。

HABLAR	COMER	VIVIR
habl-a-s	com-e-s	viv-e-s
habl-a	com-e	viv-e
habl-a-n	com-e-n	viv-e-n

- ：それぞれ、2人称単数、3人称単数、3人称複数の形だね。
- 〇〇：これらは丸暗記するよりも、活用形を要素に分解して、それを組み合わせる方式のほうが楽に覚えられる。それぞれ、語根(**habl, com, viv**)、幹母音(**a, e**)、人称語尾(ゼロ, **s, n**)で統一できるからね。
- ：これは僕も意識していたよ。全部丸暗記はなかなかできないからね。
- 〇〇：この方式は要素をアイテム(**Item**)とし、それを並べるということで、**Item and Arrangement** (**IA** 法)と読んでいる。

- : IA 式の良さはわかるし、それを何となく意識はしていたけれど、僕はやっぱり、何度も唱えて練習したよ。丸暗記だった。
- : 要素に分解したり、それを並べたりできても、活用形が完成品として瞬間的に出てこなければ役に立たないからね。でも、最初にこのような構成法を知ってから練習するのと、いきなり無闇に丸暗記するのとでは、かなり効果が違うと思うよ。
- : HABLAR, COMER, VIVIR のような規則変化は他にも無数にあるから、この3つだけ暗記してもしようがないしね。
- : 教師もいろいろな動詞を使って練習させているよね。そのときは IA を意識しておいたほうが良いと思う。

アイテム・アンド・プロセス

- : そうすると、丸暗記しなければならない WP と、構成を意識する IA があるわけだ。不規則動詞だと WP で、規則動詞だと IA がいいのかな？
- : うん、基本的にはそうだと思う。でも、細かく見ると、そう簡単には分類できないんだ。たとえば、さっき見た WP の SER 動詞でも somos, sois, son などは so-mos, so-is, so-n のように分解できるよね。
- : たしかに人称語尾 mos, is, n は、IA で処理する hablar, comer, vivir の場合と同じだね。
- : 人称語尾だけを言うならば、eres だって-s を持っているし…。というわけで、WP の中にも IA 式の構成を意識するといいいんじゃないかな。一方、IA の構成を考えると、実は 1 人称単数形が難しくなるんだ。
- : それぞれ 1 人称単数は、habl-o, com-o, viv-o だよな
- : これらには幹母音(a, e, i)がないんだ。そこで、次の公式を立てなくてはならない。

規則(1): 幹母音→ゼロ, + o / 1 人称単数

斜線 (/)の後は条件を示しているんだ。これで、1 人称単数のとき、幹母音をゼロにしてから o を加える、という意味になる。たとえば、次のように変化する。

habl-(a) + o → habl-o

com-(e) + o → com-o

viv-(i) + o → viv-o

○○ : ふ～ん、何だか数式みたいだね。こんなことをして何かいいことあるの？ なんだか、よけい混乱しそうだけれど…。単純に **hablo, como, vivo** と覚えればいいんじゃないの？

□□ : うん、実はとてもいいことがある。つまり、1 人称単数形はすべての規則変化で o をつける、という構成法と、幹母音は 1 人称単数の人称語尾がつけば脱落する、というプロセスを意識しておけば、3 つの規則変化の活用が 1 つだけになるんだ。

○○ : えっ？ 変化のタイプを 3 つ覚えなくてもいいの？

□□ : うん、全部、次の人称語尾を知っていれば OK だよ。

人称語尾

1 人称単数 : -o

2 人称単数 : -s

3 人称単数 : ゼロ (何もつけない)

1 人称複数 : -mos

2 人称複数 : -is

3 人称複数 : -n

- : なんだ、これ、人称語尾じゃないか。
- : そう、人称語尾だけを覚えればいいんだ。つまり、すべての規則動詞は不定詞の *r* の代わりに、この人称語尾をつければいいんだ。hablar ならば habla に *o, s, ゼロ, mos, is, n* をつける、comer ならば come に *o, s, ゼロ, mos, is, n* をつける、という具合だ。
- : そして、1 人称単数ではさっきの公式を使うわけだね。
- : そうだ。このような活用形の導出方法を **Item and Process, IP 式** と言うんだ。
- : **IP 式** かあ…、おもしろそうだね。全部の活用形を丸暗記するのではなくて、一定のルールで解決しようとしているんだね。
- : そう。その「ルール」という概念がポイントだ。さっき見た **IA** では全部要素に分解したから動詞は語根+幹母音+語尾のように3つの要素に分けたけど、**IP** にすれば要素が2つになる。語根+幹母音を「語幹」とすれば、すべての形が語幹+語尾になるんだ。
- : そうすると、hablar ならば **habl-a-r** でもなく、また、**habl-ar** でもなくて、**habla-r** とするんだね。
- : うん、**habla-r** とするほうが便利だと思うんだ。この **habla** を元にして、それに人称語尾をつけ、さらに規則(1)を適用すればいいんだ。
- : でも **vivir** のような **IR** 動詞はどうするの。**vivi** に *o, s, ゼロ, mos, is, n* をつければいい、というわけにはいかないよね。
- : うん、これには次のルールがある。

規則(2): 幹母音 *i*→*e* / [最終音節・無強勢]

これは幹母音の *i* は最終音節で強勢がないときは *e* に変化する、という意味だ。このルールが適用されると、

vivi-s → vives

vivi → vive

vivi-n → viven

となる。

- : う～ん、vivis, vivi, vivin か…。なんだか変だなあ。
- : うん、なぜ変かというと、スペイン語では最終音節の無強勢母音 i が例外的だからだ。これらは上の規則によって、vives, vive, viven となる。一方で次は i のままだ。

vivimos

vivís

これらは i に強勢があるから、さっきの規則が適用されないんだ。

- : う～ん。vivís は vivi + is → vivís とかいう規則になるんだろうね。
- : よく気がついたね。スペイン語は同じ母音が連続するときは、1 つになる、という一般的な規則があるからね。canta + autor → cantautor, punta + arenas → Puntarenas とかね。

学習スタイル

- : なるほど…。こうした規則を知っていれば、丸暗記をしなくてもいい、というわけか。
- : そうだ。暗記すべきところは WP や IA の知識として押さえておく、そして、一般的な規則の部分はその適用の仕方を練習しておく、という方法なんだ。このように活用形の構成を意識化して学習するのと、丸暗記方式とどっちがいいのかな？

- : あんまり理屈を考えるのが嫌いな人は丸暗記になるだろうし、仕組みやプロセスを理解したい人は意識化するんじゃないかな。
- : 個人はそれぞれ学習スタイルが異なるからね。
- : 僕はどちらかというと活用形の奥に秘められた理由を考えるよりも、出てきた形をそのまま覚えるほうがいいと思う。
- : 僕は、構成やルールを考えるタイプだ。どちらが正しい、という問題じゃないと思う。個性を尊重したいね。ただ、これまでの教授法はほとんどが WP に基づいて、一部で IA が適用されていたけど、IP はほとんど無視されてきたというのが僕の印象だけど、どうかな。
- : うん、確かに。こんな規則は僕自身も気づかなかったよ。規則(1)は漠然と意識していたと思うけど、規則(2)はまったく知らなかった。
- : 僕も知らなかった。でも、ラテン語やスペイン語史を学んだり、構造言語学や生成音論論を勉強したりすると、スペイン語教育に応用できるのではないかと気づいたんだ。

活用表の提示

- : でも僕はやっぱり動詞の活用は、そのまま何度でも繰り返し練習すべきだと思う。あまり理屈にこだわってはいは、実際の運用の場では役に立たないし…。
- : 最近よく考えるんだけど、外国語学習はこういった動詞の活用のようなパラダイム全体を明示的に覚えることが必要なのだろうか。むしろ、パラダイムは潜在的にできあがってればいいのであって、実際の運用を重視するのなら、運用する場面でそれぞれの活用形が使えればいいんじゃないかなあ。
- : 言語研究をしている君の考え方は、よくわからないときがある。さっきまでは活用表の出し方について3つの方式を

考えていたよね。でも今は活用表そのものを否定するの
かい？

- 〇〇：いや、活用表を否定するのではなくて、それが潜在的に形成されていればいい、と思うんだ。外国語を理解するときや表現するときに活用形が使えればそれでいいんじゃないかな。
- ：でも、最初に活用表を覚えていなければ活用形が出てこないよ。
- 〇〇：僕は、最初に活用表を明示的に覚えるのではなくて、活用表は外国語使用の中で潜在的に形成されていく、という方法を考えているんだ。
- ：それって、コミュニケーション・アプローチだよな。留学したときに、さんざんやらされた…。楽しかったけれど、あまり体系的じゃなかったなあ。
- 〇〇：うん、最近の外国語教育の流れがそうなっているんだけど、これには、文法・訳読法があまりうまくいかなかった、という反省が込められている。
- ：うん、それはわかるけど…。でも、君は文法のパラダイムとか要素とか、ルールとか、考えているわけだよな。それなのに、それを教育の場で最初に明示的に示そうとはしないのかい？
- 〇〇：うん。システムとかルールというのは、仮説なのでなかなか決定的、というわけにはいかないんだ。個人の学習スタイルや教育スタイルが異なることもあるし。こういった仮説は仮説として認めておけばいいんであって、最初に覚えること、という強制はしない…。
- ：たしかに IA の要素分解や IP の規則なんかは、仮説に見えるけれど、動詞の活用表は現実に存在するのだから、仮説じゃないと思うよ。WP は仮説なんかじゃない。

- ：WP は表面的な語形をそのまま提示するから、現実的に見えるけれど、あのような表のパラダイムが言語の認知的な体系として存在しているのかどうかはわからないよ。たとえば、それぞれの法・時制で全人称のパラダイムがあるのではなくて、法・時制を貫く形で1人称システム、2人称システム、3人称システムがあったが現実的かも知れないし。
- ：でも教室では、直説法現在からはじめるよね。
- ：うん、教室ではね。でも現実の運用では、直説法現在と接続法現在が平行しているように使われていることがよくある。
- ：形もよく似ているし…。
- ：外国語を学ぶとき、実用のための運用力も大事だけれど、言語の仕組みやルールについて考察することも大切だと思う。そうした考察によって、自分のやり方が絶対だ、という独断ではなく、もっと柔軟な考え方や姿勢ができる…。そうしたら、外国語を学ぶ方法や意義も変わってくるはずだ。
- ：なんだか、数学の公式を丸暗記する、というより、公式そのものの考え方を示そうというのと似ているなあ。君は初級の授業で、IA や IP を展開するのかい？
- ：丸暗記は思考停止につながるからね。僕はそれができない。今日はこのことを「スペイン語教授法」の教室で話してみよう。いつか「スペイン語初級」でもやってみたい…。
- ：君の授業の履修者のフィードバックが読みたいなあ。
(…)



5.2. 授業

前回の実習では、スペイン語の動詞体系全体の構成を立体図にしてみました。今回の実習では、直説法現在の活用形の教授法と学習法を比較してみましょう。

動詞の活用形

はじめに、皆さんに、どのようにして動詞の活用形を学習してきたのか、思い出してもらうために、5分間ぐらいグループディスカッションをします。次に、グループの代表者にディスカッションの内容を発表してもらいます。

(…発表)

たしかに、動詞活用を学ぶのは大変でしたね。日本語の動詞には人称による変化がないので、このようにクルクルと回るように変化するタイプの言語（屈折型の言語）を習得するのは私たちにとって非常に困難です。スペイン語圏の人は、逆に日本語のようにベタベタと次々に要素がつながっていくタイプの言語（膠着型の言語）が困難なようです。また、中国語は変化しない要素がポンポンと孤立しているような言語（孤立型の言語）なので、中国語圏の人は、スペイン語のようにクルクルと変化するタイプの言語もベタベタとつながるタイプの言語も、習得がむずかしいのです。でも、仕組みをよく理解して、よく練習すれば、むずかしくても習得できます。

さて、動詞の活用形や名詞・形容詞の変化形などや、語形成法など、言葉の形式面を研究する分野が「形態論」*morfología* です。今日は「動詞形態論」*morfología verbal* について少し考えてみましょう。

丸暗記

先ほどの発表で、動詞の活用形を毎日繰り返し練習した、ぜんぶ続けて出てくるまで練習を繰り返した、という発表がありました。たとえば、*ser* という動詞ならば、*soy, eres, es, somos, sois, son* というように練習したと思います。これは 1 つの代表となる語、たとえば不定詞をもとにして、それについて全部の形を活用表（パラダイム）として提示する方法で、ワード・アンド・パラダイム(*Word and Paradigm*)、略して **WP** と呼ばれます。とくに *ser* や *ir* などの動詞は **WP** で処理するのがふつうです。つまり、丸暗記するのです。

ser	ir
soy	voy
eres	vas
es	va
somos	vamos
sois	vais
son	van

分解

一方、*hablar* や *comer* などの規則動詞は、次のようにそれぞれ規則的な構成になっています。

hablar	comer
habl-o	com-o
habl-a-s	com-e-s

habl-a	com-e
habl-a-mos	com-e-mos
habl-á-is	com-é-is
habl-a-n	com-e-n

そこで、これらの動詞は丸暗記するよりも、共通の要素を取り出して、その並べ方を練習する方法が考えられます。hablar の a はほとんどの活用形にも現れていますし、comer の e も同じです。また、-s, -mos, -is, -n は hablar と comer に共通しているので、そのことも意識しておくといよいでしょう。

このように活用形を要素に分解して、その並べ方を練習する方法はアイテム・アンド・アレンジメント(Item and Arrangement)、略して IA と呼ばれています。ここでアイテムとなるのは、habl, com のような「語根」raíz と、a, e のような「幹母音」vocal temática と、そして o, s, ゼロ, mos, is, n という「人称語尾」terminación personal です。

ser や ir などの不規則変化は WP が適しており、hablar や comer などの規則変化は IA が適していると言われています。でも、ser と ir の活用形をよく見ると、2 人称単数で-s, 1 人称複数で-mos, 2 人称複数で-is, 3 人称複数で-n がありますから、これらは IA で見たのと同じです。覚えるときには、このことを意識しておくといよいと思います。一方、IA で扱った hablar, comer の 1 人称単数は hablo, como ですから、幹母音が見つかりません。このことについては次で扱います。

規則

さて、次に、第 3 の方法、アイテム・アンド・プロセス(Item and Process)、略して IP を説明します。ちょっとわかりにくいかもしれませんが、よく理解してください。次のような動詞を例にしてみましよう。

5 変化の仕組みを見る

pensar	contar
<u>pi</u> enso	<u>cu</u> ento
<u>pi</u> ensas	<u>cu</u> entas
<u>pi</u> ensa	<u>cu</u> enta
pensamos	contamos
pensáis	contáis
<u>pi</u> ensan	<u>cu</u> entan

ここで、下線部の **ie** と **ue** に注目すると、次の規則が働いていることがわかります。

規則(1) : e → ie / [強勢]

規則(2) : o → ue / [強勢]

これは、語根の **e** と **o** が強勢のあるところで、それぞれ **ie**, **ue** となる、という意味です。pensar や contar のようなタイプの動詞は、WP で丸暗記するよりも、また、IA で要素に分けるよりも、一定の規則を意識して練習するほうが得策です。つまり、要素にたいして規則をプロセスとして規則を適用するのです。たとえば、pienso は IA によって penso という形が出来上がりますが、これに規則(1)を適用して pienso とするわけです。pensamos にも規則(1)が適用されますが、e の部分に強勢がないので e は ie になりません。スペイン語の強勢は、1 人称複数、2 人称複数では幹母音に置かれ、それ以外は語根に置かれます。

さて、さっき扱った IA による規則変化の覚え方を、もう一度見てみましょう。今度は vivir という動詞も含めます。これで、ar 動詞、er 動詞、ir 動詞がぜんぶ揃います。

hablar	comer	vivir
habl-o	com-o	viv-o
habl-a-s	com-e-s	viv-e-s
habl-a	com-e	viv-e

habl-a-mos	com-e-mos	viv-i-mos
habl-á-is	com-é-is	vivís
habl-a-n	com-e-n	viv-e-n

これらを丸ごと全部暗記した人と、丸暗記するよりも一定の要素に分解して、共通する要素を意識しながら覚えた人がいると思います。みなさんはどちらのタイプですか。どちらにするかは、個人の学習スタイルによって異なるはずですが、言葉の仕組みなどをあまり考えるのではなく、とにかく丸暗記してしまう、というタイプの人と、丸暗記が嫌いなので言葉の仕組みがどうなっているのか知りたい、というタイプの人があります。

1 人称単数

ここで、このような規則変化にもアイテム・アンド・プロセスを適用してみたいと思います。問題は1人称単数形です。ここには幹母音の a, e, i がありません。そこで、次のプロセスを適用します。

規則(1): 幹母音→ゼロ, + o / 1 人称単数

斜線 (/)の後は条件を示しています。この規則は、1人称単数のとき、幹母音をゼロにしてから o を加える、という意味です。そこでこの規則を適用すると、次のように変化します。

habl-(a) + o → habl-o
 com-(e) + o → com-o
 viv-(i) + o → viv-o

このようにすると、実はとてもいいことがあります。つまり、1人称単数形はすべての規則変化で o をつける、という構成法と、幹母音は1人称単数の人称語尾がつけば脱落する、というプロセ

スを意識しておけば、3つの規則変化の活用が1つだけになるんです。全部、次の人称語尾を知っていればOKです。

人称語尾

- 1 人称単数：-o
- 2 人称単数：-s
- 3 人称単数：ゼロ（何もつけない）
- 1 人称複数：-mos
- 2 人称複数：-is
- 3 人称複数：-n

これはいろいろな活用語尾に使われる人称語尾ですね。さっき見た IA では全部要素に分解したから動詞は語根＋幹母音＋語尾のように3つの要素に分けましたが、IP にすれば要素が2つになります。語根＋幹母音を「語幹」とすれば、すべての形が語幹＋語尾になります。hablar ならば habl-a-r でもなく、また、habl-ar でもなくて、habla-r とします。この habla を元にして、それに人称語尾をつけ、さらに規則(1)を適用すればよいのです。授業では、「不定詞の r を取り除いて、人称語尾をつけましょう」と指示します。

IR 動詞

実は、ここで、もう1つ規則を適用しなければなりません。vivir のような IR 動詞は、たとえば vivi に o, s, ゼロ、mos, is, n をつければよい、というわけにはいかないからです。これには次のルールが適用されます。

規則(2): 幹母音 i→e / [最終音節・無強勢]

これは幹母音の i は強勢がないときは e に変化する、という意味です。このルールが適用されると、

vivi-s → vives

vivi → vive

vivi-n → viven

となります。vivis, vivi, vivin というのはスペイン語として変です。なぜ変かという、スペイン語では語末の無強勢母音 i が例外的だからです。ほとんど存在しません。これらは上の規則を適用することによって、vives, vive, viven となります。方で次は i のままです。

vivimos

vivís

これらは i に強勢があるから、さっきの規則が適用されません。vivís は vivi + is → vivís となります。スペイン語は同じ母音が連続するときは 1 つになる、という一般的な規則があるからです。たとえば、canta + autor → cantautor, punta + arenas → Puntarenas などがあげられます。

いかがでしょうか。みなさんは WP 派ですか？IA タイプですか？それとも IP に興味がありますか？ちょっとグループ内でディスカッションをしてください。

(…)

それでは、皆さんの意見をレポートに書いて提出ください。授業はこれで終わります。

5.3. レポートから

(1) WP

- 学習者は IP が一番効率良く覚えられるのではないかと思った。WP はただ単純に何も考えずそのままを覚えるのに対し、

- IA は1つ1つのパーツに分解する作業が時間がかかるし、理解するのに混乱する気がした。
- IA はパーツに分けて考えるのですが、それは思い出すのに一番時間がかかってしまうのではないのでしょうか。
 - 基本的に活用を覚える時は IP が多いですが、不規則やどうしても覚えることができない動詞はまるごとそのまま WP で頭にたたきこんでいます。IA の方法で覚えたことはありません。分解することが大変そうなので、それならばそのまま覚えた方がいいというのが私の考えです。
 - 私は普段は WP で活用を覚えています。分解して考えていられないし、不規則が出てきたときは適用できないので、すべて覚えています。実際、この動詞には IP、この動詞には IA がよいという判断ができない気がする。
 - よく使う動詞や不規則動詞は WP の方法を用いるのが一番やりやすい。しかし、忘れてしまった時や見たことのない動詞が出てきた時は IA を用いていると思う。
 - 私はあまり区別せず、そのまま覚える WP なので IA, IP のように理論的に考えることはしなかったと思う。しかし考えてみると IP で覚えても結果 WP のようになるのではないかと少し思った。例えば IP で動詞の規則変化を覚えようとする、hablar, comer, vivir は母音をおとして o をつけるという規則なのだが、結果 WP のように覚えるしかないのではないかと考えた。
 - 今もし、活用を覚えろと言われたら、どのように覚えたら一番効率がよいかを考えてから覚えると思うけれど、一年のときはただただ必死に口に出して覚えていたような気がします。

(2) IA, IP

- o → ue になるなど不規則な活用は覚えるのが大変で、何回もくり返して覚えるしかないと思っていましたが、きちんとプロセスを理解すれば簡単に覚えられるな、と思いました。1年生の時にもプロセスを教えてほしかったです…
- WPのようにひたすら覚えるよりは、IA や IP の方が効率的だと思います。基本的なことを覚えて、+例外を覚えた方が覚えられるものが増えて良いのではないのでしょうか。
- 形態論の考え方を使えばスペイン語の動詞の活用を覚えるのが少し簡単になると思います。人それぞれやり方はあるだろうが IA や IP を使うと効率的になると思いました。また普段勉強している時にも無意識的にこれらの方法を使っていることがあるのではないかと思いました。

(3) 総合

- もう今では簡単な動詞は WP、パッとでてくるので、IA や IP はちょっと面倒くさいなと思ったが、パッとでてくるまでの過程に絶対 IA や IP を用いて覚えてきたと思う。
- 不規則の活用形じゃ WP で1つずつ覚えていくしかないと思ったが、活用形にも語尾には一定の規則があるから、最初の1人称単数の形を覚えれば IP でも IA でもできると思った。
- poder や hacer などの単純でない動詞は、むしろ WP の方法で覚えてしまった方が速いような気がしましたが、先生のお話を聞き、規則を覚えてしまったほうが速いような気もしません。多用される動詞はむしろ覚えてしまったほうが速いかもしれないと思いました。
- 実用レベルで考えると WP で覚えないと、すぐには出てこない。しかし、活用を忘れてしまった時には IP や IA で覚えて

いないと辞書などで調べないかぎり思い出せないと思うので、**WP+IP**, または **WP+IA**, **WP+IP+IA** で覚えておくのが一番良いと思う。

- 私は **WP** は非効率だと思うので、**IA** が好きだが、語学の学習においてはどれも必要で、段階によって使い分ける事が大切だと思う。段階としては **IA**→**WP** →**IP** が良いと思う。まったく知らない時に **WP** で全て覚えようとしても、**IP** で理論をたくさん言われても覚えられないので、**IA** でコツをつかみ、次に **WP** で反復し、覚えてきたら **IP** で例外などをじっくり覚えると、効率が良いと思う。

6. 変化の仕組みを詳しく見る

6.1. 対話

digirieron か digerieron か

□□ : 何の本を読んでるの？

○○ : うん、これマドリード在住の森本祐子先生の『会話にスペイン más más おいしいスペイン語』(NHK 出版, 2008)だよ。すごく参考になる。

□□ : たとえば？

○○ : うん、たとえば p.44 の¿Y...?の使い方。「それが何か？」とか「それがどうした？」とかいうときの表現だ。

□□ : ¿Y...?

○○ : うん、そのページでスペイン人同士が **digerir** 「消化する」の点過去3人称単数形を **digirieron** というか、**digerieron** というか、スペインの大学の「クラスが真っ二つに分かれ、大論争が展開した」ということだよ。



A: En la línea tres, dice ‘digirieron’.

B: ¿Y...?

A: Creo que la forma correcta es ‘digerieron’.

□□ : **digerir** だから、**digerieron** じゃないのかな。

6 変化の仕組みを詳しく見る

- 〇〇：でも、これは語根母音変化動詞だよ。直説法現在 1 人称単数は **digiero** となるから。
- ：あ、そうか。じゃあ **digierieron** かな？う～ん、何だか変だぞ。
- 〇〇：正解は **digirieron** だ。sentir と同じタイプだ。
- ：それがわかっているならば、**sintieron** と同じようにして **digirieron** だと確信が持てただけれどなあ。残念。でもネイティブのスペイン人ですらむずかしいのに、僕らが簡単に言えるわけがないよ。
- 〇〇：確かに難しいね。学生は肝心の **sentir** だってあやふやになることがあるので、どうにか規則で説明したいところだ。
- ：先週見た直説法現在の規則だけれど、あのような規則はこのようなケースに適用できないの？

強勢の規則

- 〇〇：うん、規則の効果が一番わかりやすいのは、先週にも見たとおり、たとえば、**pensar** や **contar** のような語根母音変化動詞だ。**pensar** や **contar** は次のように変化するよね。

pensar

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	piens -o	piens -e	pens-é
Tú	piens -as	piens -es	pens-aste
Él	piens -a	piens -e	pens-ó
Nosotros	pens-amos	pens-emos	pens-amos
Vosotros	pens-áis	pens-éis	pens-asteis
Ellos	pien -san	piens -en	pens-aron

contar

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	<u>cu</u> ent-o	<u>cu</u> ent-e	cont-é
Tú	<u>cu</u> ent-as	<u>cu</u> ent-es	cont-aste
Él	<u>cu</u> ent-a	<u>cu</u> ent-e	cont-ó
Nosotros	conta-mos	cont-emos	cont-amos
Vosotros	contá-is	cont-éis	cont-asteis
Ellos	<u>cu</u> ent-an	<u>cu</u> ent-en	cont-aron

- : 君、書くのが速いね。
- : 僕らはいつも授業でやっているから慣れているけど、学生たちは大変だと思う。レポートを見ていると悲鳴みたいな声が聞こえてくる。
- : 僕らも最初は悲鳴をあげていたよ。
- : でも、たとえば上の表なんだけれど、これらの活用形の語尾は IA 式でつければよいわけだし、語根の変化も一定の規則に従っているから、覚えるのは比較的楽だったよ。
- : うん、確かに強勢がある音節で e は ie と割れるし、o は ue と割れる、という規則だね。
- : うん、言語研究者は「割れる」とは言わずに、「二重母音化する」というけれどね。それは次のような規則の式で書こう。

強勢の規則(1): e → ie / [強勢]

強勢の規則(2): o → ue / [強勢]

- : 確か、斜線(/)は、規則が適用されるとき条件を示す、ということだったね。
- : そう。動詞の活用変化の全体を見て、強勢が語根にあるのは、基本的に現在形だけだよ。直説法現在と接続法現在…。

6 変化の仕組みを詳しく見る

- ：他は全部語尾に強勢があるね。
- ：現在形の Yo, Tú, Él, Ellos の部分で強勢が語根にくる。
Nosotros と Vosotros は語尾に強勢があるけどね。
- ：そのことはとても大事なことから、僕は口をすっぱくして言っているんだ。
- ：うん、僕も強調している。スペイン語の変化は動詞も、名詞も、形容詞も、基本的に強勢は移動しない、ただし動詞の現在形は別だ…。
- ：名詞でも carácter, espécimen, régimen が例外的で複数形 caracteres, especímenes, regímenes だから強勢が移動するよ。
- ：うん、その3つは例外中の例外だから取りあえず無視しよう。でも、動詞の現在形の強勢の移動は例外というよりも規則的だよな。
- ：うん。強勢の位置がわかっているならば、それに従って「強勢の規則」を適用すればいいんだね。
- ：そう。この規則のいいところは、活用形全体がこの規則を知っていれば OK、ということだ。たとえば、点過去では語根に強勢がないから二重母音化しないし、接続法過去だって二重母音化しないし、現在分詞だって、過去分詞だって二重母音化しない。
- ：これを知っているか、知っていないかで、覚えなければならないことの量がたしかにかなり違って来るね。強勢の位置に注意して、語根に強勢があるときに母音が割れる、と覚えておけばいいんだ。でも、presentar や controlar などの e や o は割れないよね。
- ：presentar や controlar などは規則変化だからね。そこで、不定詞と直説法現在 1 人称単数の対で pensar - pienso, contar - cuento のように二重母音化しているかどうかは鍵になるんだ。
- ：たしかに規則変化ならば、presentar - presento, controlar - controlo のように母音は割れないからなあ。

6 変化の仕組みを詳しく見る

〇〇：僕は直説法現在 1 人称単数を「直現 1 単」と呼んでいるんだけれど、教室ではこれの重要性を強調している。

□□：賛成だ。ところで、pedir などの動詞はどう扱うの？

〇〇：ちょっとボードに書いてみよう。

pedir

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	p̄id-o	p̄id-a	ped-í
Tú	p̄id-es	p̄id-as	ped-iste
Él	p̄id-e	p̄id-a	p̄id-ió
Nosotros	ped-imos	p̄id-amos	ped-imos
Vosotros	ped-ís	p̄id-áis	ped-isteis
Ellos	p̄id-en	p̄id-an	p̄id-ieron

□□：実はこれ、困っているんだ。僕も規則を立てて説明しようとしたことがあって、e→i という変化が起こるところは pensar と同じように強勢のあるところ、としたら、接続法現在ではぜんぶ i になっているし、点過去では Él と Ellos だし、なんだかメチャクチャになってしまった。そこで、これは仕方がないから丸暗記で覚えさせているよ。

語尾 i の規則

〇〇：うん。pedir の語根母音変化については、僕は次の規則を立てている。

語尾 i の規則(1): e → i / [語尾が単母音 i 以外]

□□：ふーん。はじめて見る規則だけれど。何だい、この「語尾 i の規則(1)」というのは？

6 変化の仕組みを詳しく見る

- ：「語尾 i の規則」はもう 1 つから、ここでは(1)とつけておこう。pedir の活用表をよく見てごらん。直現 1 単は pido だよ。このとき、語尾は o なので「単母音の i 以外」だから、e は i に変化するんだ。
- ：そんなこと、聞いたことないなあ。
- ：まあ、聞いてくれ。次の pides も語尾は e なので「単母音の i 以外」だから、e は i に変化する、次の pide も同じ。ところが、pedimos, pedís では ir 動詞の語幹に強勢があるから語尾に単母音の i が現れる。そうすると、「語尾 i の規則(1)」が適用されないので、語根母音は e のままなんだ。最後の piden は語尾が e だから語根は i になる。
- ：へえ～。でも、何だかわかりにくい規則だなあ。pedir が pido になる、というだけの話なのに。
- ：うん、直説法現在だけならばね。ところが、この表にある接続法現在なんかは、全部 pida になっているし、点過去なんか、このままではとても複雑だよ。
- ：うん、だから丸暗記しなければならなかった。
- ：正直に言うと、僕は丸暗記ができなかったんだ。あんな練習は耐えられなかった。見事な落ちこぼれだった。



- ：それで、ルールを探したのかい？
- ：うん、語尾に注目すると、さっきの「語尾 i の規則(1)」があることがわかった。接続法現在は全部語尾が a だから単母音の i ではないので、規則が適用されて i になる。点過去では、ir 動詞なので語尾が í, iste, ío, imos, isteis, ieron となるよ

ね。この中で、単母音 i は Yo, Tú, Nosotros, Vosotros のところだけにあるから、pedí, pediste, pedimos, pedísteis となる。一方、Él と Ellos は語尾が ió とか ieron になるので、単母音ではなく二重母音だから「語尾 i の規則(1)」が適用されて語根が i になっている。

- ：その規則は、他の活用形でも全部に適用されるの？
- ：うん、確かめたから大丈夫だ。接続法過去は pidiera, 過去分詞は pedido, pidiendo, 未来形だって、pediré…
- ：なるほど。それにしても覚えにくい規則だなあ。
- ：うん、そこで不定詞と直現 1 単の形 pedir - pido をよく見てもらうことにしている。pedir は語尾に単母音 i があるから語根は e、pido はそれが無いから語根は i、と覚えてもらうんだ。語根と語尾のどちらかに i がある、としてもいい。
- ：不定詞と直現 1 単を出すのは、pensar - pienso, contar - cuento のやり方と似ているね。それにしても、語尾に i があるときは語根が e ということに、何か理由付けがあるといいんだけどなあ。規則ってたいいそれなりの理由があるよね。pensar - pienso, contar - cuento の場合は、強勢という力が加わって母音が割れる、というイメージがあるし…。



異化作用

- ：うん。それは歴史言語学の観点からも正しい観察だ。でも、この「語尾 i の規則」は歴史的には複雑になるので、僕は説明しないようにしている。ただ、学習上はこんなことを考えてもらってもよいかもしれない。同じ母音が続くとき、それ

らが混同しないように、一方を異なる母音にすることがあるよ。このような現象を「異化作用」と呼んでいるんだ。たとえば、y という接続詞だけれど、これは母音 i の前で e になる。inglés y español だけれど español e inglés となる。

- ：なるほど。pedir の e と i の組み合わせもそれに似ている、というわけか。接続詞 y はたとえば agua y hielo のように、ie の前では e にならずに y のままだしね。これも pidieron のケースと似ているなあ。え〜と、それから sentir はどうするの？

2つの規則

- ：うん、sentir は次のような活用変化だ。

sentir

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	s <u>ient</u> -o	s <u>ient</u> -a	sent-í
Tú	s <u>ient</u> -es	s <u>ient</u> -as	sent-iste
Él	s <u>ient</u> -e	s <u>ient</u> -a	s <u>int</u> -ió
Nosotros	sent-imos	s <u>int</u> -amos	sent-imos
Vosotros	sent-ís	s <u>int</u> -áis	sent-isteis
Ellos	s <u>ient</u> -en	s <u>ient</u> -an	s <u>int</u> -ieron

- ：これが、一番むずかしいんだ。sentir は pedir よりもむずかしい。
- ：二重母音化もあるからね。でも、これは何も新しく勉強することはないんだ。
- ：え！一番むずかしいのに…。どうして？
- ：だって、これまでの規則を適用すればいいんだ。強勢の規則(1)と「語尾 i の規則(1)」をどちらも適用する。じっくりやってみよう。直説法現在の Yo siento, Tú sientes, Él siente, Ellos sienten では強勢が語根にあるから、語根が二重母音になって

6 変化の仕組みを詳しく見る

いる。接続法現在も同じことだ。Yo sienta, Tú sientas, Él sienta, Ellos sientan.

- ：うん、僕ははじめは sentir というのは pensar と同じだと思っていた。
- ：教科書によっては、はじめはそのように教えているものもある。点過去や接続法過去を勉強するようになってから、別のルールを立てて…。
- ：いいや、僕はルールなんか考えず丸暗記だった。
- ：ここで、「語尾 i の規則(1)」が強勢のない位置で適用されるんだ。直説法現在 Nosotros sentimos, Vosotros sentís では、語尾に単母音の i があるから語根は e になっている。一方、接続法現在 Nosotros sintamos, Vosotros sintáis では、語尾が単母音の i でないから語根に i が現れる。
- ：まるで、鬼(i)がいないときに洗濯をしている(i)、って感じだなあ。語尾に i がいないときに、語根に i が現れ、語尾に i があるときは、語根は e に戻っているね。だとすると直説法点過去もなるほどぜんぶ「語尾 i の規則(1)」のとおりになるね。
- ：うん。森本先生の本に書かれていた digerir も点過去は digirieron となるのは、語尾が ie だからだと思う。
- ：僕は sentir の sintieron と同じだとわかれば、それから類推できるんだけどなあ。
- ：その方法もいいね。でももし、sintieron を忘れてしまったら？たとえば、digerir の現在分詞は？これも sentir の現在分詞がわからない人は困るだろうなあ。sentiendo, sintiendo, sientiend, 一体どれにすればいいんだ！、とか。
- ：君のやり方だと、語尾が ie だから、つまり単母音の i でないから、sintiendo となる、というわけだね。digerir も digiriendo かあ…。
- ：convertir も convirtiendo, mentir も mintiendo…

e: ie: i = o: ue: u

□□ : 最後に、dormir は？

○○ : うん、dormir の活用表を書いてみよう。

dormir

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	<u>duerm</u> -o	<u>duerm</u> -a	dorm-í
Tú	<u>duerm</u> -es	<u>duerm</u> -as	dorm-iste
Él	<u>duerm</u> -e	<u>duerm</u> -a	<u>dur</u> m-ió
Nosotros	dorm-imos	durm-amos	dorm-imos
Vosotros	dorm-ís	durm-áis	dorm-isteis
Ellos	<u>duerm</u> -en	<u>duerm</u> -an	<u>dur</u> m-ieron

□□ : やっぱり、書くのが速いね。

○○ : これは強勢の規則(2)と、次の「語尾 i の規則(2)」を適用するんだ。

語尾 i の規則(2): o → u / [語尾が単母音 i 以外]

□□ : 今度は o が u に変化するんだね。そして、その条件はさっきの「語尾 i の規則(1)」と同じだね。

○○ : うん、これもじっくり見てみよう。直説法現在の Yo duermo, Tú duermes, Él duerme, Ellos duermen では強勢が語根にあるから、語根が二重母音になっている。接続法現在も同じことだ。Yo duerma, Tú duermas, Él duerma, Ellos duerman.

□□ : うん、僕ははじめは dormir というのは contar と同じだと思っていた。

○○ : 教科書によっては、はじめはそのように教えているものもある。点過去や接続法過去を勉強するようになってから、別のルールを立てて…。

6 変化の仕組みを詳しく見る

- ：いいや、僕はルールなんか考えず丸暗記だった。
- ：ここで、「語尾 i の規則(2)」が強勢のない位置で適用されるんだ。強勢のない位置で適用される。直説法現在 *Nosotros dormimos*, *Vosotros dormís* では、語尾に単母音の i があるから語根は o になっている。一方、接続法現在 *Nosotros durmamos*, *Vosotros durmáis* では、語尾が単母音の i でないから語根に i が現れる。
- ：なんだか、さっきの *sentir* のときの対話をコピペしたような感じだね。
- ：まったく同じ原理だからね。*sentir* の語根母音 e, ie, i の変化は *dormir* の o, ue, u の変化に完全に対応するし…。
- ：e と o は開母音で、i と u は閉母音、そして ie と ue はどちらも二重母音…。きれいにパラレルだね。
- ：言語のシステムは構造的にとってもきれいなんだ。きれいな構造は、学習するとき枠組みとして示してあげるといいんじゃないかなあ。

不定詞の語尾と活用パターン

- ：うん。確かに。でも個々の動詞がどのタイプの語根母音変化をするかは、暗記しなければならないよね。
- ：僕は暗記ができないタイプなんだ。記憶能力が劣っているんだと思う。
- ：暗記しないで、よく活用パターンがわかるね。
- ：うん。僕は次のようにしている。

6 変化の仕組みを詳しく見る

	不定詞	直現1単	強勢規則	語尾 i の規則	不定詞語尾
(1)	pensar	<u>pi</u> enso	○	×	ar, er
(2)	contar	<u>cu</u> ento	○	×	ar, er
(3)	pedir	<u>pi</u> do	×	○	ir
(4)	sentir	<u>sie</u> nto	○	○	ir
(5)	dormir	<u>du</u> ermo	○	○	ir

□□：この表の意味は、これまでの君の説明でだいたいわかるけれど、最後の列にある「不定詞の語尾」はこれまでの話になかったね。

○○：うん、これは pensar のタイプと contar のタイプは ar 動詞と er 動詞に限られる、ということだよ。

□□：えっ？知らなかったなあ。

○○：うん、そんな予感はしていたんだけど、僕も自信がなかった。でも、実際に辞書で全部の動詞を調べてみるとそうになっていることがわかったんだ。

□□：言語研究って、そんなことまで調べるのかい？そうすると pedir, sentir, dormir のタイプは ir 動詞だけってわけか…。それも調べたの？

○○：うん、ちゃんとすべての動詞を調べたから確信して言える。

□□：自信があるんだなあ。でも、不定詞語尾の特徴がわかったことで何かいいことがあるの？単に偶然じゃないの？

○○：こんなことが偶然では起きないよ。必然的な理由があるはずだ。さっきから問題にしている「語尾 i の規則」を思い出してほしいんだけど…。

□□：ああっ！そうだ！語尾 i が適用されるのは必然的に ir 動詞だけだよな。語尾 i は ir 動詞にしか現れないから。

○○：うん。だから実は初めからすべての動詞を調べる必要はなかったんだ。

6 変化の仕組みを詳しく見る

- ：でも、君の努力が無駄だったわけではないと思うよ。世の中には理論と実際が異なることがあるからね。
- ：en teoría ... pero en práctica...ということは日常茶飯事だから…。
- ：僕は語根母音動詞変化は不規則変化だと思っていたけれど、君のやり方だとむしろ規則的になるんだね。それで、上の表はオールマイティなの？
- ：うん、語根母音変化に関するかぎりは大丈夫だ¹⁵。これを使えば、不定詞と直現1単さえ知っていれば、どんな活用形だって迷わず自信をもって言えるよ。僕もときどき、とくにあまり使わない動詞で活用形がすぐに出てこないときがあるけれど、そのときはこの表を思い出すことにしているんだ。
- ：たとえば、digerir - digiero はどのタイプになるだい？
- ：直現1単が e→ie になるから(1) pensar タイプか(4) sentir タイプのどちらかだけれど、不定詞が ir で終わっているから、(4) sentir タイプだ。
- ：だとすると、強勢の規則と語尾 i の規則が適用されるから点過去3人称複数 は digirieron だね。
- ：同じように、entender - entiendo も mover - muevo も、それぞれ(1) pensar と(2) contar のタイプになる。er 動詞であることに注意しておけばいいよね。
- ：repetir - repito ならば pedir と同じだし、mentir - miento ならば sentir と同じってわけかあ。すべて不定詞と直現1単で決定できるんだね。

¹⁵ poder は直説法現在と接続法現在は語根母音変化をしますが、直説法点過去では強変化をします。tener と venir は、直説法現在は語根母音変化をしますが(tienes, tiene, tenemos, tenéis, tienen; vienes, viene, venimos, venís, vienen)、直現1単は tengo, vengo となり、点過去は強変化です。過去分詞と現在分詞は語根母音変化の規則に従います(tenido, teniendo; venido, viniendo)。

- ：うん、実は(5)のタイプの動詞はほとんどないんだけど morir - muero が(5)に属するよ。
- ：dormir と morir が同じタイプかあ…。何だか意味に深いつながりがあるのかなあ…。

形態音韻論

- ：言語的には意味の関係はないんだ。こういうのは形態音韻論といって、形式の問題を扱う分野なんだ。
- ：形式といえば、森本先生が書いていた **digerir** のことだけど、なぜネイティブのスペイン人が間違えそうになったんだろうね。だいたいネイティブならば、**convertir - convertieron**, **mentir - mintieron** など絶対間違えないよ。今ちよっと思ったんだけど **digerir** は最初に **di-**があるから、**digirieron** にある **i...i** という連続を嫌ったんじゃないかなあ。
- ：なるほど。そうかも知れない。そんな発想ができるなんてすごいなあ。君は言語研究に向いているんじゃないかなあ。今度、一緒に研究会に来ない？

6.2. 授業

前回の授業では、動詞の活用などの変化形式の導き方に **WP**, **IA**, **IP** という方法があることをお話ししました。皆さんのレポートによると、**WP** や **IA** はよくわかるのだけれど、**IP** がいまいち理解できない、ということでした。そこで、今日は **IP** に集中してその方法を説明いたします。少し複雑なので、ゆっくりとやりたいと思います。もしわからないことや質問があれば、いつでもいいですから手を挙げてください。

pensar と contar

スペイン語の動詞活用で **IP** が効果的な部分の1つとして語根母音変化があげられます。たとえば、pensar と contar の活用は次

6 変化の仕組みを詳しく見る

のようになります。ここでは活用形全部を書いている余裕がないので、直説法現在、接続法現在、直説法点過去だけにおきましょう。

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	<u>pi</u> ens-o	<u>pi</u> ens-e	pens-é
Tú	<u>pi</u> ens-as	<u>pi</u> ens-es	pens-aste
Él	<u>pi</u> ens-a	<u>pi</u> ens-e	pens-ó
Nosotros	pens-amos	pens-emos	pens-amos
Vosotros	pens-áis	pens-éis	pens-asteis
Ellos	<u>pi</u> en-san	<u>pi</u> ens-en	pens-aron

contar

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	<u>cu</u> ent-o	<u>cu</u> ent-e	cont-é
Tú	<u>cu</u> ent-as	<u>cu</u> ent-es	cont-aste
Él	<u>cu</u> ent-a	<u>cu</u> ent-e	cont-ó
Nosotros	conta-mos	cont-emos	cont-amos
Vosotros	contá-is	cont-éis	cont-asteis
Ellos	<u>cu</u> ent-an	<u>cu</u> ent-en	cont-aron

これらの動詞については、前回の授業で説明しましたように、次の規則が適用されます。

強勢の規則(1): e → ie / [強勢]

強勢の規則(2): o → ue / [強勢]

斜線(/)の右が規則が適用される条件を示しています。これは、強勢があるところで e が ie となったり、o が ue となったりすることを示しています。

6 変化の仕組みを詳しく見る

スペイン語は、基本的に動詞や名詞・形容詞が変化してももの強勢の位置は変わりません。変化するのは、基本的に直説法と接続法の現在形だけです。Yo, Tú, Él, Ellos のところで語根に強勢があり、それ以外は語尾に強勢があります。その語根に強勢があるときに、「強勢の規則」が適用されます。点過去では強勢は語根に移動しませんから、ie となったり、ue となったりすることはありません。

このようなタイプの動詞は他にもたくさんあります。たとえば *entender, costar, mover* などがあります。

pedir

次は *pedir* の活用形です。

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	p <u>í</u> d-o	p <u>í</u> d-a	ped-í
Tú	p <u>í</u> d-es	p <u>í</u> d-as	ped-iste
Él	p <u>í</u> d-e	p <u>í</u> d-a	p <u>í</u> d-ió
Nosotros	ped-imos	p <u>í</u> d-amos	ped-imos
Vosotros	ped-ís	p <u>í</u> d-áis	ped-isteis
Ellos	p <u>í</u> d-en	p <u>í</u> d-an	p <u>í</u> d-ieron

語根の母音が e になるときと、i になるときがあります。皆さんはどのようにして覚えましたか？覚え方は、個人によって違うと思いますが、ここでは、この変化の仕組みを調べてみたいと思います。語根母音が i になるのは、次の規則が働くときです。

語尾 i の規則(1): e → i / [語尾が単母音 i 以外]

ちょっとわかりにくいかもしれませんが。この規則を覚えるときは *pedir* という不定詞を見つめてください。語尾に単母音の i がありますね。これがあるときは語根は e になります。ところが、

6 変化の仕組みを詳しく見る

この e が i になるのは、語尾が単母音 i 以外ではじまるときです。たとえば、pid-o は語尾の母音は o ですから、単母音 i ではないので、語根は i になります。pid-es, pid-e, pid-en も同じように、語尾の最初の母音が単母音 i ではないので、語根は i になります。語根と語尾のどちらかに単母音 i が出てくる、と考えてもいいです。接続法現在、直説法点過去についてもチェックしてみてください。

この規則については i ... i という同じ母音の連続を嫌って、e ... i となっていると思ってもよいでしょう。ここで、接続詞 y → e という規則を思い出してください。español e inglés となりますね。これが pedir と同じように e ... i となっています。

このルールはすべての活用形にあてはまります。たとえば、線過去が pedía となるのは語尾に単母音 i があるから、現在分詞が pidiendo となるのは、語尾が単母音の i でないから、という理由になります。

sentir

次に sentir の活用形を見ましょう。

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	s <u>ient</u> -o	s <u>ient</u> -a	sent-í
Tú	s <u>ient</u> -es	s <u>ient</u> -as	sent-iste
Él	s <u>ient</u> -e	s <u>ient</u> -a	s <u>int</u> -ió
Nosotros	sent-imos	s <u>int</u> -amos	sent-imos
Vosotros	sent-ís	s <u>int</u> -áis	sent-isteis
Ellos	s <u>ient</u> -en	s <u>ient</u> -an	s <u>int</u> -ieron

ここでは、さっき見た「強勢の規則(1)」と「語尾 i の規則(1)」が適用されます。強勢があるところでは語根母音は ie となり、それ以外では、語尾に単母音の i があるときに e となり、それ以外では i となります。直説法現在の Yo siento, Tú sientes, Él siente, Ellos sienten では強勢が語根にあるから、語根が二重母音になり

ます。接続法現在も同じことです。Yo sienta, Tú sientas, Él sienta, Ellos sientan となります。直説法現在 Nosotros sentimos, Vosotros sentís では、語尾に単母音の i があるから語根は e になります。一方、接続法現在 Nosotros sintamos, Vosotros sintáis では、語尾が単母音の i でないから語根に i が現れています。

dormir

最後に、dormir の活用を見ましょう。

主語	直説法現在	接続法現在	直説法点過去
Yo	<u>duerm</u> -o	<u>duerm</u> -a	dorm-í
Tú	<u>duerm</u> -es	<u>duerm</u> -as	dorm-iste
Él	<u>duerm</u> -e	<u>duerm</u> -a	<u>dur</u> m-ió
Nosotros	dorm-imos	durm-amos	dorm-imos
Vosotros	dorm-ís	durm-áis	dorm-isteis
Ellos	<u>duerm</u> -en	<u>duerm</u> -an	<u>dur</u> m-ieron

ここでは、はじめに contar と同じように強勢の規則(2)が適用されます。直説法現在の Yo duermo, Tú duermes, Él duerme, Ellos duermen では強勢が語根にあるので、語根が二重母音になっています。接続法現在も同じです。Yo duerma, Tú duermas, Él duerma, Ellos duerman..

それと、もう一つ、次の規則が適用されます。

語尾 i の規則(2): o → u / [語尾が単母音 i 以外]

これは pedir や sentir のときに見た「語尾 i の規則(1)」とよく似ていますが、語根母音の o が u に変化するところが違います。この規則が適用されるのは次のケースです。接続法現在 Nosotros durmamos, Vosotros durmáis では、語尾が単母音の i でないから語

6 変化の仕組みを詳しく見る

根に *i* が現れています。一方、直説法現在 *Nosotros dormimos*, *Vosotros dormís* では、語尾に単母音の *i* があるから語根は *o* のままです。

まとめ

これで、スペイン語の活用変化がすべてそろいましたので、全体を次の表でまとめてみましょう。

	不定詞	直現1単	強勢規則	語尾 <i>i</i> の規則	不定詞語尾
(1)	<i>pensar</i>	<u><i>pi</i></u> <i>enso</i>	○	×	<i>ar, er</i>
(2)	<i>contar</i>	<u><i>cu</i></u> <i>ento</i>	○	×	<i>ar, er</i>
(3)	<i>pedir</i>	<u><i>pi</i></u> <i>do</i>	×	○	<i>ir</i>
(4)	<i>sentir</i>	<u><i>si</i></u> <i>ento</i>	○	○	<i>ir</i>
(5)	<i>dormir</i>	<u><i>du</i></u> <i>ermo</i>	○	○	<i>ir</i>

このように語根母音変化の活用タイプは(1)から(5)までの5種類です。それぞれ、代表として *pensar*, *contar*, *pedir*, *sentir*, *dormir* をあげました。それぞれの直現1単の形をしっかりと押さえておきましょう。次の列は「強勢規則」の適用を示します。○が適用されるタイプ、×が適用されないタイプを示します。次の「語尾 *i* の規則」も同じです。

最後の列の「不定詞語尾」はこれまでの説明にはありませんでした。スペイン語のすべての語根母音変化動詞を調べてみると、*pensar* タイプの動詞と *contar* タイプの動詞は *ar* 動詞または *er* 動詞に限られていることがわかりました。また、*pedir*, *sentir*, *dormir* のタイプの動詞は *ir* 動詞に限られています。

さて、この表をよく理解しておけば、どのような語根母音変化動詞のどのような活用形でも自由に変化させることができると思います。たとえば、*convertir* の現在分詞の形を考えてみましょう。*convertiendo*, *conviertiendo*, *convirtiendo* のうち、どれでしょう

6 変化の仕組みを詳しく見る

か。正解は **convirti**endo です。convertir の直現 1 単は **convier**to ですから、sentir タイプです。ここから正解にたどり着くまでに 2 つの道があります。1 つは、sentir の現在分詞を知っている人は、**sinti**endo という形に合わせて、convirtiendo という形を作ることでしょう。もう 1 つの道は、iendo という現在分詞の語尾に注目して、ie は単母音 i でないから語根は i になる、という「語尾 i の規則」を適用する方法です。もし、sentir の活用形も忘れてしまったときは、この規則を思い出してください。

動詞の活用形はあまり規則などを意識しないで WP で覚えてしまえば理想的です。あまり規則ばかりを先に意識すると、実際の運用では間に合わないこともあります。一方、それぞれの活用形には言語のシステムとして存在していると仮定できるような規則が働いているのかも知れません。そのような規則を背景知識として持っていてよいでしょう。もし、語形に迷ったら、そのときに今回一緒に考えた規則を思い出してください。

質問：語尾 i の規則は ir 動詞だけに適用されるのですね。

回答：とてもよい観察です。語尾 i の規則の条件は活用語尾に i が現れることですから、まさに、ir 動詞だけに適用されるのです。逆に、語尾 i の規則は ar 動詞と er 動詞には関係しません。ir 動詞の特殊性に注意してください。

質問：動詞の不定詞と直説法現在 1 人称単数がわかれば、どのタイプに属することが完全にわかるのですね。

回答：その通りです。そして直説法現在 1 人称単数の形がわかれば、そこに語根母音変化が起きていなければ規則変化であることもわかります。さらに特殊な活用形も直説法現在 1 人称単数の形に現れていますから、これはとても重要な形です。私は「直現 1 単」と呼んで、とくに重要視しています。

質問：活用タイプの中に、jugar のケースがないのですが…

回答 : jugar は contar に準じます。u → ue となります。その条件は contar のときに適用される強勢の規則(2)と同じです。また、ar 動詞なので contar とほとんど同じです。jugar はこの動詞だけの語根母音変化をするので、タイプにはならないのです。contar を参考にして活用させてください。

それでは、数行でよいですから今日の授業のレポートを書いてください。授業はこれで終わりです。

6.3. レポートから

- (私は) 動詞の活用を身につける際、主に IP の方法をとっていたが、(語根母音変化のような) 不規則動詞の場合 WP で覚えていた。しかし、このように改めてカテゴライズしてみると、不規則の中にも規則があることが見い出せる。
- もう今では簡単な動詞は WP でパッとでてくるので、IA や IP はちょっとめんどくさいなと思ったが、パッとでてくるまの過程で絶対 IA や IP をもちいて覚えてきたと思う。
- もっと早くこういう規則性に気づいていれば、もっと効率よく活用を覚えられていたのでは、と思います。
- 複雑に見える動詞の活用にも規則性があることがわかった。今まではとにかく覚えるという方法を用いてきたが、この表を覚えておけば、忘れてもすぐに思い出せそうだなと思った。
- ここまで一気にやってきたので、いきなりこの表を見て活用を言えるかと言われたら難しいと思います。
- 今までは WP の訓練をしながらルールもある程度覚えていましたが、あのややこしい活用がここまで簡潔にまとま

6 変化の仕組みを詳しく見る

るとは感動です。スペイン語は本当に洗練されているんだなと思いました。この表を頭の片隅にでも持っていると思ったときすごく便利だと思いました。

- **pedir** や **sentir** で、接続法現在の 1 人称複数と 2 人称複数がいつも間違ふことに気づきました。ie に割れないのは、そこにアクセントが置かれないからだ今回わかったので、これから間違わないと思います。
- 直説法現在 1 人称単数が意外にも形を見分けるときに重要な要素となっていることに驚かされました。
- 活用を覚えるにあたって私は **WP** を主に使用していたため、今回のような考え方は新鮮に感じました。と同時に **WP** だけではカバーしきれない部分があることを実感しました。今日は活用を復習するにあたって、大事な発見ができたと思います。特に **ir** 動詞についてはよく作文するときなど迷うことがあるので、この表を参考にしたいと思います。
- 今日授業でやったことは、正直私にとっては難しかったです。活用は今まで声に出して覚えていて、単語の構造上から考えてみるということがなかったので、難しかったです。しかし、この授業で自分の活用の覚えていなさ具合に気付いたので、ぜひ授業でやった表を参考に覚え直してみようと思いました。
- 全部一覧にするとその仕組みがよく分かりました。今までどこかしら感覚で覚えていたものには規則があるんだと思いました。今度から活用を覚えるときにはいろいろ分析してみようと思います。
- スペイン語は英語と違って活用がものすごく多く、勉強し始めたときは本当にとまどったが、私は **WP** 型で覚えたので、しばらく使わないと活用を忘れてしまうことが本当によくある。このように構造から理解して覚えて考えると、

忘れたとしてもすぐに活用が導き出せることはとてもいいことだと思った。しかし、私は、話す方に重点をおきたいため、このように考えると会話は止まってしまうのではないかと心配になる。そのため、私は **WP** 型で活用をできるだけ覚えたいと思っている。

レポートを読んで

言語のシステムを理解することの利点として、初期学習における記憶に効果がある、中期学習において意識高揚に繋がる、後期学習において忘却防止や忘却回復に効果がある、そしてどの段階でも言語のシステムに興味をもつことで学習意欲を向上させる、という点が挙げられるようだ。

一方、このような言語システムのあり方そのものを提示すると、言語を運用する能力を獲得することよりも、むしろ言語についての知識を学習することになりがちである、という懸念がある。運用能力を向上させるためには **WP**、システムを理解させるためには **IA+IP** という対立的な図式が成り立つのかもしれない。しかし、私は両者を対立させるのではなく、システムを理解した上で運用能力を向上させる、または、運用能力をつけたうえで、さらにシステムを理解する、という形で、両者の学習・教育上の連携を考えていきたいと思う。

7. パターンを意識する

7.1. 対話

□□：研究会に参加してみても思ったんだけど、言語研究って、とても形式を意識するんだね。

○○：うん、言語形式には法則性がある、って考え方をするからね。



□□：僕もたしかに形式も大事だと思うけれど、やはり内容のほうに関心があるなあ。

○○：形式と内容、どちらも大切だよな。最近僕は形式と内容の平行性に関心があるんだ。このことについては、いつか議論したいなあ。

アクセント記号の付け方

□□：形式といえば、これ最近の1年生の小テストの結果なんだけれど、アクセント記号の付け方にミスが多いんだ。スペイン語のアクセント規則はそんなに複雑じゃないのに…。

○○：うん、僕らは何年もやっているから、慣れてしまっているし、それで、あまり難しくない、と思えるんじゃないかな。でも1年生は大変だと思うよ。

□□：そうかなあ。ほら、僕の教科書の最初のほうに書いてあるルールはたったこれだけだよ。

強勢の規則

規則(1)：単語の語末が母音、または n, s であるときは、強勢は語末から数えて 2 番目の音節に置く。

(例) casa, casas, cantan

規則(2)：単語の語末が n, s 以外の子音であるときは、強勢は語末の音節に置く。

(例) papel, ciudad

規則(3)：それ以外の場合は、アクセント記号をつけなければならない。

(例) canté, miércoles

○○：君はこれが簡単な規則だと思う？僕はかなり複雑だと思っているんだ。

□□：そうかなあ。たしかに練習は必要だと思うけれど、練習さえすれば、乗り越えられるんじゃないかな。

○○：それにはかなりの練習量が必要だね。スペイン語を専攻している学生や時間がたっぷりある学習者ならば、できると思うけど…。

□□：うん、実はこの小テストの結果を見ると、やはりむずかしいみたいだ。何か手だてはないかなあ…。

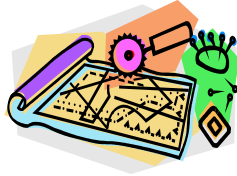
○○：これは僕自身がかかなり悩んだ問題だ。あるとき、こんなことを考えたんだ。この規則(3)に出てくる、スペイン語のアクセント記号って、どういうときに現れるのかを、実際のテキストで調べてみると、アクセント記号がない単語より、ずっと少なかったんだ。

- ：それは僕だって気付いていたよ。だから、規則を示すときも最後に置いていた。規則(1)と(2)のほうが普通で、そうでないときに例外的に規則(3)を見る、という具合に…。
- ：うん、実際的にもその方が正しいと思う。そして、理論的にも…。
- ：じゃあ、やはり規則(1)と(2)をしっかり覚えて、練習すればいいんじゃないかな。

テンプレート

- ：僕は、規則(1)と(2)でなぜ n と s が特別な扱いをしているのか、気になったんだ。
- ：そんなこと考えたことないなあ。どんな教科書だって、参考書だってそう書いてあるし…。
- ：言語は教科書や参考書によって作られるものではなくて、逆に、教科書や参考書は言語の姿を説明するものだから、もっと自由な立場があってもよいと思うなあ。
- ：「自由な立場」って？
- ：うん、言語のあり方を記述するときの発想を変えてもいいんじゃないかな。
- ：僕らはそんなことはあまり考えないけれど、言語研究者はそういうことにこだわるからなあ。よく議論もしているし…。
- ：うん、n と s の問題だけれどね。これって、実際のテキストを分析してみると、この2つの子音で終わる単語の数ってけっこう多いんだ。かなりある。
- ：それで？…
- ：そして、n と s の前は、絶対と言っていいほど、母音になる。
- ：それで？…
- ：その母音はほとんどの場合が弱勢母音だ。
- ：それで？…

- ：これがスペイン語の姿だとすれば、アクセントのパターンも、それに従っているんじゃないかなあ、と思う。言ってみれば「テンプレート」つまり「鋳型（いがた）」だ。



- ：テンプレートって、あまり僕らの世界では使わない用語だけれど。
- ：テンプレートが嫌ならば「パターン」（型紙）だっていい。
- ：うん、「パターン」のほうがわかりやすいな。それで、どんなパターンがあるの。
- ：ここに書いてみよう。

スペイン語の強勢パターン

強勢母音 + 子音 + (弱勢母音) + (n, s)

ここで () で示したところは、あってもなくてもいい、という意味だ。このパターンだけを知っていれば、さっきの規則(1)~(3)は必要でなくなるかもしれない。

- ：えっ？これだけでいいの？
- ：うん。たとえば、規則(1)の casa は「強勢母音 + 子音 + 弱勢母音」だし、casas は「強勢母音 + 子音 + 弱勢母音 + s」、cantan は「強勢母音 + 子音 + 弱勢母音 + n」だから、ぜんぶこのパターンにマッチする。
- ：規則(2)は？
- ：うん。papel も ciudad も「強勢母音 + 子音」だからやはり、上のパターンにマッチする。

- ：規則(3)はどうするの？
- ：規則(3)は、上のパタンにマッチしないので、例外的にアクセント記号が必要になる、ということだ。
- ：なるほど。そうすると「強勢母音+子音」を練習し、それから次に、規則(1)の母音で終わるケースを出して「強勢母音+子音+弱勢母音」を練習し、最後に規則(1)の n, s のケースを出して「強勢母音+子音+弱勢母音+n, s」を練習する、そして最後に規則(3)で例外を扱う、というのはどうだろう。
- ：大賛成だ！つまり、従来のやり方だと、最後の母音とか子音を意識して、それからバックしながら強勢の位置を探したけれど、このパタンを使えば次のようなプロセスになる。単語が「母音+(n, s 以外の)子音」のパタンで終わっていれば、この母音を強勢にする、このパタンにさらに母音が付加されても、さっきの母音を強勢にする、そしてこれに、さらに、n, s が付加されても、さっきの母音を強勢にする、ということだね。たとえば *español, española, españolas* を例にすると、次のようになる。

español
 español + a
 español + a + s

- ：español のアクセントは、a がついても s がついても不動だね。
- ：それって、すごく大事な観察だ。母音の付加や n, s のさらなる付加はオプションだから、パタンに影響しないんだ。
- ：僕のやり方、というか、ほとんどのスペイン語の教師や学習者がやっていることだけど、それだと、こうなるね。

español
 española

español^as

- 〇〇：僕もはじめはそうやっていた。つまり、ラストの文字に注目して、それをもとに規則を当てはめていたんだ。
- ：それでも結局、強勢がちゃんと決まるよね。
- 〇〇：もちろん。でも、実際はなかなかうまくいかない。とっさに判断しようとしても、失敗することがある。僕はしょっちゅう失敗ばかりしていたよ。
- ：最初は誰だってそうだよ。でも練習すればだんだんと慣れて間違えなくなる。スポーツの練習に似ているんじゃないかな。



- 〇〇：でも、僕は運動神経がにぶいので、やっぱりだめだった。
- ：そこで、ちがう方法を考えたんだね。
- 〇〇：うん、とにかく「強勢母音+子音」というのを基本にして、それに母音を足す、さらに n, s を足す、という積み重ね方式で練習してみたら、案外うまくいったんだ。
- ：なるほどね。人それぞれだね。
- 〇〇：そうだと思う。複数の規則を簡単に適用できるスキルのある人や、練習をたくさんこなせる人は従来のやり方でいいんじゃないかな。僕みたいにそれができない人は単純なテンプレートが役に立つと思う。
- ：もしかしたら、このテンプレートを使えば、1年生の小テストの成績も上がるのかなあ？
- 〇〇：やってみたら？

複数形を作る規則

- ：でも、このテンプレートって、強勢の配置にしか使えないの？もし、それだけにしか使えないんだったら、コストが高いね。わざわざこのことだけのために覚えるのはつらいよ。
- ：実は、このテンプレートは名詞や形容詞の複数形の形成でも使えるよ。
- ：複数形を作る規則はこうだよな。

複数形を作る規則

規則(a)：単語の語末が母音であるときは、sをつける。

(例) la casa > las casas

規則(b)：単語の語末が子音であるときは、esをつける。

(例) el español > los españoles

規則(c)：単語の語末が弱勢母音+s であるときは、単複同形。

(例) el lunes > los lunes

規則(d)：単語の語末が強勢母音+s であるときは、esをつける。

(例) el japonés > los japoneses

○○：これもなかなか複雑な規則だよな。

□□：たしかにそうだ。1年生の小テストでもあまりできがよくない。これもさっきのテンプレートで解決できるの？

○○：うん。スペイン語の複数のテンプレートは次のようになる。

スペイン語の複数形パターン

弱勢母音+s

□□：さっきの強勢パターンとよく似ているね。強勢パターンの語末だけを取り出しているね。

- ：うん。つまり、複数形パターンは強勢パタン的一种なんだ。
このパターン1つに、さっきの複数形を作る4つの規則をまとめこむことができる。
- ：えっ？これだけでいいの？こんな単純なパターンだけでOKなの？
- ：うん。本当にOKかどうか、チェックしてみよう。規則(a)の *la casa* は弱勢母音に終わっているからそれに *s* をつければいいので、*las casas* にする。これで「弱勢母音+s」のパタンになる。規則(b)の *el español* は弱勢母音で終わっていないので、*es* をつけて *los españoles* とすれば「弱勢母音+s」になる。規則(3)の *el lunes* の例では、単数形ですでに「弱勢母音+s」になっているので、そのまま複数形としてこのパターンを使う。そして規則(4)では、*és* の母音が強勢なので、*es* をつけて「弱勢母音+s」というパタンにする。だから、どのケースでも最終的に「弱勢母音+s」というパタンになっていればOKという考え方なんだ。
- ：へ～え？このパタンさえ意識していれば、たしかに *los españoles* とか、*las tesis* とか、*los mes* とかいうミスはなくなるね。
- ：うん、そんな形ではどれも「弱勢母音+s」というパタンにならないからね。
- ：完全にオールマイティかい？
- ：上の規則の範囲ではね。その他に *el sofá* > *los sofás*, *el café* > *los cafés* などの、ラストが強勢母音のケースがあるけれど、これらは従来のやり方でも、このパタン方式でも例外になる。
- ：そもそもこのような単語の例は限られているし…。
- ：そう、本当に少ない。こんな小数の例があるからといって、本質的な規則を曲げることはできないよ。例外は例外としてチェックしておけばいいんだ。

- : 圧倒的多数の単語がさっきの強勢パターンになるんだね。それがスペイン語らしさを響き出している、と言えるかな。…。今、気づいたんだけど、規則(b)の *español* のケースと規則(d)の *japonés* のケースは本質的には同じことだね。どちらも強勢母音+子音だから。それで *es* をつけて複数形のパターンにするんだね。
- : すごい！すばらしい観察だ。僕らは規則(d)のアクセント記号に目を奪われて2つを別扱いしたり、または *s* で終わっていることで規則(c)との対立を考えるけれど、本質的には、君が言うように、規則(b)と同じことを言っているんだと思う。

語尾が脱落する形容詞

- : それから、語尾が脱落する形容詞がいくつかあるよね。
bueno > buen, malo > mal, alguno > algún, ninguno > ningún, primero > primer, tercero > tercer とか。これも、強勢のテンプレートに従っているみたいだね。
- : すごい！その通りだ！これらの形容詞は「強勢母音+子音+(弱勢母音)」のパターンだけれど、ここでラストの *o* を落とすとしたところで、やはり「強勢母音+子音」のパターンになっている。
- : でも、*grande > gran* のケースはちょっと違うね。
- : うん、確かに違う。ここで、もしラストの *e* だけを落とすたら、*grand* となるので「強勢母音+子音」のパターンにならない。そこで、*d* も落として *gran* の形にして「強勢母音+子音」のパターンになるようにしているんだ。それから、*primero > primer, tercero > tercer* があるのに、*segundo, cuarto, quinto* で語尾が脱落しないのも、やはり「強勢母音+子音」のパターンで説明できるんだ。つまり *segund, cuart, quint* ではパターンに合わないからだ。

□□：形式に関係するいろいろな現象の理由が、スペイン語のテンプレートを使うことで説明できるんだね。

○○：君にわかってもらえると嬉しいよ。

7.2. 授業

今日の授業の後半では、スペイン語の強勢とアクセント記号について皆さんと一緒に考えてみたいと思います。ここで「強勢」というのは、たとえば *casa* の場合 *a* に「強勢」がある、というときに使います。これと「アクセント記号」を区別します。アクセント記号は *sábado* の *á* のように母音の上につけた記号です。アクセント記号があればそこに強勢がありますが、強勢があるからといってアクセント記号がある、とは限りません。*casa* がその例です。今回の授業では主にアクセント記号がない強勢について扱います。

はじめにスペイン語で「月曜日」から「日曜日」まで7つの名詞を書いてみましょう。スペインのカレンダーでは「日曜日」ではなく「月曜日」から始まります。それでは、…さんに、代表となって書いてもらいましょう。

lunes
 martes
 miércoles
 jueves
 viernes
 sábado
 domingo

はい、これで OK です。ありがとうございました。ここでアクセント記号を付け忘れた人は注意してください。*miércoles* と *sábado* にアクセント記号があります。*viernes* にはアクセント記号

をつけません。このアクセント記号の規則は、教科書や参考書では次のように説明されているのがふつうです。

強勢の規則

規則(1): 単語の語末が母音、または n, s であるときは、強勢は語末から数えて 2 番目の音節に置く。

(例) casa, casas, cantan

規則(2): 単語の語末が n, s 以外の子音であるときは、強勢は語末の音節に置く。

(例) papel, ciudad

規則(3): それ以外の場合は、アクセント記号をつけなければならない。

(例) canté, miércoles

さて、皆さんはすでにこの規則をしっかりと習って、実際にもうまく適用できていますが、1年生や初級の外国語の履修者の中には身につけることを困難に感じている人がいます。

音韻論

そこで、言語研究の音韻論(fonología)の立場から、次のような強勢配置パタンのテンプレートを提案します。

強勢のパターン

強勢母音 + 子音 + (弱勢母音) + (n, s)

これは、スペイン語の圧倒的多数の単語の強勢パターンを示しています。括弧()は、あってもなくてもよい、という意味です。た

例えば、casa ならば語尾の asa が「強勢母音＋子音＋弱勢母音」というパターンになりますし、casas, cantan の語尾は「強勢母音＋子音＋弱勢母音＋n, s」というパターンです。そして、papel や ciudad の語尾のパターンは「強勢母音＋子音」です。

さっき黒板に書いてもらった曜日の名前が、このパターンにあっているかチェックしてください。そして、このパターンにあっていないときに、アクセント記号が付いているかどうかを確認してください。

(…)

さて、ここでさっき見た「強勢の規則」と、今見た「強勢のパターン」を比べてみましょう。「強勢の規則」によれば、単語の最後の文字を見ることによって、どの規則が適用されるのかを判断することになります。

español|
 española|
 españolas|

ここで、español は l という語末の子音があるために o に強勢があることになります。また、española は a という語末の母音があるために、最後から 2 番目の音節の o に強勢があることになります。そして、española では s という語末の母音があるために、最後から 2 番目の音節の o に強勢があることになります。このように語末の l, a, s を比較しながら強勢の位置を探ります。

上の 3 つの単語を見ると、強勢がだんだん前のほうに移動しているような感じですが、よく見ると、この 3 つの単語のどれも強勢の位置は一定で同じ母音の o にあることがわかりますね。

次に、「強勢のパターン」を使ってみましょう。このパターンに従うと、3 つの単語は次のようにして比較されます。

español

español	+ a	
español	+ a	+ s

こうすると、español という語形のあり方はいつも同じで、強勢の位置も不動です。この語形に a が付加しても強勢の位置は変わりません。さらに s が付加しても強勢の位置は変わりません。

皆さんはすでに強勢規則を内在化・自動化していますから、とくにこのようなパターンを意識する必要はないでしょう。でも、ちょっと初級学習者のことを考えてみてください。複数の規則で説明したほうが、学習者はわかりやすいでしょうか。または1つのパターンだけを提示した方がわかりやすいでしょうか。

練習の方法

次に強勢の練習方法について考えてみましょう。2つの方式の間には違いは何でしょうか。「強勢の規則」方式ですと、常に語尾に注目して、それから単語の中をバックするようにして、強勢の位置を決めます。一方、「強勢のパターン」方式ですと、語尾が一定の型にあっていのかどうかを判断して、さらに弱勢母音が付加しているか、そしてさらに n または s が付加しているかを見ていくこととなります。つまり、視線は後戻りするのではなく、先に、先に、と進行を続けます。

どちらの方式でも、正しく強勢を置くことができるようになるまで、練習をしなければなりません。このことは同じなのですが、「強勢の規則」を使うときは、母音または n, s という条件と n, s 以外の子音という条件を同じ語尾の位置で比較する練習をします。一方、「強勢のパターン」を使うときは、はじめは「強勢母音 + 子音」というパターンを練習し、次に「強勢母音 + 子音 + 弱勢母音」というパターンを練習し、最後に「強勢母音 + 子音 + 弱勢母音 + n, s」というパターンを練習します。

どちらの方式でも、アクセント記号がついた語は例外として、扱い、特別な練習が必要です。

この2つの方法について、少しグループでディスカッションをしてください。その後、個人で自分の意見をレポートに書いてください。

(…)

パターンを目指す

次に、スペイン語の複数形の作り方について、考えてみましょう。次が私たちが学習している文法の規則です。

複数形を作る規則

規則(a)：単語の語末が母音であるときは、sをつける。

(例) la casa > las casas

規則(b)：単語の語末が子音であるときは、esをつける。

(例) el español > los españoles

規則(c)：単語の語末が弱勢母音+s であるときは、単複同形。

(例) el lunes > los lunes

規則(d)：単語の語末が強勢母音+s であるときは、esをつける。

(例) el japonés > los japoneses

この規則も上級生ならば、完全に内在化・自動化していると思います。でも、初級者にとってはかなりむずかしいのです。4つもある規則を完全に間違いなく適用することは至難の業です。実際、los españoles, los luneses, las tesises などの形をよく見ることがあります。

ここで、さっき扱った「強勢のパターン」を導入してみましょう。s をつけたとき、「強勢のパターン」にあっているかどうかをチェックしてみましょう。ここでは「弱勢母音+s」という部分だけに

注目します。そうすると、casas, españoles, lunes, japoneses はどれも「弱勢母音+s」というパタンにあります。つまり、スペイン語の複数形はどれも「弱勢母音+s」という**パタンを目指して作る**、と考えてみてはいかがでしょうか。casa ならば s をつけることで、そのパタンになります。español は es をつけることで、そのパタンになります。lunes は単数の形で、初めからそのパタンになっているのでそのまま複数形として使います。そして、japonés は、lunes と似ていますが、「弱勢母音+s」というパタンではないので、es をつけて語末を「弱勢母音+s」というパタンにしなければなりません。

このように考えると、4 つもあった規則が 1 つのパタンに納まります。しかし、学習者によっては、従来の 4 つの規則を 1 つずつ習得していったほうがわかりやすいかもしれません。個人の学習スタイルが異なるからです。もしかしたら、規則を適用している人も、意識をしないでパタンを使っているのかもしれません。また、規則を習得する練習の中に、あえてパタンを意識化するという方法も考えられるでしょう。このようにパタンという概念をスペイン語教育・学習に導入することの利点と欠点を考察してみましょう。

グループでディスカッションして、個人でレポートしてください。授業はこれで終わります。レポートを仕上げたら提出してください。

7.3. レポートから

反対：

- -n, s, 母音の考え方しかなかったし、その方法でやり慣れているので、パタンを使う方法は逆に複雑に思った。

- 私は規則 1~4 まで覚える方がきっちりして合う気がします。弱勢母音+s というのを考えると逆にすごく考えてしまってややこしいです。
- 1つのパターンにしてしまうという方法は、わかりやすかったが、それは個別の規則を知っているからわかりやすく感じたのではないか。最初から1つのパターンだけを与えられてしまうと具体的ではないので、学習者は混乱してしまう可能性があると思った。
- 確かに根幹にあるルールを1つ覚えた方がいいのかもしれませんが、いちいち弱勢母音の位置を考えるのもややこしい気がします。個人的には規則 1~4 で覚えた方がやりやすいのでは、と思いました。
- 長く勉強していると、luneses はおかしいとか、japoneses はありだな、と分かる記憶型なので、丸暗記も有効だと思う。

賛成：

- 複数になっても強勢は変わらない、ということを教えれば大体はカバーできる。初心者は、いくつも規則を教え込まれても混乱してしまうだけである。まずは、一番の柱になり、かつわかりやすいパターンでなじませ慣れてもらう。慣れた時点で規則を教えればよいと思う。
- 4つの規則を見ながら自分の知識を整理してみると、私にはやはり曖昧な点が多かった。プロセスを順に追って考えていくことで、うまく応用できるようになる、ということは大切だと思った。
- 私の場合、lunes が単複同形と知ったとき困ったのを覚えている。なぜ複数形でもそのままなのか興味があった。今日授業を聞いてその理由がわかった。
- 複数形を作るとき、アクセント同様、感覚でやってしまっていたので、今日の「弱勢母音+s」というパターンには非常に納

得しました。実際にいくつかの単語を挙げて考えてみると、このパターンがぴったりと当てはまって、とても不思議で面白かったです。

- 今までには一番後ろにくる文字で強勢を決めていたけれど、今このパターンを考慮に入れると、前から普通に読んでいきながら強勢をおけるので、スペイン語の文章を読み上げる際などはおおいにネイティブらしい、その場で悩まずにすむものになると思った。
- 今までアクセント記号の付け方をあいまいなままでいたが、今日規則を再確認でき、しかもまったく新しい視点からパターンを知り感動した。lunes の場合と japonés の場合いつも迷っていたけれど、このパターンを知って、もう迷わないと思った。
- 規則には理由がある、と考えるのなら、その理由を探るのも興味深いことだと思います。

相補：

- どちらも知る方がより理解が深まるはずだ。4 つの規則を提示する方法では、個別に示していることで学習者にもイメージしやすい。しかし、規則が多いため混乱をまねく可能性もある。そこで、より一般化されたパターンを理解することで、頭の中を整理することができる。ただ、後者だけを学んだだけでは実際には複数形を作っていけないでしょう。
- 実際、西語を勉強する時には「習うより慣れろ」理論でやってきて、その方がいいと思うが、勉強して体で覚えたあとに今回のような理論を入れてあげると、今まで積み重ねたものが収まるところに収まったような感じがして、とても気持ちがいい。
- 最初のうちは単語の音節を後ろから数えて強勢をつけて読んでいましたが、だんだん慣れていくうちに、なんとなく正しい位置にアクセントをつけて読めるようになっていました。

(考えずに) 自然にパターンの考え方が身についていたのではないかと思います。

- もう違う方法で学んでしまって定着してしまっているのに、今から新しい方法に考え方を变えるのは難しいと思いました。1からスペイン語を学ぶ人たちにとっては、パターン方式で学ぶのが有効だと思います。
- いきなりパターンを教わってもピンとこないのに、4つの規則を覚えた後で、「実は4つとも…」とパターンを学ぶ(まさに今日の私)のがベストだと思う。

レポートを読んで

クラス全体が規則の考え方とパターンの考え方をよく理解している。その上で、自分の学習スタイルを考慮して、自分の問題として考察している。

たしかに、最初の段階からあまり理論的なことを考えずに、むしろ「習うより慣れろ」とするほうが实际的であり、効果が高いと思う。理論の理解が実際のスムーズな運用を保証するわけではないからだ。自動車の構造や道路交通法を知ることが、必ずしも良いドライバーとしての運転技術を保証することにはならないことは、運転の実習を思い出せばわかる。何度でも練習して慣れていくことが重要だ。

一方、プラクティスだけでよいのか、となると、やはりセオリーも重要だと思う。両者は対立的な関係にあるのではなく、相補的な関係にあるのだろう。

それでは、ステージとしてどちらを先に置くべきだろうか。両者を相補的に捉えた意見を読むと、プラクティスを先に十分やってからセオリーを後で提示する、という意見と、最初からセオリーを提示する、という意見があった。私は、どちらかを先にするのはではなく、両者を同時にやる、という方式を提案したい。そうすると、個別の規則の練習中に、その規則がどのような一般的な

7 パタンを意識する

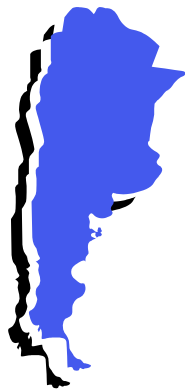
パタンの中にあるのかを意識することができるので、規則の習得に効果をあげるのではないだろうか。また、同時に行っている規則の適用練習の体験があれば、理論的なパタンの理解も容易になるはずだ。今回の理論的なパタンの理解がほぼ完璧だったのは、上級生なのでプラクティスを積んで個別の規則をしっかりと理解していたからだと思う。

8. ユニットを考える

8.1. 対話

言語能力と言語知識

- 〇〇：君はアルゼンチンで小学校と中学校の授業を受けていたんだよね。
- ：うん。親の仕事の都合で現地の学校に通っていたよ。



- 〇〇：そうすると、僕みたいに大学でスペイン語の学習を始めたわけではないんだ。自然に覚えてしまったの？
- ：最初は苦労したけれど、学校に通ったり、アルゼンチンの友達と遊んだりしながら自然に覚えたのだと思う。
- 〇〇：大学でスペイン語を専攻したときは、会話などでの苦労はなかったんだね。
- ：とくになかった。でも文法の授業はむずかしかったよ。それまで意識していなかったことを、文法問題として解答するのはちょっと困った覚えがある。
- 〇〇：へ～え？君はほとんどネイティブなのに文法問題が難しいのかい？

- ：たとえば、前置詞の穴埋め問題だとか、正誤問題だとか、ふだん考えたことがないことを答えるのはちょっとね…。
「次の文の誤りを直しなさい」なんて言われても、あまり意識したことがないので、どれもいいんじゃないか、と思ったりして…。
- ：でも、ネイティブならばなんだか変だな、とか思うことがないのかい？
- ：うん、何だか変だと思っても、どこが変なのかわからなかったんだ。そういうことは大学の文法の授業で習ったのでわかるようになった。
- ：君の場合は先に言語能力を獲得していて、後から言語知識を学習したんだね。僕を含めて多くの学生は、先に言語知識を学んでから、意識的な練習をたくさんして、言語運用を高めることをしてきたんだ。
- ：なるほど、まったく逆だね。どっちがいいのかなあ。
- ：どっちがいいのかわからないけれど、違いは明らかだよ。後から文法を習うときって、どんな感じなのかなあ。
- ：僕の場合、スペイン語がかえって不自然になった覚えがある。文法って、むしろ弊害があるんじゃないかな、と思ったよ。あんまり文法を意識していると、それにこだわってしまって、スムーズな言語運用ができないんだ。
- ：君の場合、文法を知らないほうが、または、知っても意識しないほうがスムーズだったというわけだ。
- ：そうだね。文法を習うと、なるほどそういう仕組みだったのか、と理解できるんだけど、実際にそれをあまり意識していると、かえって邪魔になるんだ。
- ：僕らは文法を意識しなければ、最初は何もできなかったよ。それがだんだん意識しないようになることが理想だったんだ。

- ：言語学習において文法や理論はどのように位置づけたらいいんだろうね。
- ：君の場合と僕の場合で違っているかも知れないけれど、もしかしたら、共通する原理があるかも知れない。
- ：「…かも知れない」ばかりだね。
- ：事例があまりなくて、実験とかもできないから、仮定の話なんだ。事例についてはチャンスがあればいろいろな人の話を聞いたり、本で読んだりしているけれど、それは限られている。実験は、人の人生や生活にかかわることなのでできないし…。そこで自分自身を実験台にしているんだけど、それがどれだけ一般性があるのかわからない…。
- ：確かにむずかしいなあ。じゃあ、言語学習において文法や理論はどのように位置づけられるのかを知りたいときは、どうするの？。
- ：うん、僕は授業で文法や理論を教えるけれど、その効果を学生の小テストや意見のフィードバックを読んで観察しているんだ。
- ：たとえば？

音節の切り方

- ：たとえば、「音節」の切り方。ほら、この教科書を見てごらん。これって、小テストをすると学生にとってかなり難しいようだ。

(1) 語中に1つの子音があるときは、その前に音節の切れ目があります。このとき、二重字(ch, ll, rr)や、二重子音(pl, pr, bl, br, fl, fr, cl, cr, gl, gr, tr, dr)は一つの子音として扱います。→エラー! 参照元が見つかりません。

<input type="checkbox"/> ca- <u>sa</u> /kása カ サ/	<input type="checkbox"/> 家
<input type="checkbox"/> ca- <u>lle</u> /káye カ ジェ/	<input type="checkbox"/> 通り
<input type="checkbox"/> a- <u>rroz</u> /aróθ ア る ろ す/	<input type="checkbox"/> 米
<input type="checkbox"/> li- <u>bro</u> /líbro リ ブ ろ /	<input type="checkbox"/> 本
<input type="checkbox"/> si- <u>glo</u> /síglo シ グ ロ /	<input type="checkbox"/> 世紀

(2) 語中に2つの子音があるときは、その間に音節の切れ目ができます。このとき二重字や二重子音は一つの子音として扱います。

<input type="checkbox"/> Es- <u>pa-ña</u> /espáña エ ス パ ニヤ/	<input type="checkbox"/> スペイン
<input type="checkbox"/> Fran- <u>cia</u> /fránθia フ ら ン シア/	<input type="checkbox"/> フランス
<input type="checkbox"/> In- <u>gla-te-rra</u> /inglatéra イ ン グ ラ テ る ら /	<input type="checkbox"/> イングランド

(3) 語中に3つの子音があるときは、最後の子音の前に音節の切れ目ができます。このとき二重字や二重子音は一つの子音として扱います。

<input type="checkbox"/> cons- <u>tan-te</u> /konstánte コ ン ス タ ン テ /	<input type="checkbox"/> 一定の
<input type="checkbox"/> subs- <u>tan-cia</u> /substánθia ス ブ ス タ ン シ ア/	<input type="checkbox"/> 物質
<input type="checkbox"/> ist- <u>mo</u> /istmo イ ス ト モ/	<input type="checkbox"/> 地峡
<input type="checkbox"/> mons- <u>truo</u> /mónstruo モ ン ス ト る オ/	<input type="checkbox"/> 怪物

□□：僕は「音節」って、まったく意識していなかった。ネイティブはほとんど意識しなくても、どこで切れるか自然に身についているんだと思うよ。

○○：うん、たしかにそうだと思う。小説なんか読んでいると、たとえば、*inmediatamente* を強調して

¡¡IN-ME-DIA-TA-MEN-TE!!

なんて書いてあるしね。

二重子音

- ：それは、簡単な音節の切り方だけれど、教科書には、もっと複雑なケースについて説明があるよね。pl とか gr とか、fl だとか…。
- ：僕はそれを「二重子音」と呼んでいる。「二重母音」と同じように、そこで音節に切ってはいけないからだ。
- ：僕が習った文法の授業で何て呼ばれていたか覚えていないけれど、複雑だったことだけは覚えている。
- ：うん、それは pl, pr, bl, br, tr, dr, cl, cr, gl, gr, fl, fr だよ。
- ：全部言ったね。どこかでやめると思ったんだけど。全部でいくつあるんだろうね。
- ：数えたことがないけれど 10 ぐらいかな。…、う～んと、12 個だね。
- ：数も知らないで、なぜ全部言えたの？
- ：二重子音は全部 2 つの子音から成っているよね。第 1 子音は {p, b, t, d, c, g, f} のうちどれかだし、第 2 子音は {l, r} のうち、どれか、というわけだ。それを組み合わせればいいんだ。7 かける 2 で 14 個か。ただし、tl と dl は除く、という規則になっている。それで 12 個になるんだね。
- ：それらは教科書にも書いてあるけれど、僕はそれでも複雑だと思ったよ。大体、第 1 子音の {p, b, t, …} なんて覚えられないよ。第 2 子音はどうにか覚えられるかもしれないけれど。たった 2 つだから…。
- ：そこで、次の図式を提示したいんだけど。

	唇音	歯音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	c
有声閉鎖音	b	d	g
摩擦音	f		

- ：また、君が好きな「図式」がでてきたね。これを使うとどんなメリットがあるの？
- ：うん、それぞれの音がどのような位置で発音されているかわかるし、また、どのような方法で発音されているかもわかる。
- ：位置で言えば、唇音、歯音、軟口蓋音という分類になるね。発音の方法で言うと、閉鎖音と摩擦音があって、閉鎖音には無声と有声があるんだね。
- ：そうだ。この図式を使えば、二重母音の第1要素はわけなく言えると思う。…

fl と fr

- ：この図の中で f だけ特別だね。他は全部閉鎖音じゃないか。それにスペイン語の摩擦音は他にも z [θ], s, j [x] があるのに、なぜ f だけ特別に二重母音の第1要素になるんだい？
- ：そのことは僕もいつも不思議に思っていた。in-fluen-cia とか su-frir とかいう形で音節に切るのはなぜだろうって。でも音韻論の視点から見ると次のように説明できるよ。次がスペイン語の音韻全体の図だ。ここでは発音記号でなく文字で書くからね。

	唇音	歯音・歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	ch	c
有声閉鎖音	b	d		g
摩擦音	f	z, s		j
鼻音	m	n	ñ	
側面音		l		
弾き音		r		
震え音		rr		

- ：さっきの図と比べるとずいぶん複雑になったね。

- ：うん、教師は単純なものから複雑なものを提示するものだよね。最初から複雑なものを提示すると、その時点で拒絶されてしまうから。
- ：これで全部かい？
- ：うん、子音についてはこれで全部だ。
- ：真ん中にある子音に色が塗ってあるね。
- ：その真ん中にある子音は、どれも語末に出てくる子音だ。
- ：なるほど、そして真ん中にある子音は語末では使われないんだね。
- ：基本的には使われないね。club とか album とか reloj とかは例外だよ。
- ：それで、さっきの「音節」の話と何の関係があるの？
- ：スペイン語の子音の現れ方についてなんだけれど、音節末の子音の現れ方と語末の子音の現れ方は共通する原理に基づいている、と考えたらどうかな。
- ：たとえば？
- ：たとえば、in-me-dia-ta-men-te の例では、n は音節末にあるのは n が語末にも使われるからだ、と考える。
- ：なるほど、そうするとこの図の真ん中にある d, z, s, n, l, r は語末にある子音だから、音節末に来ても OK だね。
- ：ところが、{p, f, m, t, rr, ch, ñ, c, g, j} は基本的に語末にないので、音節末にもない…。
- ：それで？さっきからの問題は f が摩擦音なのに fl, fr という二重子音になる、ということだよね。…。あっ！
- ：わかった？
- ：わかった！f は語末にないから音節末にも来られない。そこで、*inf-luen-cia とか*suf-rir とか、そういう切り方ができないんだ。

- 〇〇：その通りだ。そして、*suf-rir という切り方をすると r が音節の初めになるから、語頭と同じ扱いをすれば震え音 rr になるはずだよ。
- ：ん？
- 〇〇：たとえば、Israél とか subrayar のケースなんだけれど、これらは Is-ra-él とか sub-ra-yar という風に切る。そうすると r は震え音 rr のように発音されるんだ。
- ：わかった。つまり語末と音節末の間に関係があるように、語頭と「音節頭（あたま）」の間にも関係がある、ってわけだね。
- 〇〇：その「音節頭」というのはいい名前だね。君の言う通り、賛成だ。
- ：さっきの問題に戻るけれど、f が音節末にならないから、音節頭にする、ということはわかった。他の摩擦音はどうなるのかな？
- 〇〇：s とか z とか語末に現れる摩擦音は音節末でも OK だから、たとえば Es-lo-ve-nia とか Haz-lo とかいう切り方になる。
- ：なるほど。でも j はどうなるの？j は語末には基本的に来ないから f と同じになるんじゃないの？
- 〇〇：実は j の摩擦音はラテン語の時代からあったものではなく、中世から近代にかけて出来た子音なんだ。それで、そもそも jl とか jr という連続が存在しないんだ。
- ：歴史的な理由で、問題にならない、ということかあ…。
- 〇〇：言語の仕組みは歴史的な理由と言語一般に関わる理由が考えられるからね。

tl と dl

- ：ところで、もう一つよくわからないことがあるんだけど、なぜ tl と dl は例外的に二重子音にならないんだろう？tl と

dl の第 1 要素と第 2 要素は発音位置が近いので続けるのが困難だからかなあ？

- ：メキシコのナワトル語などでは tl はふつうに発音されるから、発音がむずかしいということは一般化できないよ。
- ：それじゃ、そもそも tl とか dl はあんまり出現しないから、問題にならないのかな。
- ：atlas とか Atlántico とか adlátere とか Hacedlo とか…。確かにあんまり出現しないね。
- ：tr や dr はよく出現するのにね。
- ：メキシコではナワトル語起源の地名などで tl がよく使われるので、その影響で tl が二重子音となっているんだ。
- ：この問題も、さっきの音節末＝語末、音節頭＝語頭という公式を使うと一部は解決できるね。
- ：一部というと？
- ：うん、dl なんだけれど、Ha-ced-lo となるのは d が語末に来る子音だからだと考えるんだ。でも dl- で始まる単語なんかないよね。だから *Ha-ce-dlo はダメ。
- ：なるほど。じゃあ tl は？
- ：atlas とか atlético とかは t で終わる単語がないから、難しくなる…。
- ：うん、たしかにそうだ。でも tl- で始まる単語の難しさと比べて、t で終わる単語の難しさはどうかな。
- ：よく探してみると cenit とか chalet とかあるよね。
- ：他にもあるよ。argot, ballet, carnet, mamut, robot, tíquet, vermut …
- ：けっこうあるんだね。外来語ばかりだけれど…。
- ：たしかに外来語だけれど、語頭が tl- の語はほとんどメキシコ由来のものを除けば皆無だから、語末が t である語の容易さは比較にならないと思うよ。

- ：というわけで、atlas は a-tlas ではなくて、at-las となるんだね。
- ：メキシコのスペイン語を除けばね。
- ：いやにメキシコのことを言うんだね。…
- ：このような相対的な発音困難度という考え方は cons-tan-te とか mons-truo のような 3 子音のケースについても適用できるんだ。mons-truo の tr は二重子音なので 1 子音とみなすけど。
- ：たしかにこれらのケースは僕も迷ったことがある。
*con-stan-te と切れば -n は自然だけれど st-は不自然だ。一方、cons-tan-te と切れば、-ns は不自然だけど、t-は自然だ。
- ：そこで、st-の不自然さと -ns の不自然さを比べると、st-のほうが不自然の程度が大きいんだ。
- ：僕はどちらも同じくらいに不自然だと思うけど…。
- ：ここで問題になるのは、語末の不自然さを犠牲にするか、語頭の不自然さを犠牲にするか、ということだよね。
- ：うん。
- ：ここで、さっきの二重子音の問題がからんでくるんだけど、二重子音は語末ではなく語頭と語中にしか現れないんだ。だからたとえば monstruo ならば mons-truo のように切って音節頭にするとたとえば trueno の語頭と同じになる。monstruo の切れ方がこのようになるとすると、音節末に ns を認めたことになるので、今度は constante も同じように cons-tan-te とする…。

タイプライター

- ：う～ん、複雑だなあ。…。ところで「音節」って言語運用にとってどれくらい大事な概念なんだろうか？僕は「音節」なんてとくにこれまで気に掛けていなかったけれど、どうなの？

- 〇〇：以前にタイプライターを使っていたときは、音節の切り方を意識していたよ。意識していないと、タイプライターを使うことができなかった。
- ：そうそう。あの「チン」という音、なつかしいなあ。ページの右の方になると少し緊張したなあ。そして「チン」という音が鳴ったら、あと何字分打てるか計算して、単語が長いときには、音節をハイフンで切って、残りを次の行に送る、なんてことをやっていたね。
- 〇〇：あの右手でレバーをひっぱたくようにしてやったキャリッジリターン、なんだかタイプライターとけんかしているみたいだった。
- ：あのキャリッジリターンは現在のワープロでも同じことなんだけれど、パソコンがちゃんと文字数を計算してくれて、詰めたり伸ばしたりしてくれるので、ほとんど音節を気にしなくなった。
- 〇〇：タイプライターだとキーが重たいから、長い間打てなかったなあ。指や手首が疲れてしまって。
- ：でも論文の締め切り間際ではそんなこと言っていられなかった…。必死にバンバン叩いて打ち続けたよ。
- 〇〇：僕らのパソコンのキーインがうるさいのは、きっとあのタイプライター時代の名残りなんじゃないのかなあ。



ユニット

- ：もうタイプライターは使われないのだから、音節って概念は昔ほど必要でなくなったんじゃないの？
- ：でも音節は書くときだけでなく、発音するときにも大事な単位だと思う。スペイン語は音節の長さを大体同じくらいにして発音されるし。
- ：なるほど…。英語は強勢のない音節を弱化するけれど、スペイン語は弱勢の音節もしっかりと発音される。
- ：音節は発音のユニットだから、発音の問題の基本的な単位となっているんだ。…。ユニットとか単位というのは、スペイン語では **unidad** というけれど、これは **unir** 「つなげる」という動詞から派生しているよね。
- ：あんまり考えたことがないけれど、確かにそうだね。
- ：つまり「つながり」ということだ。言語的な単位については、さらに大きくしてければ、強勢グループとか句とか節とか文とか段落とかディスコースとか、いろいろあるけれど、発音のレベルでは、母音とか子音とかいう単位の次に重要だと思う。
- ：二重母音と二重子音も単位なんじゃないの？
- ：うん、たしかに独立した単位として見てもいい。でも、僕は二重母音と二重子音を一般の母音や子音を同じ扱いをするんだ。
- ：たしかに音節に切るとき、**ch**, **ll**, **rr** などの二重字や **pl**, **pr** などの二重子音は1つの子音のように扱おうとわかりやすくなるね。
- ：この教科書でも、そのように説明しているよ。それから、強勢を決めるときは音節が単位になるから、やはりしっかり意識しておいたほうがいいと思う。

地図

- ：このような教科書の説明には言語研究の知見が生かされているんだね。
- ：それをなるべくわかりやすく提示することが大事なんだ。文法とか理論とか言うのは、僕は「地図」みたいなものだと思う。
- ：文法と地図ねえ…。
- ：わかりやすい地図があると目的地まで行けるよね。でもいつも地図を見て歩くわけではなく、頭の中に入れて、地図をイメージしながら歩くこともある。そして理想的なのは、地図を見なくても、またイメージしなくてもちゃんと歩けるようになることだ。
- ：その土地で生活している人は地図はいらないけど…。それから、外から来た人の中で地図がなくなったらってどんどん歩き回っている人もいるけど…。
- ：それはまさにネイティブの状態だ。また、経験が豊富な実践派の人ならば、地図なんかなくなったらって、自由に歩ける。でも僕みたいに経験が不足している外国人は地図がなければ迷子になってしまう。
- ：どうしても最初は地図が必要なんだね。
- ：そう、そして僕らはだんだんと地図から独立して独り立ちができるようになることを目指すわけだ。
- ：それはどんな地図だろう？
- ：その地図の形式や内容については、またいろいろと議論したいね。



8.2. 授業

今日の授業の後半では、「音節」という単位を扱います。最初にちょっと復習しましょう。次が音節を作るときの規則です。

(…)

ここで、**padre** や **siglo** などに現れる二重子音という子音の連続を復習しましょう。**dr**, **gl** など二重子音の例をあげてレポートに書いてみましょう。

(…)

いくつぐらい書けましたか。ここでは、二重子音の数が問題なのではなく、その仕組みを探ることが問題です。二重子音の仕組みは第1要素が次のように分類され、閉鎖音と摩擦音であること、そして第2要素が **l** と **r** であることです。

	唇音	歯音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	c
有声閉鎖音	b	d	g
摩擦音	f		

この図を使って、 $\{p, b, t, d, c, g, f\} + \{l, r\}$ の組み合わせを作れば、二重母音になります。ただし、**tl** と **dl** は除きます。もう一度二重母音のリストを作ってレポートしてください。

(…)

ここで二重子音について次の2つの問題を設定します。

- (1) この第1要素の子音を見ると **f** だけが摩擦音で他の閉鎖音と違っています。この理由は何でしょうか。
- (2) なぜ **tl** と **dl** は二重子音にならないのでしょうか。

(1)について考えるためにスペイン語の子音の全体図を見ましょう。

	唇音	歯音・歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	ch	c
有声閉鎖音	b	d		g
摩擦音	f	z, s		j
鼻音	m	n	ñ	
側面音		l		
弾き音		r		
震え音		rr		

この図で真ん中にある **d, z, s, n, l, r** をマークしました。これらは、語末に現れる子音です。このようにスペイン語では、歯音・歯茎音という口の中央部で発音される子音が語末にくることができます。思いつく単語を書いてください。（ただし、**t** と **rr** は除きます。）

さて、ここで「音節末の子音と語末の子音には共通性がある」という仮説を立ててみましょう。たとえば、**inmediatamente** のような語は **in-me-dia-ta-men-te** と切れますから、音節末にある **n** は語末にもよくある子音であることがわかります。上の図でマークした中央部の子音に含まれます。

一方、**influir, sufrir** ではどうでしょうか。もし、これらを **inf-luir, suf-rir** のように切ってしまうと、音節末に **f** を認めることとなります。語末に **f** はありませんから、さっきの仮定に反することとなります。さっきの仮定が正しいとすると、不自然な位置だということになります。そこで、**in-fluir, su-frir** のように切ります

また、このように切ると、今度は **fl** や **fr** という連続が語頭に起こるかどうかが気になります。辞書を使って探してみましょう。たしかに、**flor** や **frío** などたくさん見つかりますね。

このように、音節末と語末、そして音節頭と語頭は共通する子音になることがわかります。

sl, sr, zl などと同じ「摩擦音+l, r」という構造ですが、二重母音になるのでしょうか。Es-lo-ve-*nia*, Is-ra-el, Haz-lo, ... どれも2つの音節に分立して、二重子音にはなりません。この理由も、「音節末=語末、音節頭=語頭」という図式から導き出せます。s, z は語末にある子音ですから音節末にあっても OK です。もし、E-slo-ve-*nia*, I-sra-el, Ha-zlo のように切ると、sl, sr, zl という語頭にはない子音連続ができてしまいます。それは「音節末=語末、音節頭=語頭」という図式に反するのです。

(2)についても、一部は先の図式で説明できます。たとえば、Hacedlo や adlátere を Ha-ce-dlo, a-dlá-te-re とすると、dl という語頭にない子音連続ができてしまいます。一方、Ha-ced-lo, ad-lá-te-re ならば、語末の d も語頭の l も認められますから、OK です。

atlas, atleta などの tl は、少しむずかしくなりますが、やはり tl は語頭にはないので、at-las, at-le-ta のように切ります。そうすると t という語末にはないはずの子音が音節末に現れることとなります。しかし、語末の t はまったくないわけではありません。argot, ballet, carnet, cenit, chalet, mamut, robot, tíquet, vermut など、外来語では多く使われます。このことは強い根拠にはなりませんが、語頭の tl と比べると、語末の t は比較的許容範囲にあると考えられます。なお、tl, dl は非常に頻度の低い子音連続です。

同様に、monstruo などのような複雑な子音連続の切り方も、「音節末=語末、音節頭=語頭」という図式で解釈してみましよう。仮に mon-struo として切ると、str という語頭にはない子音連続ができてしまいます。「摩擦音+二重子音」は一般に語頭には現れません。これを mons-truo のように切ると、語頭の問題はなくなります。確かに語末に ns はないのですが、これは語頭の str と比べると許容範囲にあると考えられます。

それでは、今日の授業を終わります。レポートを書き終えたら、提出してください。

8.3. レポートから

- 語学を「なんでだろう」と思って考えたことはありません。私は実際に使用して不便がないのならかまわないと思ってしまふからです。また、不規則なものがあっても数が多くなければ覚えれば良いのではないのでしょうか。
- 今までは考えたことがなく、どちらかという直感的に使っていた部分だったので、考えてみるとどこから手をつければいいのかとまどいました。
- 音節を分けるということは普段ほとんど考えないので、単語を勝手に切って、次の行に続けることがよくあります。今度はちゃんと法則を考えて切りたいと思います。
- 単語とは、やはり母語話者にとって言いやすいように作られていることが分かった。単語の文字の連続に関係性があることは、確かに当然であろうが、気付かされた。
- さまざまな言語がそれぞれの特徴があるのだなと思いました。たとえばスペイン語にはfで終わる単語がないので、fの特殊性が生まれるわけで、他の言語にしてみればそれが当てはまるとは限らないというところが言語の面白さだなと思いました。
- 語末にこれる子音とこれない子音があるというのがおもしろかったです。よくよく勉強するとスペイン語には本当にたくさん規則があるのですね。いままで考えてみなかった問題です。
- 言語というのは人とのコミュニケーション、記録を残す、知るために使うツールであると私は思っている。その言語には、アクセントといい、音節といい、規則があることは面白いと思うが、私はその言語をツールとして「使えればいい」と思うので、解明する必要性はあまり感じられない、というのが正直な意見である。

レポートを読んで

今回は、たしかに実用性があまりないテーマなので、レポートには「とまどい」や必要性への疑問などが多かった。「なぜか」という問題設定の仕方も、あまり実用性には結びつかない。一方、「考えてみたこともないこと」、それが案外「意外だ」という驚き、のようなりアクションもある。

言語研究からの「理論」という都市と、応用教育研究が示す「実践」という都市の間に、果たして有効な橋を建設することができるのだろうか。これからも挑戦してみたいと思う。



9. パターンを適用する

9.1. 対話

未来形の規則変化

- ：この小テスト見て。未来形の課なんだけど。
- ：かなりキビシイね。1年生にはむずかしいのかな。
- ：この結果を見るとかなりむずかしいみたいだ。10点満点で平均点が6.2。Tú cantarés とか、Nosotros cantaremos とか、かなり混乱している。
- ：君の気持ちわかるよ。
- ：わかってもらってうれしいなあ。
- ：1年生の気持ちもわかる。
- ：オイオイ。
- ：だって、1人称単数が Yo cantaré ならば、現在形のパターンだったら、Tú cantarés になるはずだし、それを直されて Tú cantarás, Él cantará とするならば、Nosotros は cantaremos になるはずだって考える気持ちがわかる…。
- ：そうならないように授業ではちゃんと練習したんだけど…。まだ練習不足かな。
- ：うん、練習不足もあるだろうし、理解不足もあるかもしれない。
- ：理解するのはそんなにむずかしくないんじゃない？未来形の語尾はぜんぶの動詞で同じだし…。これだけ覚えればいいんだから。

é	emos
ás	éis
á	án

- 〇〇：この活用語尾はふつうと違うよね。だから、**Tú cantarés** とか、**Nosotros cantaremos** とかいう間違いがあったんだね。
- ：うん、もっとしっかり練習してもらわないと…。ちゃんと練習して活用語尾を覚えていれば、次のように活用形をぜんぶ出せるはずだ。

<u>cantaré</u>	<u>cantaremos</u>
<u>cantarás</u>	<u>cantaréis</u>
<u>cantará</u>	<u>cantarán</u>

- 〇〇：練習不足もあると思うけど、丸暗記方式でやると、いつか挫折するんじゃないかな。個人的な経験からなんだけど、丸暗記でやって僕は挫折したから、理解した上で練習すると思う。
- ：理解するって、何を？
- 〇〇：この活用語尾は基本的に **haber** の活用と同じ音になるよね。

he	hemos
has	habéis
ha	han

- ：なるほどね。中世文学を読んでいると、**comer lo (h)e** なんて形がよく出てくるからね。
- 〇〇：そう。だから初級者もスペイン語の未来形が不定詞+**haber** の活用からできたことを意識するといいんじゃないかな。
- ：だけど、**comer + éis** のときだけ、**habéis** ではなくて、**éis** を使う、という例外があるけど。
- 〇〇：でも **habéis** だって、まったく **éis** と違って形じゃない。むしろ **haber** の活用形全体を見ると、ほかの全部が弱化して短縮しているけれど、**habéis** だけガンバッテ完全な形で残っている、っていう感じだ。

- ：つまり、haber の活用パターンを未来形に応用する、ということだね。でも、この教科書は未来形の後に haber の活用形を使う現在完了形があるので、そのやり方は無理だよ。
- ：僕は先に現在完了形を教えるけどね。完了時制が終わったら、未来形に入ると進み方がスムーズになる。
- ：このようなパターンを理解してから練習したほうがいい、というんだね。
- ：ただ闇雲に丸暗記すると、頭のキャパシティを越えてしまう可能性があるし、実際自分もそのような経験があるし、学生の様子を見てても僕と同じみたいだから…。
- ：中世スペイン語の活用形態を現代スペイン語の初級教育に応用してみようかな。何だか、僕の専門を1年生に語ることになりそうだなあ。いいのかな。
- ：少しだけ話してあげれば興味をもってくれる学生がいると思うよ。
- ：『わがシッドの歌』とか『よき恋の書』とか…。
- ：まさか、中世スペイン語のテキストを解説したりしないよね。



Estatua de El Cid Campeador, Burgos

未来形の不規則変化

- : やってみたいなあ。でも3年生までおあずけだ。…。実は、未来形の不規則の小テストの結果が、これよりもっとひどいんだ。惨憺たる状態。これも練習不足だと思うんだけど、君に言わせれば理解不足もある、ってこと？
- : うん、そもそも未来形の不規則って、どのようなパターンになっているのかな？
- : 僕は、あまりパターンなんか意識させるよりも、「習うより慣れろ」方式で、何度でも活用練習をしているけれど…。

中世スペイン語の世界

- : たしかに活用練習も大事だけど…。やっぱりここでもちょっと中世スペイン語の世界をのぞいて見ることにしよう。
- : 文学テキストならば、わくわくするなあ。
- : ごめん、僕は言語の実態のほうに興味があるので、文学テキストは参考程度にしか参照しないんだ。文学テキストはかなり個性的なスタイルが強く出るからね。だから、おもに古文書館に保存されている各地の公文書を比較しているんだ。公文書なので年代と発行地も特定できるし…。ちょっと、この資料を見て。

<i>tenra</i>	13	13c:Huesca 14c:Huesca - - - - - 15c:Huesca
<i>tenran</i>	4	13c:Huesca 14c:Huesca - -
<i>tenrra</i>	13	13c:Huesca 13c: s. l. 14c: s. l. - 14c:Huesca - - - - - 15c:Huesca - -
<i>tenrran</i>	2	13c: s. l. -

これを見ると *tener* + *á* の未来形が 13 世紀から *tenrá* という形で出現していることがわかる。語形の後にある数字が頻度、その後に世紀と文書の発行地が並んでいて、ハイフン(-)は同じ世紀と発行地の繰り返しを示しているんだ。

□□ : なるほど、Huesca ばかりだね。アラゴン地方に多かった語形なのかな。

○○ : うん。そして、次が *porná* とか *terná* とかいう形、つまり *n-r* が *r-n* となって音の位置が転換した未来語形の分布を示す表だ。

<i>porra</i>	1	15c:Toledo
<i>porran</i>	2	16c:Madrid -
<i>porne</i>	1	16c:Guadalajara
<i>porrna</i>	1	15c:Cádiz
<i>porrne</i>	1	17c:León
<i>terna</i>	13	14c:Teruel - - 15c:Zaragoza - 15c:Madrid 16c:Valladolid 16c:Madrid 16c:Toledo - 16c:Málaga 16c:Madrid -
<i>ternan</i>	34	14c:Teruel 14c:Huesca 15c:Zaragoza - - - - - - - - - - 16c:Valladolid - 16c:Madrid 17c:Madrid
<i>terne</i>	5	15c: s. l. 15c:Toledo 15c:Cantabria 16c:Segovia 16c:Toledo
<i>ternedes</i>	5	15c:Zaragoza - - - 15c: s. l.
<i>ternemos</i>	3	15c:Toledo 15c:Salamanca 16c:Cádiz

□□ : 今度は Toledo とか Madrid とか Guadalajara とか、カステイリーヤの地名がたくさん出てきたね。

○○ : うん。そして、最後は現代スペイン語の不規則未来形の分布を示す表を見て。

<i>pondra</i>	1	17c:León
<i>pondran</i>	1	15c:Zaragoza
<i>pondre</i>	1	17c:Cuenca
<i>pondria</i>	2	15c:Burgos 17c:León

カトリック両王

- ：さっきの資料が役に立つの？
- ：うん、君は地名の分布に注目していたよね。
- ：うん、たしか NR と NDR がアラゴン地方の特徴だったね。
- ：そして、僕は年代に注目した。NR は 13, 14 世紀のアラゴン、RN は 14, 15, 16 世紀のカスティーリャ、NDR は 15 世紀にアラゴン、16, 17 世紀にアラゴンとカスティーリャだ。
- ：ちょっと年表を書いてみよう。

	13c	14c	15c	16c	17c
Aragón	NR	NR	NDR	NDR	NDR
Castilla		RN	RN	RN, NDR	NDR

う～ん。NDR は 15 世紀にアラゴンに発生して、それがカスティーリャに波及したのかな。あっ！16 世紀といえば、レコンキスタが終わって、カトリック両王によるカスティーリャ王国とアラゴン王国が合併が済んで、共同で統治された時代だ。

- ：うん。だから NDR はアラゴンから波及した、というのもうなずける。だとすると、これまで不可解だと思っていた RN > NDR という変化の音韻的な原因は考える必要がなかったんだ。外来要素なんだから。
- ：なるほどね。こういうことは、単発の文学作品を読んでもわからないよね。各年代の各地の文書を比較するとわかるんだね。でも各地に散らばっている古文書を発掘して、それを言語資料にするのは大変な作業だね。
- ：すべてチームの共同作業になるんだ。文書は各地で発行されるけれど、保存されているのはその文書の発行地ではなくて、届け先になるので、1 つの文書館だけでもかなり地域のバリエーションが見つかるみたいだ。



言語内的要因

- : RN - NDR の問題にもどるけど、動詞の活用形が外来要素によって決定される、というのは、ちょっとショッキングだなあ。文法の中心部分なのに、そんなに簡単に変わってしまうのかなあ。なぜカスティーリャ人は自分の言葉の文法の一部を、他の言語の形に合わせたんだろう？
- : 君の疑問は当然だと思うよ。僕もずいぶん考えた。そんなことってあるんだろうか？ってね。カスティーリャの生粋の未来形は NR だ。terné, verné, porné...これって、ちょっと変だよ。不定詞とは違う語根になっている。tener, venir, poner から見ると「語根子音転換動詞」ということになる。こんなことって、他の動詞活用形にはない。未来形でも、他の動詞には一般に起きない…。
- : それで嫌 (いや) になって、アラゴンの新型を採用したの？
- : 嫌になったのかどうかわからないけれど、動詞の活用パターンを統一しようとする動きはいつも大きな流れとしてあるんだ。なるべく規則変化の形に近づけようとする類推作用だ。
- : それではアラゴンの新型には問題がなかったの？

〇〇：うん、これがまさにカスティーリャの音韻パターンにピッタリだった。この間話題にした音節のパターンを思い出してほしいんだけど、あのとき二重子音を見たよね。その中でとくに DR に注目してほしいんだけど、この資料の中ではこんな分布をするんだ。

drʔv	12c	13c	14c	15c	16c	17c	Total
dra	5	177	129	194	101	42	648
dre	23	767	404	333	306	76	1909
dri	8	388	165	310	192	71	1134
dro	17	688	249	186	318	62	1520
dru	1	0	0	2	1	0	4

□□：dru が少ないけれど、それを除けば全体的にかなりの数になるね。

〇〇：そう。つまり、dr というのはカスティーリャ語にとって、とても自然な子音連続だったんだ。そして、今度は NDR だ。

ndrʔv	12c	13c	14c	15c	16c	17c	Total
ndra	0	47	32	36	14	19	148
ndre	13	292	95	80	107	12	599
ndri	0	1	0	1	3	4	9
ndro	1	2	1	0	4	0	8
ndru	0	0	0	2	0	0	2

□□：さっきと比べてずっと減るけれど、縦に見ると ndra と ndre が比較的多いね。横に見るとどうなのかな？

〇〇：それぞれの世紀で資料の数が違うから、ここでは横の比較はできないんだ。縦に見た ndra と ndre について何か気がつくことない？

□□：う～ん。…。あっ！未来形は ndra と ndre になるんだ。

- ：そうだ！つまり、カスティーリャではアラゴンの未来形が入ってくる前の15世紀以前において、すでに *ndra, ndre* は多用されていた音連続だったんだ。
- ：そこで16世紀にアラゴンからやってきた **NDR** 未来形をそのまま受け入れるのに抵抗がなかったんだね。日本語の外来語とすると、スペイン語のように発音しやすいものはほとんどそのまま受け入れているよね。「ドンキホーテ」とか「インカ帝国」とか。
- ：うん、つまり言語の変化を見ると、いつも社会的な要因、つまり言語外的要因と、音パタンのような言語内的な要因を同時に考えるといい、と思っているんだ。

スペイン語教育に応用

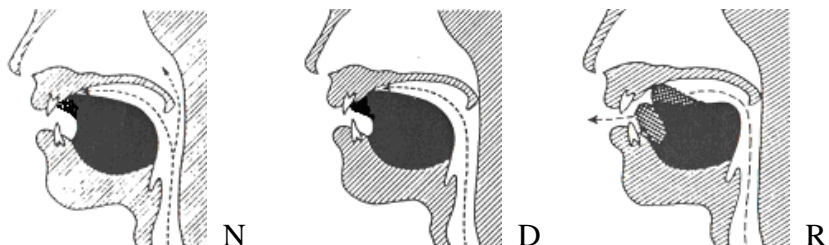
- ：なるほど…。でも、こういったパタンなんだけれど、何かスペイン語教育に役に立つの？
- ：直接には役に立たないかもしれないけど、未来形の不規則を学ぶとき、*saber > sabré* タイプから *tener > tendé* タイプ、そして最後に *decir > diré, hacer > haré* という順番で、パタンがどのように変化しているかを理解しながら、練習したらいいんじゃないかな。
- ：その順番はスペイン語の歴史を反映しているんだね。ところで、*decir > diré* と *hacer > haré* はなぜあんなに短くなったの？
- ：中世では *c* は有声だったよね。 *z* で書かれている。次が資料を検索した結果だ。

%zr%	12c	13c	14c	15c	16c	17c	Total
dizremos	0	0	1	0	0	0	1
fallezran	0	0	0	1	0	0	1
plazra	0	1	0	1	0	0	2

- : なるほど、decir だけでなく、fallecer とか placer とかも z になっているね。
- : その後の母音が落ちて上のような形になる。これが現代スペイン語の diremos になる直前の形だ。s や z は r の前では消えやすいんだ。
- : じゃあ、こんど decir と hacer の未来形を教えるときは、2 つの動詞の子音が cir, cer になっていることをワンヒントで言ってみようかな。
- : いきなり暗記練習に入るんじゃないくて、その前にちょっと示唆するといいね。
- : saber のタイプだけど、他に poder > podré とか、querer > querré とかあるよね。これも br, dr, rr というスペイン語の二重子音や二重字のパターンになっている…。
- : そのことは、すでに文字と発音の部分で勉強したんだから、その知識と関連させたらいいと思う。僕たちは新しいことを学習するとき、それがすでにもっている知識と有機的に関連づけられると、「なるほど」と合点がいくからね。

発音の仕組み

- : 僕が合点がいかないのは、やっぱり poner > pondré のタイプかな。それがアラゴン国から入ってきたのはわかったけれど、アラゴンではどうして ner が ndr になったんだろう？
- : e が直接 d になるんじゃないくて、poner + e > ponré > pondré のように、一度 e が落ちてできた NR という連続の間に D が入ったことは、さっきからの資料でわかるよね。カスティーリャの RN は別に置くけど。
- : うん、だから NR > NDR のプロセスがよくわからないんだ…。
- : うまく描けないんだけど、この図を見て。



左が N の発音で、肺から上がってくる空気が口腔に行くとき、歯の位置でストップしているけど、鼻腔への道は空いているから、「ン…」というふうに息が続くかぎり伸ばせるよね。

真ん中の図をとばして、右の図だけれど、これは R を発音を示している。鼻腔への道を閉じて、息は口腔だけに流れる、その息を使って舌尖をふるわせているんだ。N の後の R は震え音だったと推定されている。

つまり、N では舌尖が歯の位置にあって鼻腔への道が空いている、R では舌尖が震えて鼻腔への道が閉じている。この口腔と鼻腔でやっている 2 つの動作を同時にしなければ、NR という連続が発音できない。もし一瞬でも鼻腔が先に閉じてしまったら…。

□□：D の発音になる…。

○○：そう、それが真ん中の図だ。

□□：なるほど…。でも逆のケースはないのかな。鼻腔が開いたまま舌尖の震えがはじまる、というのは…？

○○：空気が鼻腔に流れているので、口腔内での勢いがいいから、舌尖を振るわせるのはむずかしいと思うなあ。

□□：なるほど、ここに並べた N, D, R はどれも歯・歯茎音だね。位置は動かないからね。この間の図だとこうなるなあ。

	唇音	歯音・歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	ch	c
有声閉鎖音	b	d		g
摩擦音	f	z, s		j
鼻音	m	n	ñ	
側面音		l		
弾き音		r		
震え音		rr		

このパターンがわかっているならば、salir > saldré もやっぱり同じパターンだということがわかるね。

○○：うん、原理は同じだね。

9.2. 授業

今日の授業の後半では先週取りあげた二重子音についてさらに考察したいと思います。いきなりですが、次の動詞の未来時制1人称単数形をレポート用紙に書いてみましょう。

cantar > cantaré, comer > comeré, vivir > viviré, saber > sabré, poder > podré, querer > querré, poner > pondré, tener > tendré, salir > saldré, venir > vendré, decir > diré, hacer > haré

saber 以下は不規則ですが、次のように語尾は規則変化と同じです。

comer <u>é</u>	comer <u>emos</u>
comer <u>ás</u>	comer <u>éis</u>
comer <u>á</u>	comer <u>án</u>

sabr <u>é</u>	sab <u>emos</u>
sabr <u>ás</u>	sabr <u>éis</u>
sabr <u>á</u>	sabr <u>án</u>

みなさんはこの活用形をどのように覚えましたか？ 1年生はかなり苦労しているようです。たとえば、**tú cantarés** とか、**nosotros cantaramos** とかいう間違いをよくします。完全にできるようになるまで練習を積まなくてはなりません。

練習をするとき丸暗記するだけでなく、一度、未来活用形の仕組みを理解しておくとも効果があるかもしれません。未来形の仕組みは、**cantar + haber** の活用形という組み合わせからできました。**haber** は古いスペイン語では「持つ」という意味があったので、

「…することを持つ」

↓

「…することになっている」

↓

「…するだろう」

という意味の変化があったと考えられます。

ここで **haber** の活用形を復習しましょう。

he	hemos
has	habéis
ha	han

h は発音しませんから、これをとって、**comer** の後につけてみてください。habéis のところは éis の部分だけにしましょう。ハイ、未来形が出来上がりました！

次は不規則変化です。不規則変化は中世スペイン語の時代に不定詞の語尾の母音が脱落したためにできた形です。母音が脱落す

るのは強勢がなかったからです。不定詞の語尾には強勢がありますが、**haber** の活用形がつくと、そちらに強勢が移り、不定詞の部分が弱くなりました。

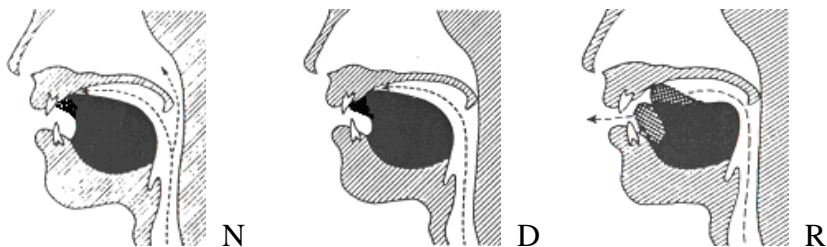
そして母音 **a** は口を大きく開けて発音するので、エネルギーがあったため脱落しませんでした。この理由から不規則動詞は **er** 動詞と **ir** 動詞に限られます。

中世のスペイン語では **comer** も **vivir** も **e** や **i** を落として、**combré** だとか、**vivré** だとかいろいろな不規則形がありました。現代スペイン語では基本的に 10 個の動詞だけになりましたが、これらは使用頻度が高いので、しっかりと不規則形が残ったのでしょう。また、**componer** とか、**mantener** など基本となる動詞が不規則であれば、それと同じパターンにします。

saber > sabré, poder > podré, querer > querré は母音を落として **br, dr, rr** という子音連続ができています。最初の 2 つは前回の授業であつかった二重子音です。**rr** は二重字です。どちらもスペイン語のふつうのパターンですね。

poner, tener, venir で母音が脱落すると、**ponré, tenré, venré** になります。おや？この **nr** はあまり見ないパターンです。思いつく言葉がありますか？そこで、**n** と **r** の間に **d** を入れてみましょう。**pondré, tendré, vendré** になります。この **ndr** というパターンは **Andrés, Sandra, golondrina** ..などいろいろな言葉に使われます。

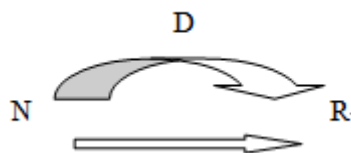
実際に **nr** という発音をするよりも **ndr** と発音するほうがやさしいのです。次の図を見てください。



左が N の発音で、肺から上がってくる空気が口腔に行くとき、歯の位置でストップしていますが、鼻腔への道は空いているから、「ン…」というふうに息が続くかぎり伸ばせます。

真ん中の図をとばして、右の図を見てください。これは R を発音を示しています。鼻腔への道を閉じて、息は口腔だけに流れ、その息を使って舌先をふるわせています。N の後の R は震え音だったと推定されます。つまり、N では舌先が歯の位置にあって鼻腔への道が空いています、R では舌先が震えて鼻腔への道が閉じています。この口腔と鼻腔でやっている 2 つの動作を同時にしなければ、NR という連続が発音できないのです。

もし一瞬でも鼻腔が先に閉じてしまったら、そのときが D の発音になります。それが真ん中の図です。このように N→D→R のような経路のほうが N→R というダイレクトな経路よりスムーズなのです。



ここで、先週の授業で見た子音の図をもう一度確かめてみましょう。n, d, r は同じ位置にありますね。そして *salir* > *saldre* のケースで出てくる l の子音もやはり同じ位置（歯音・歯茎音）にあることを確かめてください。

	唇音	歯音・歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音
無声閉鎖音	p	t	ch	c
有声閉鎖音	b	d		g
摩擦音	f	z, s		j
鼻音	m	n	ñ	
側面音		l		
弾き音		r		
震え音		rr		

さて、実は中世のカスティーリャ地方では、母音脱落形の *ponré, tenré, venré* の *n* と *r* を逆転して *porné, terné, verné* という形が使われていました。これも *nr* という連続を避けたためだと思われれます。そこで疑問が生じるのですが、*porné, terné, verné* から現代スペイン語の *pondré, tendré, vendré* ができるのでしょうか。*r* と *n* の間に *d* を入れたら *pondné, terdné, verdné* になってしまいます。こんな連続はスペイン語のパタンになりません。そこで、*porné, terné, verné* から、もう一度 *ponré, tenré, venré* に再逆転して、それから *pondré, tendré, vendré* になったのでしょうか。これも考えにくいと思います。

これが長い間未来形の謎でした。それが最近の研究によって、*pondré* のような形が 15 世紀にアラゴンで出現し、それが 16, 17 世紀にカスティーリャに波及したことがわかりました。さっき説明した *pondré* という *d* が入るパタンはカスティーリャの外で起きたことだったので。



そこで、また新たな疑問が生じます。なぜ **pondré** という外来形式がすんなりとカスティーリャに受け入れられたのでしょうか。皆さんはスペイン史の授業で中世ではカスティーリャとアラゴンはそれぞれ独立した王国であったことを習いました。そして、15 世紀に結婚したカスティーリャのイサベルとアラゴンのフェルナンド、つまりカトリック両王の時代に両王国が合併されたことを思い出してください。

この政治的・社会的・歴史的背景に加えて、私たちはもう一度言語内的な要因を考えたいと思います。さきほど述べましたように、NR よりも RN のほうがスペイン語の音連続のパターンが（未来形以外で）多く使われていたので、カスティーリャでは **porné** という未来形が生まれました。でも、この形は不定詞(**poner**)の子音連続と違うので、アラゴンの未来形 **pondré** が採用されたのだと思います。そしてこの新型未来形は **ndr** という連続を持ちますが、これはカスティーリャでも使われるパターンなので、問題がなかったのでしょうか。次の表は資料内の分布を示すものです。

	12c	13c	14c	15c	16c	17c
NR	6	88	136	176	76	30
RN	81	1,004	450	466	620	169
NDR	14	342	128	119	128	35
全語数	9,540	195,352	196,710	225,948	196,174	62,424

不規則未来形は不定詞語尾の母音(e, i)を落としたことよって生まれましたが、それでできた子音連続はスペイン語の二重子音(**br, dr**)や二重字(**rr**)のパターンに合っています。さらに、**decir > diré, hacer > haré** という短縮形の特徴として、語根の子音が **c** であることにも注意しましょう。この短縮形は中世の **dizré, fazré** という母音脱落形に由来します。語中にある **z** は不定詞の **c** が有声化したものです。

みなさんはすでに未来形を習得していますので、改めてこのような歴史的変化の仕組みを理解するのは容易だと思います。一方、1年生はまだ完全に未来形が作れないことがあるので、たくさん練習が欠かせません。そのとき、次のことを理解してから練習すると効果があがる可能性があると思います。

- (1) 未来形の語尾が **haber** の活用とよく似ている。
- (2) 不規則変化は母音の脱落によって生じたもので、次の 3 種類がある。
 - (a) 母音が脱落して二重子音(**br**, **dr**)や二重字(**rr**)が生まれたケース (**saber** > **sabré**, **poder** > **podé**, **querer** > **querré**)
 - (b) 母音が脱落し、**n**, **l+r** の間に **d** が入って、二重子音が生まれたケース (**poner** > **pondré**, **tener** > **tendré**, **venir** > **vendré**, **salir** > **saldré**)
 - (c) 母音が脱落し、さらに子音(**c**)までも脱落したケース (**decir** > **diré**, **hacer** > **haré**)

今日の授業はこれで終わりです。レポートを書いて提出してください。

9.3. レポートから

- 私は **haber** の活用形をまったく意識したことないです。**sabré**, **pondré**, **saldré** などの動詞も、不規則動詞としてそのまま覚えてきたけれど、歴史的に見てもちゃんと理由があるんだなあと思いました。今の活用の形になる以前に別の活用があったというのはおもしろいです。
- **haber** と未来の関係を関連づけたことはありません。未来形の不規則活用ができた理由が、発音時の舌の位置によるものだとは思いませんでした。同じ位置に舌があるから、

その流れで-dréのような活用ができるのはおもしろいと思いました。

- haber と未来形について関連づけたことはなかった。今まで未来形になぜ d が出てくるのか疑問に思ったが、今日の説明を聞いて納得することができた。
- 未来形を学ぶとき、haber の活用とはまったく関連づけていないです。やはりただ単に口頭で繰り返し練習して覚えしました。未来形がなぜこのような形になったのか初めて知りました。もしアラゴン地域の発音が受け入れられず、Castilla の”terná”という形が続いていたら、今も私たちは tendrá という形に出会わなかったのだと考えると不思議な気分です。
- haber の活用をもとに未来形を覚えた記憶がある。今でもそうしている。未来形以外にもそうしているものが多い。n と d はまったく違う音で、なぜ n→d? と思っていたが、変化するには共通点があることがわかった。
- haber との関連づけについては習ったのかもしれないが忘れていた。未来形についての歴史が一直線ではなく、2つの歴史があると知って、すべて理由があるのだと感心した。
- 私は未来と haber の意識化はなかった。私はすんなり覚えられた気がした。未来形が初めてでてきたとき、語尾にこれらをつければいいんだ、と単純に思ったが、変形のものもあるため、それがでてきたとき、完了過去（点過去）の変形動詞とかぶって混乱したのを覚えている。
- 未来形が haber の活用形と同じということは軽く触れていて知っていましたが別のものとして覚えしました。未来形を歴史的に見るとさまざまであるが、現在のスペイン語ではルールは少なく統一性があると思いました。ルールが少なくてよかったです。

- haber と未来の関係について習ったこともないし、考えたこともなかったです。とにかく原形のうしろに é とか ás をつける、と覚えました。不規則についてはとにかく丸暗記しました。カスティーリャとアラゴンの相互関係など、歴史的な様々な要因で変わっていったのがおもしろかったです。子音の表を見ると、なぜ d が入るのかなどよく理解できて助かりました。
- 未来と haber の関係は意識したことはない。未来は未来で覚えた。初めて未来形を習ったとき、それまでより不規則が少なくて良いと思ったが、なぜ”d”が加わるのか謎だった。しかし、その理由は言語の移り変わりと歴史を見ると解明することに気づいた。
- 未来形と haber の関連づけは、今初めて気づきました。このように覚えてはいません。不定詞に é, ás, ...をつける、と覚えました。未来形の形成のプロセスが音節と関連している、というのはなかなか興味深いと思った。ふだん理由も考えず覚えているものの理由、起源をたどるのはおもしろいと思う。

レポートを読んで

多くの場合、未来形の活用語尾が haber の活用とほとんど同じであることについての意識化はなかったようだ。それでもしっかりと練習して習得しているのだから、これはすばらしいことだ。未来形は、あまり理由とか由来とか考えなくても、ちゃんと練習すれば確実に習得されるケースなのだろう。

スペイン語専攻の学生は、多くの時間をかけてしっかり練習しているので習得できているのだが、一般外国語の小テストの結果を見ると、その現実はかなりきびしい。専攻では一週間に7～8コマのスペイン語の授業があり、自習時間は1日平均2～3時間である。一方、一般外国語では一週間に2～3コマのスペイン語

の授業があり、自習時間は1週間平均1～2時間である。この差は非常に大きい。

一般外国語の教育・学習法は専攻とは別に考える必要がある。一般外国語ではプラクティスの時間が圧倒的に不足している。それを埋めるために、限られた練習時間内でさらに練習を増やす工夫をするよりも、むしろ理論的な枠組みや歴史的な背景を理解させたほうがよいだろう。

スペイン語がどのような言語なのかを知ること、一般外国語の学生も、そして専攻の学生も興味を持っているようだ。しかし、理論的な枠組みや歴史的な背景ばかりを羅列して述べてはいけない。知の枠組みをきちんと構築し、それを基礎として有機的に関連づけながら新知識を積み上げていく方式をとらないと、理論も歴史も単なるバラバラの知識の寄せ集めになってしまう。これでは地震がきたら崩壊してしまう建築物と同じだ。スペイン語学習・教育の建築学とはどのようなものなのだろう。



10. 方法と理由を考える

10.1. 対話

分数による割り算

□□：うちの娘に質問されたんだけど…。君、覚えている？分数による割り算？

○○：「6 割る 3 分の 2」とか…。

□□：うん、その「3 分の 2」なんだけど、いきなり割ることができないから、分子と分母を取り替えて、6 に 2 分の 3 を掛けるよね。

$$6 \div \frac{2}{3} = 6 \times \frac{3}{2} = 9$$

○○：うん。

□□：娘は、なぜ分子と分母を取り替えて掛け算をするのか、知りたいて言うんだ。

$$\frac{2}{3} \times \frac{3}{2}$$

○○：それって、僕もよくわからなかったの、小学校のとき先生に質問したことを覚えているよ。説明を聞いても結局よくわからなかったけど…。

□□：僕はなぜなのか、なんて考えたことがないから、とにかく分子と分母を取り替える、という手続きだけを覚えた。それで今、質問されて困ってるんだ。

○○：理由などを説明するときは、日常生活の中で起きることを例にして理解してもらおうといいんじゃないかな。

□□：日常生活で分数での割り算をするときってあるかなあ？

○○：ある、ある。たとえば夏休みの課題プリントが 6 枚あるとしよう。全部仕上げるのに 1 日 1 枚ずつやれば 6 日で終わる

よね。でもたとえば君の娘さんは1日1枚という量はできない、と判断して、3分の2枚ずつ仕上げる計画を立てたとする。そうすると何日で終わるか、こんなこと考えるときがあるんじゃないかな。そのとき、「6割る3分の2」という計算をしなくちゃならない。

□□：だいたいきっちり3分の2ページで切れる段落なんかないし…。

○○：うん、ここではきっちり3分の2というわけではなくて、だいたいの目安なんだけど。

□□：僕だったらそんな計算しないで、3分の2ページごとに印をつけていって、そのあと印の数を数えるけどね。



○○：もし夏休みの宿題が120ページだったら？

□□：…。そうだなあ。やっぱり計算しなければわからないのかな。

2つのステップ

○○：この問題はすこしややこしいところがあるんだけど、図でイメージしてもらおうといいと思う。ここにプリントが6枚ある。



□□：イメージがあると具体的になるね。

○○：うん、そして、君の娘さんは1日あたり3分の2ずつ仕上げる計画を立てる。



- ：あれ、この図、3分の1ずつになっているよ。
- ：うん、そこがポイントだ。小学生にとって分数が理解しにくいのは分母があることではなくて、分子が複数になっていることだと思うんだ。
- ：分子が単数だと簡単に理解できるのかい。たとえば3分の1だとか。
- ：うん、うちの息子がそんなことを言っていた。たとえば6枚の宿題を1日に3分の1ずつやれば何日で終わるか…。
- ： $6 \times 3 = 18$ だから18日…。なるほど、簡単だ。
- ：だったら今度は「1日あたり3分の1」ではなく、リスケジュールをしてその2倍の「1日あたり3分の2」ということにすると何日かかるかな？
- ：リスケジュールによって1日2倍の分量をやれば、全体で半分の日数になるから $18 \div 2 = 9$ で、9日になる。あっ！さっきの式の答えと同じだ。なんだかだまされたみたいだなあ。一気に割り算をしないで、2ステップにしたんだね。
- ：そう、その2ステップという認識、とても大事だとおもう。
- ：最初のステップで分子が1の分数をユニットにして、そのユニットの数を求める。その結果を、次のステップで、そうしたユニットが毎回複数やるとして、全体の回数を求めるんだね。

〇〇：うん。その最初のステップではユニットが分子が1の分数なので、全体の量×ユニットの分母になる。夏休みの宿題の例でいえば、

$$6 \div \frac{1}{3} = 6 \times 3 = 18$$

□□：これなら、僕の直感でもわかる。つまり、全体の枚数を3分の1枚ずつに分けるということは全体の枚数を3倍する、ということだ。

〇〇：そして、次のステップだ。ここでは毎回2ユニットやる、というのだから、

$$18 \times \frac{1}{2} = 9$$

□□：これは、毎日1ユニットではなく2ユニットやるのだから、全体にかかる日数は2分の1に短縮される、ということだね。

〇〇：つまり「6割る3分の2」ということは、全部で6枚のものを最初に3分の1ずつに分けて、その分けた結果を、今度は2倍のペースにしたから2で割る、ということをしたんだ。だから、さっきの式は次のように書き換えられる。

$$6 \div \frac{2}{3} = 6 \div \left(\frac{1}{3} \times 2 \right) = 6 \times (3 \div 2) = 6 \times \frac{3}{2} = 9$$

□□：なるほど、たしかにこう考えると、分数による割り算は分子と分母が取り替えられることがわかる。なぜ、一気に理解できなかったのかもわかった。だいたい2ステップだったらわかるのに、それを飛び越して一気に分子と分母をひっくり返したからだ。

〇〇：算数の現場では、問題を解くのに2ステップなんかやっている時間がないから、分子と分母をひっくり返すという手順だけで練習をしているわけだ。

- ：世の中には理屈ぬきで手順だけになっていることが多いよね。
- ：うん、あんまり理屈なんか考えていると、時間が足りなくなるし、そもそも理屈よりも結果のほうが重視されているし…。
- ：たしかに分数による割り算を理解することに時間がかかったなあ。この僕らの会話もプリント4枚分になっているよ。
- ：だから、原理を理論的に理解するよりも、正しい結果を実践的に出すことが求められているんじゃないかな。僕は理論的理解力と現実的实践力のどちらも必要だと思うんだけど。

「超・理論」

- ：理論なんか飛び越えてしまう「超・理論」的理解…、僕はこのタイプだ。理論より実践だ。それって外国語教育・学習の世界でもいろいろあるよね。
- ：いっぱいある。そもそも理論なんかなくても、覚えやすい簡単な記憶法を使ったりしている。たとえば、*aun* と *aún*、アクセント記号があったりなかったりするけど…。
- ：これは僕もいつも迷ってしまう。間違えるのが嫌で、使わないようにしている。*hasta* とか *todavía* で言い換えられるから。
- ：僕もどちらの意味のときにアクセント記号をつけるのか、自信がなかったので辞書で調べたら、*aun* = ‘*hasta*’, *aún* = ‘*todavía*’だということがわかった。そこで *hasta* にはアクセント記号がないから‘*hasta*’の意味の *aun* にもアクセント記号をつけない、逆に *todavía* にはアクセント記号があるから‘*todavía*’の意味の *aún* にはアクセント記号をつける、という方法を勝手に作ったんだ。
- ：それ、いいね。使わしてもらおうかな。

- 〇〇：うん。でも、この方法にはぜんぜん言語理論とか言語史の裏付けがないよ。単なる表面的な記憶法だから。
- ：そういう方法も便利だったら使うべきだよ。数学のルート2だとかルート3だとか、語呂合わせで覚えたよね。歴史の年代も…。
- 〇〇：たしかに便利なんだけど、そうした語呂合わせ記憶法は、そのことだけに通じるから応用がきかない…。
- ：スペイン語の **TÚ** の命令形＝直説法現在の **ÉL** の形、という方法はどう？よく考えてみると、イコールで結ぶ必然性がないけれど、たまたま同じ形だからその方法を使っている。そのような理解でもいいんじゃないかな。
- 〇〇：歴史的に見れば、ラテン語の直説法現在の **ÉL** の形には語尾に **t** があって命令形と区別されていたんだけど、スペイン語になってから語末の **t** がなくなった。でも、そんなことはどうでもいい、という人が多いみたいだ。現代スペイン語で2つの形が結果的に同じだから **habla, come, vive** という形を使えば **OK** ということだね。
- ：それで思い出したけど、接続法現在はどうなの？あれって、**AR** 動詞の接続法現在が **ER** 動詞の直説法現在に似ていて、**ER** 動詞と **IR** 動詞の接続法現在が **AR** 動詞の直説法現在に似ている。まるで取りかえっこをしたみたいだ。

直説法現在形

<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す
<input type="checkbox"/> habl-o	<input type="checkbox"/> habl-a-mos
<input type="checkbox"/> habl-a-s	<input type="checkbox"/> habl-á-is
<input type="checkbox"/> habl-a	<input type="checkbox"/> habl-a-n

<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる
<input type="checkbox"/> com-o	<input type="checkbox"/> com-e-mos
<input type="checkbox"/> com-e-s	<input type="checkbox"/> com-é-is
<input type="checkbox"/> com-e	<input type="checkbox"/> com-e-n

<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む
<input type="checkbox"/> viv-o	<input type="checkbox"/> viv-i-mos
<input type="checkbox"/> viv-e-s	<input type="checkbox"/> viv-i-s
<input type="checkbox"/> viv-e	<input type="checkbox"/> viv-e-n

接続法現在形

<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す
<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-mos
<input type="checkbox"/> habl-e-s	<input type="checkbox"/> habl-é-is
<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-n

<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる
<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-mos
<input type="checkbox"/> com-a-s	<input type="checkbox"/> com-á-is
<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-n

<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む
<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-mos
<input type="checkbox"/> viv-a-s	<input type="checkbox"/> viv-á-is
<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-n



- : そのような教え方や覚え方をしている人が多いんじゃないな。それって、とても便利なやり方だと思う。
- : 便利だけれど、考えてみると変だよな。変化形を交換する、なんて他の言語で聞いたことがないし…。

ラテン語の歴史

- : 確かに交換したわけではないようだ。ラテン語史の解説書によると接続法の印は基本的に a という母音だったそう。ところが、a を接続法現在の印としてラテン語の ARE 動詞、つまりスペイン語の AR 動詞につけると直説法現在と区別がつかなくなるので別の形 e を使っていた、ということだ。
- : なるほど、簡単に取りかえっこをするのは分数による割り算で分子と分母を取りかえっこするのと似ているね。
- : そう、理論とか歴史とかあまり気にしないで、計算の手続きとその結果だけを重視する方法だ。

- ：でも、言語史の知見を生かすと、AR 動詞の直説法現在には e をつける、ER 動詞と IR 動詞のそれには a をつける、ということで、互いに取り替えたわけではないんだね。
- ：このような言語的知識は歴史的な裏付けがあるから、方法を覚えるのに丸暗記にならない、というメリットがあると思うんだけどどうかな。
- ：接続法の印は基本的に a という母音だけれど AR 動詞だと直説法現在と区別がつかないので、別の形 e を使う、ということだね。
- ：そう。そのような方法ならば覚えやすい。
- ：でも、「取りかえっこ」方式だってあつという間に覚えられるよ。
- ：でも、その方式は表面的な偶然によるものだから、応用がきかない。つまり、スペイン語の接続法現在だけに適応できる方法だ。ちょうど *aun* = ‘*hasta*’, *aún* = ‘*todavía*’ と同じだ。この方式、つまりアクセント記号の有無が同じ意味の他の単語のアクセント記号の有無と一致する、なんて規則はないし…。
- ：でも、AR 動詞の接続法現在の印が e で、ER/IR 動詞の印が a というのも、ここだけの方法じゃないの？
- ：e とか a とかいう具体的な印の形は、ここだけなんだけれど、「取りかえっこ」をするか、AR 動詞の e が直説法現在との「同音衝突」によるのか、という違いを考えてみよう。言語の変化の中で「取りかえっこ」というのはふつうしないけれど、「同音衝突」の問題はよくあることだ。
- ：たとえば？
- ：たとえば、日本語の普通名詞と姓名が同じときは、アクセントのパターンが異なってくる。「橋を渡る」というときと「橋さんに会う」というときの「橋」はそれぞれアクセントが違うよね。
- ：「同音衝突」を回避しているんだね。

〇〇：うん。言語の機能として、意味が違うのにまったく同じ形式だと不便だから、自然に形を変えることがよくあるんだ。

接続法過去形

□□：同じようなケースだと思うんだけど、接続法過去形…。あれも直説法点過去 ELLOS の ron をとって ra をつけるよね。このやり方も「超・理論」なのかな。

〇〇：うん、あの方法はとくに不規則変化で有効だよね。

□ 不定詞: poner→点過去 ELLOS: pusieron→接続法過去 YO: pusiera

□ 不定詞: pedir→点過去 ELLOS: pidieron→接続法過去 YO: pidiera

とか…。

□□：でも、なぜ点過去の ELLOS の活用形を使うのかな。点過去の YO の活用形じゃだめなのかな。接続法過去の語尾は ara / iera だから、たとえば poner の点過去 YO: puse を使ってもいいんじゃないかな。e をとって iera をつける…。

〇〇：うん、poner の場合ならそれでも OK だけれど pedir の場合だと点過去 YO は pedí なので、そこからは pidiera は出せないからだめだ。

□□：なるほど…。それなら点過去の ÉL の活用形ではどう？僕はなぜわざわざ複数形の ELLOS にするのか、気になるんだけど。

〇〇：たしかに、点過去の ÉL の活用形で OK ならばそれでもいいんだけど、問題は点過去の強変化で j が出てくるタイプだ。たとえば, decir - 点過去 YO: dije. この動詞は ELLOS の活用形で dijeron となる。これが接続法過去の dijera と同じだ。もし、点過去の ÉL の活用形を使って iera を繋げると, dijo - dijiera となってしまう。

- ：ああ、そうだったのか。それで伝統的なスペイン語教育では、ずっと点過去の **ELLOS** を使ってきたんだね。
- ：そのように教えている先生がいるし、とくにそのような規則を立てないで、いろいろな動詞を使って実際の文の中で実践的に練習している先生もいると思う。

2つの「理由」

- ：僕はどちらかという理論よりも実践を重視するから、あまり細かな方法など言わない…。そもそも、接続法過去がなぜ点過去の **ELLOS** と同じ語根になるのか、その理由を説明できないし…。
- ：そう、ふつう理由については授業で説明しない。点過去の **ELLOS** から接続法過去を作る手続きについて教えることはあるけど…。それから、一口に「理由」といっても実は「理由」には2つの種類があると思う。1つは記述的な説明、つまりさっき見たように、点過去の **ELLOS** を使う「理由-1」は、それを使うとすべての接続法過去が例外なく導き出せる、ということ…。
- ：それって分数による割り算みたいだね。すべて分子と分母を取り替えてから掛け算をすればできる…、という手続きと同じだ。
- ：そう、それと同じ…。それから別の種類の「理由-2」なんだけど、君がさっき言った、そもそもなぜ点過去の **ELLOS** が接続法過去と同じになるのか、その理由を問題にするときだ。
- ：僕は言語研究者ではないので、その「理由-2」がぜんぜんわからない…。「理由-1」は君の説明でわかったけど…。
- ：「理由-2」は動詞の形態論と音韻論に関係するんだ。実は接続法過去(*ara, iera* という **RA** 形)はラテン語の直説法過去完了形の形態に由来するんだ。

- :なるほど、小説や新聞を読んでいると *llegara* が *había llegado* の意味で使われていることがあるけど、それは古い用法が残っていたんだね。
- :そう、その用法はとくにラテンアメリカに多い。このことは古い用法が中心から遠い地域で残る、という言語地理学の法則に合うんだ。
- :それで…、接続法過去がラテン語の過去完了形からできたことが、スペイン語の点過去と同じ語根になることと、どんな関係があるの。
- :うん、実はスペイン語の点過去はラテン語の完了形に由来する…。
- :えっ？ラテン語には点過去形がなかったの？
- :なかった。単なる過去形はあったけどね。ラテン語の過去形はスペイン語の線過去形になったんだ。
- :ラテン語には *he hablado* のような現在完了形はなかったの？
- :原則的には完了形で示せたから、なかった。*he hablado* のような現在完了形は後からできた形だ。つまり、こんな図式になる。
- ラテン語：完了形→スペイン語：直説法点過去
- ラテン語：過去完了形→スペイン語：接続法過去



Roma



Madrid

- ：なるほど、だから直説法点過去と接続法過去はどちらもラテン語の完了時制に由来するんだね。ラテン語は僕も君と一緒に勉強したからわかるけど、完了形と過去完了形は同じ語根を使うから、それで共通するんだね。
- ：そう。たとえば AMARE の完了形は AMAVI で、過去完了は AMAVERAM で語根の部分が共通だ。過去完了の語尾 ERAM は、実は動詞 ESSE、つまりスペイン語の ser の過去形だったんだ。だから、ラテン語の過去完了の語尾 eram とスペイン語の YO era が 2000 年の歴史を通じて結びつく…。
- ：へえ～。なぜ、ラテン語の過去完了は完了語根 + ESSE の過去を使ったんだろう。
- ：うん、つまり、完了語根が「…してしまっ」を意味して、ESSE の過去が「いた」を示すから…
- ：「…してしまっ」プラス「いた」イコール「…してしまっていた」！
- ：そう、でもこの図式はラテン語では通用するんだけど、それがスペイン語では接続法過去になってしまったから、意味的な問題というより形式的な問題になった。つまり、点過去の形式が接続法過去の形式と共通する部分がある、ということだ。
- ：でも、まだわからないのは、それならば、なぜ現代スペイン語で接続法過去の形式を導くとき点過去の ELLOS だけが出発点になるんだろう。ラテン語の完了形に由来するんだったら YO の活用形でもよかったはずだ。
- ：基本的にはそうだったんだけど、今度は中世スペイン語内の音韻変化が関係してくるんだ。さっき見たように、pedir などの語根母音変化動詞は早い時期から語根の母音が変化していたんだ。その変化には、語尾の単母音 i の条件が関係するので、ÉL または ELLOS に限られるようになる。つまり、pedí, pediste, pedimos, pedisteis には語尾に単母音 i があるから、

異化作用によって語根母音が e となった。一方、pidiό, pidieron では語尾が二重母音だから、そのような異化作用が働かないので、語根は i になった。

- ：君が言う「語尾 i の規則」だね。
- ：うん。そして decir などの点過去にある j は中世では[シエ]と発音されていたんだ。だから jieron は[シエロン]と発音されていた。これは jeron [シエロン]とほとんど同じ発音なので結局 j と i は合流してしまった。
- ：そのような合流が起きるのは ELLOS の場合だけ、というわけだ。
- ：うん。これで「理由-2」の証明終わり！
- ：僕はこれまで教師として「理由-1」までの理解で満足していたけれど、言語研究者と話をしていると「理由-2」のレベルまで入っていけておもしろいね。
- ：うん、僕が見るところ、言語教育・学習では3つのレベルがあると思う。(1) 徹底的な実践派で「理由-1」さえ問題にしない人、(2) 中庸派で「理由-1」ぐらいい気にする人、(3) 徹底的な理論派で「理由-2」まで明らかにしたい人…。
- ：僕は(1)と(2)の間をうろうろしている。君は(3)なのかい？
- ：いいや、僕は(1)と(2)と(3)の間をうろうろしているんだ。学習者にはそれぞれ学習スタイルがあるし、教育者にはそれぞれ教育スタイルがある。どれが正しい、どれにすべきだ、という問題ではなくて、一番効果的で、一番好みに合うものを場面に応じて選ぶといいと思う。
- ：効果と好みの両面を考えるんだね。
- ：そう、エフェクトとアフエクトだ。僕の経験や実験やアンケート調査の結果によるとエフェクトとアフエクトは相関関係にあるんだ。一方が大きくなるともう一方も大きくなる。逆も同じだ。

□□：なるほど。そして、教師は少なくとも(1), (2), (3)のレベルについて勉強・準備しておかなければならないね。そうでないと、いつも同じレベルで動きがとれなくなってしまう。

○○：うん。

10.2. 授業

今日の後半の授業では言語教育・学習において「方法」と「理由」を意識することの是非について一緒に考えてみたいと思います。

分数による割り算

外国語に限らず、いろいろな教科で「理由」を考える場合と、それを考えないで手続きだけですませてしまう場合があります。たとえば、小学校で習う分数による割り算の手続きについてはどうでしょうか。次のケースを考えましょう。

$$6 \div \frac{2}{3} = 6 \times \frac{3}{2} = 9$$

ここで、分子と分母を取り替えて6に2分の3を掛けていますが、なぜ分子と分母を取り替えて掛け算をするのでしょうか。

$$\frac{2}{3} \times \frac{3}{2}$$

この理由は次のような例で説明できるでしょう。たとえば夏休みの課題プリントが6枚でたとしましょう。全部仕上げるのに1日1枚ずつやれば6日で終わります。でもたとえばA子さんは1日1枚という量はできない、と判断して、3分の2枚ずつ仕上げる計画を立てたとします。そうすると何日で終わるか、こんなこと考えるときがあります。そのとき「6割る3分の2」という計算をしなくてはなりません。

10 方法と理由を考える

この問題はすこしややこしいところがありますが、図でイメージしましょう。ここにプリントが6枚あります。



そして、A子さんは1日あたり3分の2ずつ仕上げる計画を立てます。



この図では1枚が3分の1ずつに分かれています。小学生にとって分数が理解しにくいのは分母があることではなくて、分子が複数になっていることだと思われます。たとえば6枚の宿題を1日に3分の1ずつやれば何日で終わるか、を考えるときは $6 \times 3 = 18$ だから18日…。これならば簡単です。

次に「1日あたり3分の1」ではなく、リスケジュールをしてその2倍の「1日あたり3分の2」ということにすると何日かかるでしょうか？リスケジュールによって1日2倍の分量をやれば、全体で半分の日数になるから $18 \div 2 = 9$ で、9日になります。これがさっきの式の答えと同じです。

ここでは一気に分数による割り算をしないで、2ステップにしたのです。最初のステップで分子が1の分数をユニットにして、そのユニットの数を求めます。その結果を、次のステップで、そうしたユニットが毎回複数やるとして、全体の回数を求めました。

最初のステップではユニットが分子が1の分数なので、全体の量×ユニットの分母になります。

$$6 \div \frac{1}{3} = 6 \times 3 = 18$$

全体の枚数を3分の1枚ずつに分けるということは全体の枚数を3倍する、ということです。次のステップでは毎回2ユニットやる、というのですから、

$$18 \times \frac{1}{2} = 9$$

これは、毎日1ユニットではなく2ユニットやるのだから、全体にかかる日数は2分の1に短縮される、ということです。つまり「6割る3分の2」ということは、全部で6枚のものを最初に3分の1ずつに分けて、その分けた結果を、今度は2倍のペースにしたから2で割る、ということをしたのです。さっきの式は次のように書き換えられます。

$$6 \div \frac{2}{3} = 6 \div \left(\frac{1}{3} \times 2 \right) = 6 \times (3 \div 2) = 6 \times \frac{3}{2} = 9$$

このように考えると、分数による割り算は分子と分母が取り替えられることがわかります。なぜ、一気に理解できなかったのかもわかりました。2ステップだったらわかるのに、それを飛び越して一気に分子と分母をひっくり返したから理解できなかったのです。

ain と aín

算数の現場では問題を解くのに理論的な理解のために2ステップなんかやっている時間などありません。そこで分子と分母をひっくり返すという手順だけを練習をしているわけです。このように理論を飛び越えて実践的な手続きだけをしていることは外国語教育・学習の世界でもあります。そもそも理論なんかなくても、

覚えやすい簡単な記憶法を使ったりしています。たとえば、**aun** と **aún**、アクセント記号があつたりなかつたりしますが、皆さんはどのようにして覚えていますか？私はどちらの意味のときにアクセント記号をつけるのか、自信がなかったので辞書で調べたら、**aun** = 'hasta', **aún** = 'todavía'だということがわかりました。そこで **hasta** にはアクセント記号がないから 'hasta' の意味の **aun** にもアクセント記号をつけない、逆に **todavía** にはアクセント記号があるから 'todavía' の意味の **aún** にはアクセント記号をつける、という方法を勝手に作りました。この「方法」にはぜんぜん言語理論とか言語史の裏付けがありません。単なる表面的な記憶法です。

TÚ の命令形

スペイン語の **TÚ** の命令形 = 直説法現在の **ÉL** の形、という方法はどうでしょうか？よく考えてみると、イコールで結ぶ必然性がありません、たまたま同じ形だからその方法を使っている。そのような理解でもいいんじゃないでしょうか。

歴史的に見れば、ラテン語の直説法現在の **ÉL** の形には語尾に **t** があって命令形と区別されていたのですが、スペイン語になってから語末の **t** がなくなりました。でも、そんなことはどうでもいい、という人が多いようです。現代スペイン語で2つの形が結果的に同じだから **habla, come, vive** という形を使えば **OK** ということです。

接続法現在形

接続法現在形の作り方はどのように理解しましたか？**AR** 動詞の接続法現在形が **ER** 動詞の直説法現在形に似ていて、**ER** 動詞と **IR** 動詞の接続法現在形が **AR** 動詞の直説法現在形に似ています。まるで取りかえっこをしたみたいですよ。

<p>直説法現在形</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> hablar</td><td><input type="checkbox"/> 話す</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-o</td><td><input type="checkbox"/> habl-a-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-a-s</td><td><input type="checkbox"/> habl-á-is</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-a</td><td><input type="checkbox"/> habl-a-n</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> comer</td><td><input type="checkbox"/> 食べる</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-o</td><td><input type="checkbox"/> com-e-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-e-s</td><td><input type="checkbox"/> com-é-is</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-e</td><td><input type="checkbox"/> com-e-n</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> vivir</td><td><input type="checkbox"/> 生きる、住む</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-o</td><td><input type="checkbox"/> viv-i-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-e-s</td><td><input type="checkbox"/> viv-i-s</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-e</td><td><input type="checkbox"/> viv-e-n</td></tr> </table>	<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す	<input type="checkbox"/> habl-o	<input type="checkbox"/> habl-a-mos	<input type="checkbox"/> habl-a-s	<input type="checkbox"/> habl-á-is	<input type="checkbox"/> habl-a	<input type="checkbox"/> habl-a-n	<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる	<input type="checkbox"/> com-o	<input type="checkbox"/> com-e-mos	<input type="checkbox"/> com-e-s	<input type="checkbox"/> com-é-is	<input type="checkbox"/> com-e	<input type="checkbox"/> com-e-n	<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む	<input type="checkbox"/> viv-o	<input type="checkbox"/> viv-i-mos	<input type="checkbox"/> viv-e-s	<input type="checkbox"/> viv-i-s	<input type="checkbox"/> viv-e	<input type="checkbox"/> viv-e-n		<p>接続法現在形</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> hablar</td><td><input type="checkbox"/> 話す</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-e</td><td><input type="checkbox"/> habl-e-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-e-s</td><td><input type="checkbox"/> habl-é-is</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> habl-e</td><td><input type="checkbox"/> habl-e-n</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> comer</td><td><input type="checkbox"/> 食べる</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-a</td><td><input type="checkbox"/> com-a-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-a-s</td><td><input type="checkbox"/> com-á-is</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> com-a</td><td><input type="checkbox"/> com-a-n</td></tr> </table> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr><td><input type="checkbox"/> vivir</td><td><input type="checkbox"/> 生きる、住む</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-a</td><td><input type="checkbox"/> viv-a-mos</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-a-s</td><td><input type="checkbox"/> viv-á-is</td></tr> <tr><td><input type="checkbox"/> viv-a</td><td><input type="checkbox"/> viv-a-n</td></tr> </table>	<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す	<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-mos	<input type="checkbox"/> habl-e-s	<input type="checkbox"/> habl-é-is	<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-n	<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる	<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-mos	<input type="checkbox"/> com-a-s	<input type="checkbox"/> com-á-is	<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-n	<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む	<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-mos	<input type="checkbox"/> viv-a-s	<input type="checkbox"/> viv-á-is	<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-n
<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す																																																	
<input type="checkbox"/> habl-o	<input type="checkbox"/> habl-a-mos																																																	
<input type="checkbox"/> habl-a-s	<input type="checkbox"/> habl-á-is																																																	
<input type="checkbox"/> habl-a	<input type="checkbox"/> habl-a-n																																																	
<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる																																																	
<input type="checkbox"/> com-o	<input type="checkbox"/> com-e-mos																																																	
<input type="checkbox"/> com-e-s	<input type="checkbox"/> com-é-is																																																	
<input type="checkbox"/> com-e	<input type="checkbox"/> com-e-n																																																	
<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む																																																	
<input type="checkbox"/> viv-o	<input type="checkbox"/> viv-i-mos																																																	
<input type="checkbox"/> viv-e-s	<input type="checkbox"/> viv-i-s																																																	
<input type="checkbox"/> viv-e	<input type="checkbox"/> viv-e-n																																																	
<input type="checkbox"/> hablar	<input type="checkbox"/> 話す																																																	
<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-mos																																																	
<input type="checkbox"/> habl-e-s	<input type="checkbox"/> habl-é-is																																																	
<input type="checkbox"/> habl-e	<input type="checkbox"/> habl-e-n																																																	
<input type="checkbox"/> comer	<input type="checkbox"/> 食べる																																																	
<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-mos																																																	
<input type="checkbox"/> com-a-s	<input type="checkbox"/> com-á-is																																																	
<input type="checkbox"/> com-a	<input type="checkbox"/> com-a-n																																																	
<input type="checkbox"/> vivir	<input type="checkbox"/> 生きる、住む																																																	
<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-mos																																																	
<input type="checkbox"/> viv-a-s	<input type="checkbox"/> viv-á-is																																																	
<input type="checkbox"/> viv-a	<input type="checkbox"/> viv-a-n																																																	

そのような教え方や覚え方をしている人が多いと思います。そして、それはとても便利なやり方です。しかし、考えてみるとこれは変です。変化形を交換するなんて他の言語で聞いたことはありません。

ラテン語史の解説書によると接続法の印は基本的に a という母音だったそうです。ところが、a を接続法現在の印としてラテン語の ARE 動詞、つまりスペイン語の AR 動詞につけると直説法現在と区別がつかなくなるので別の形 e を使っていた、ということです。つまり 2 ステップの変化です。

活用形を一気に取りかえるのは分数による割り算で分子と分母を取りかえるのと似ています。理論とか歴史とかあまり気にしないで、計算の手続きとその結果だけを重視する方法です。でも、言語史の知見を生かすと、AR 動詞の直説法現在には e をつける、ER 動詞と IR 動詞のそれには a をつける、ということでした。互いに取り替えたわけではないのです。このような言語的知識は歴史的な裏付けがあるから、方法を覚えるのに丸暗記にならない、というメリットがあると思いますが、どうでしょうか。接続法の印は基本的に a という母音だけれど AR 動詞だと直説法現在と区別がつかないので別の形 e を使う、ということです。そのような方法ならば覚えやすいと思います。

接続法過去形

接続法過去形の作り方はどうでしょうか。これは直説法点過去 ELLOS の ron をとって ra をつけます。この方法はとくに不規則変化で有効です。

不定詞: poner→点過去 ELLOS: pusieron→接続法過去 YO: pusiera
 不定詞: pedir→点過去 ELLOS: pidieron→接続法過去 YO: pidiera

ここで、なぜ点過去の ELLOS の活用形を使うのでしょうか。点過去の YO の活用形ではだめでしょうか。接続法過去の語尾は ara / iera だから、たとえば poner の点過去 YO: puse ではどうでしょうか。これは poner の場合ならそれでも OK ですが、pedir の場合だと点過去 YO は pedí なので、そこからは pidiera は出せないからだめなのです。

それなら点過去の ÉL の活用形ではどうでしょうか？なぜわざわざ複数形の ELLOS にするのか、気になります。たしかに、点過去の ÉL の活用形で OK ならばそれでもいいのですが、問題は点過去の強変化で j が出てくるタイプです。たとえば、decir - 点過去 YO: dije. この動詞は ELLOS の活用形で dijeron となります。これが接続法過去の dijera と同じです。もし、点過去の ÉL の活用形を使って iera を繋げると、dijo - dijiera となってしまいます。

これが伝統的なスペイン語教育では、ずっと点過去の ELLOS を使ってきた理由です。そのように教えている先生がいますし、とくにそのような方法を使わないで、いろいろな動詞を使って実際の文の中で実践的に練習している先生もいます。

ふつう理由については授業で説明しませんが、点過去の ELLOS から接続法過去を作る手続きについては教えることはあります。

2つの「理由」

一口に「理由」といっても実は「理由」には2つの種類があります。1つは記述的な説明、つまりさっき見たように、点過去の

ELLOS を使う「理由-1」は、それを使うとすべての接続法過去が例外なく導き出せる、ということです。これは分数による割り算で、すべて分子と分母を取り替えてから掛け算をすればできる…、という手続きと同じです。

それから別の種類の「理由-2」があります。たとえば、そもそもなぜ分数による割り算では分子と分母を取り替えて掛け算するのかという理由や、スペイン語の点過去の ELLOS が接続法過去と同じになる理由です。

スペイン語の点過去の「理由-2」は動詞の形態論と音韻論に関係します。実は接続法過去(ara, iera という RA 形)はラテン語の直説法過去完了形の形態に由来します。小説や新聞を読んでいると llegara が había llegado の意味で使われていることがあります。それは古い用法が残っているためです。この用法はとくにラテンアメリカに多いのですが、このことは古い用法が中心から遠い地域で残る、という言語地理学の法則に合っています。これは上級文法の知識です。

そして、スペイン語の点過去はラテン語の完了形に由来します。つまり、このような図式になります。

ラテン語：完了形→スペイン語：直説法点過去

ラテン語：過去完了形→スペイン語：接続法過去

よって、直説法点過去と接続法過去はどちらもラテン語の完了時制に由来します。そしてラテン語の完了形と過去完了形は同じ語根を使います。たとえば AMARE の完了形は AMAVI で、過去完了は AMAVERAM で語根の部分が共通です。過去完了の語尾 ERAM は、実は動詞 ESSE、つまりスペイン語の ser の過去形だったのです。だから、ラテン語の過去完了の語尾 eram とスペイン語の YO era が 2000 年の歴史を通じて結びつきます。完了語根が「…してしまつて」を意味して、ESSE の過去が「いた」を示

すので、過去完了の意味（「…してしまつて」プラス「いた」イコール「…してしまつていた」）ができたのです。

しかし、この図式はラテン語では通用しますが、それがスペイン語では接続法過去になつてしまつたので、意味的な問題というより形式的な問題になつてしまいました。つまり、点過去の形式が接続法過去の形式と共通する部分がある、ということです。

現代スペイン語で接続法過去の形式を導くとき点過去の ELLOS だけが出発点になつた理由については、今度は中世スペイン語内の音韻変化が関係します。さっき見たように、pedir などの語根母音変化動詞は早い時期から語根の母音が変化していました。その変化には語尾の単母音 i の条件が関係するので、ÉL または ELLOS に限られます。つまり、pedí, pediste, pedimos, pedisteis には語尾に単母音 i があるので、異化作用によつて語根母音が e となりました。一方、pidió, pidieron では語尾が二重母音だから、そのような異化作用が働かないので、語根は i になりました。前の授業で扱つた「語尾 i の規則」を思い出してください。

そして decir などの点過去にある j は中世では[シェ]と発音されてきました。よつて jieron は[シェロン]と発音されていたのです。これは jeron [シェロン]とほとんど同じ発音なので結局 j と i は合流してしまいました。この合流が点過去と接続法過去の活用形の中で共通にあつたのが ELLOS の活用形だけだったのです。

このような「理由-1」や「理由-2」を言語教育・学習に応用する可能性については賛否両論があります。皆さんの意見をレポートしてください。授業はこれで終わります。

10.3. レポートから

方法や理由を意識しない

- 数学の計算は、その過程の動作も重要であることが多い、それ自体が目的となるようなケースが多いのに対し、言語は

活用後の形を使うことがより重要なのではないかと思います。だから、その過程における「なぜ」よりも、使いこなせるかの方が関心の対象なのだと思います。

- スペイン語を学ぶ以前に「接続法」のある言語を学んだことがなかったので、接続法はそういうものだ、と思って疑問には感じませんでした。
- 数字で考えると混乱する。図形や絵でイメージして考える方がよっぽどわかる。方法論も理由もなく、形として覚えられるのが心地よい。
- 今まで算数、数学において「なぜ」を考えたことはなかった。
- 文法において、なぜひっくり返すのか？あまり疑問に思ったことはありません。もう、そういうルールだと思ってやりました。それは、たとえば、なぜ「鳥」のことを「とり」と読むのか？という疑問と同じだと思います。しいて言うなら、否定とか、理想、感情など現実ではないから、ひっくり返すのかなと思います。
- 言語の場合、数学と異なり、例外があつたり決まった答えがない、と思うので、「理由」は説明できないと思う。私は、数学は常に決まりにのっとるが、言語は生き物だと思っています。
- 言語学習においては、理論を考えるよりも何度も声を出してすぐ口から出てくる状態にする方が大切なのではないかと私は思った。
- なぜひっくり返すのか、という疑問は思い浮かんだことはなかった。文法のルールにいちいち理由を問うては大変だし、それは研究者などがすることだと思うからだ。

方法や理由を意識する

- 学ぶのに理由は私は必要だと思う。理由づけた方が絶対に覚えやすいし、自分でそのルールを見つけたりするのが楽しいからである。
- ふつう、こういう規則・手順として受け入れてきたことが、どうやってこうなるのか、という理由、背景を見つめることが、理解を深める要素になり、絶対的な習得になると感じるが、やはり難しい。

意識するときと意識しないとき

- 分数のこの考え方はとてもわかりやすいが、いちいち手間がかかって面倒である。しかし、この方法は一回やって説明すれば生徒たちもわかり、疑問もなくなると思う。つまり、最初は理論的に説明し理解させる。そして次からは機械的に最初のやり方にすれば効率がよいと思う。
- 接続法過去について、自分では意識していないが、単語によってワンクッションおくかおかないか分けていると思う。よく使うものは、もうワンクッションおく時間をもったいないと考え、一気に接続法過去にする。ワンクッション置く場合は見慣れない動詞においてのみおいている。
- 点過去の ELLOS の語尾を ra に変えれば接続法過去の形になる、ということとはとくに意識はしていませんが、言われて初めてそうだとすることに気づきました。
- 接続法は何度も繰り返しているうちに覚えました。自然に活用が思い出せるときは使わないが、思い出せなくなったときにわかる分母のようにひっくり返して思い出しています。
- このような議論は、はじめ勉強するさいにはあまり必要ないと思うが、一通り勉強し終えた今、することは私にとって非常に興味深い。

- 初めは接続法過去を3段階で覚えた。今もまだそのやり方で考えている。しかし、真ん中をとばして直接接続法過去形が出てくるようにしたいと思っている。

レポートを読んで

たしかに言語の規則は数学の規則のように完璧に働くことはないが、それでも歴史や社会の動きなどと比べると規則性が強い。原則としてかなり厳密な法則が成り立っている。

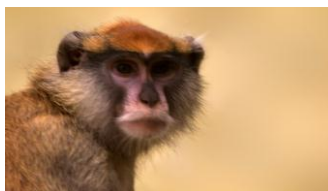
しかし、そうした原則的な法則や個々の規則、そしてその理由などを意識することを直接的に言語教育・学習に適用することはできない。学習者の学習スタイルがそれぞれ異なるからだ。きっと小学生・中学生の算数・数学の学習スタイルもそれぞれ異なっているのだろう。あまり、理論的な理由などを意識するよりも実践的な解決法を求めるタイプと、理由や根拠を意識するタイプがあるようだ。印象的に言えば前者のほうが多いのではないだろうか。

最後に、規則や理由を学習段階に分けて考える意見があったことに注目したい。

11. 仮説を検証する

11.1. 対話

- ：学生から、<3 人称間接目的語代名詞+3 人称直接目的語代名詞>の連続について質問されたんだ。なぜ **le + lo** が **se + lo** になるのかということと、なぜ **se** が複数形にならないのか、ということなんだけど、これらの問題、言語学・言語史ではどのように説明されるの？
- ：僕が学生のころ、**le lo** とか、**le la** とかが言いにくいから、**se lo, sela** に変える、と習った覚えがある。
- ：でも、**lelo, lela** というのは本当にスペイン語でいいにくいのかなあ。1 と 1 が連続することはよくある。**paralelo, paralara** なんて形容詞があるし、**Lola, lelo, lila, filología, ...** とくに問題がないんじゃないかな。チリのスペイン語では、**lolo, lola** 「恋人」はしょっちゅう使うよ。
- ：賛成だ。もしエル (l) が連続してネイティブが言いにくい、とすれば、言語史の過程で何らかの音韻変化があったはずだ。
- ：だけど、そんなことはなくて、形容詞の **lelo, lela** なんかもちゃんと発音されている…。それなら、なぜ代名詞の **le lo** だけ嫌われて、**se lo** になったんだろう。
- ：実は **le lo** → **se lo** という変化は歴史上なかったんだ。そんなふうに言うのは、たとえば人類 (ヒト) が現在のサルから発達した、という説明と同じだ。



- ：動物園で、お母さんが子供に「ほら、おサルさんよ。見て、私たち人間の祖先よ」なんて教えているかも知れない。僕は長いことそう信じていたし…。
- ：うん。僕らは素直だからね。そして、その素直さが、むしろ言語学習をスムーズにすることがあるんだ。手っ取り早く、「レ・ロは言いにくいので、セ・ロに変える」として、それを理由にして覚えてしまえば、あとで会話や作文で間違えなくなる…。
- ：実践的にはそれでもいいと思うんだけど、一方、僕らは大学で研究・教育しているのだから、現在の段階でわかっていることや真実に近いことも教えなくてはいけないんじゃないか、と思う。
- ：僕は、理論と実践のどちらのほうが良い、正しい、ということではなくて、教師はどちらも知っていて、学習者の学習スタイルをよく見て、適宜効果的・魅力的な方法を示すことができればいいと思う。
- ：僕らはスペイン語の歴史を知りたくて、ラテン語と一緒に勉強した。でも僕は文学の研究に進んだので、ラテン語から先のことがよくわからないんだ。

定冠詞

- ：スペイン語の *le* とか *lo* などの 3 人称の人称代名詞は、スペイン語の定冠詞と同じように、ラテン語の指示代名詞から発達したものだよ。
- ：それは僕もうすうす気付いていた。だいたいラテン語の 3 人称の人称代名詞がなかった、というのが変に思ったけど。
- ：人称代名詞は基本的に 1 人称と 2 人称で話し手と聞き手を指していた。3 人称はすべて話題にする内容だったので、「あれ」とか「あの」とかの意味の指示代名詞を使ったんだ。代名詞は格変化するけれど、ここでは対格だけを取り出すよ。

(1) ラテン語の指示詞	男性	女性
単数	illu(m)	illa(m)
複数	illo:s	illa:s

- ：その後の歴史では単数の語末の m は消失したんだね。
 ○○：うん、次が中世スペイン語の初期の状態だ。これを古スペイン語と呼ぶことにしよう。

(2) 古スペイン語の定冠詞	男性	女性
単数	elo	ela
複数	elos	elas

- ：i は e になって、u は o になっているね。古いテキストを見るとこの形は定冠詞として使われているね。
 ○○：そう。実はラテン語には定冠詞がなかったけれど、指示代名詞が名詞にくっついて「あの…」という意味から、だんだんと指示というよりも、相手がすでに知っている内容を指すことになって、定冠詞ができた、と考えられる。
 □□：定冠詞の元の意味が「あの」という指示の意味だったんだね。なんとなく話し言葉の特徴がよく出ているね。その「指示」の意味が弱化して定冠詞になった…。
 ○○：意味の弱化だけでなく、代名詞にあった強勢も弱化して弱勢語になった。
 □□：指示代名詞ならば強勢があった、ということも理解できる。でも、この段階で弱勢になった、と考える根拠は？
 ○○：ラテン語の II が I だけになったのは、強勢がなくなったから、と考えられるからだ。それから、定冠詞が弱勢である、とすると、中世スペイン語で常に名詞や形容詞の前で使われていたことが理解できる。つまり、弱勢語は単独で使うことができなくて、なにか強勢語が支えとして必要だったからだ。それから、もろろん、現代スペイン語では定冠詞は弱勢だか

ら、ラテン語からの発達のどこかの段階で弱勢に変化していたはずだ、と考えられるよね。

□□：なるほど、弱勢であった理由として、1つは音の変化、もう1つは単語の並び方、そして、最後に歴史的な必然性、があげられる、というわけか…。

○○：そして、次が現代スペイン語の定冠詞。

(3) 現代スペイン語の定冠詞	男性	女性
単数	el	la
複数	los	las

□□：なるほど、語頭の e を落としているね。でも el だけは語頭の e を落として lo にしたのではなくて、語末の o を落として el になっている。これはなぜだろう。

○○：そうだよね。もし lo, la, los, las という変化だったら、簡単だったのに…。elo > el の過程では「語末の o の消失」という一般的な音変化があった、と考えられているよ。ela で a が落ちなかったのは、母音 a が口を大きく開けるのでエネルギーがいっぱいあったからだ。elos では o が語末でないから、これも落ちない。それから、確かに elo > lo という変化をした方言形があったんだけど、カスティーリャでは中性の定冠詞 lo と区別するために elo > el となったことも考えられる。

□□：もし全部語末が落ちていたら、定冠詞はすべて el になっていたんだね。

○○：一般に語末は強勢がなくても文法的に重要な役目を果たしていることが多いから、よく保たれているよね。でも例外もある。el agua pura 「純水」とかいうときは、agua の前に男性形のような el がついている。

□□：これもよくわからない。なぜ、agua が女性名詞なのに男性の定冠詞 el がつくんだらう。

〇〇：これは、男性形のような形をしているけれど、実は女性定冠詞だったんだ。この **ela** だ。

(2') 古スペイン語の定冠詞	男性	女性
単数	elo	ela
複数	elos	elas

ela agua から、定冠詞 **ela** の語末の **a** と **agua** の語頭の **a** が融合して **el agua** となった。中世スペイン語では強勢のある **a** だけでなく、一般に母音で始まる女性名詞、たとえば **espada** でも **el espada** とかいう形、よく見るよね。

□□：そう、文学作品にもよく出てくる。なるほど、そうだったのかあ。

〇〇：語末の **a** は脱落はしなかったけど、融合はしていたんだ。

主語人称代名詞

□□：それなら強勢があるときは II は I にならなかったの？

〇〇：そう、強勢があれば II は保たれた。次は現代スペイン語の主語人称代名詞だ。

(4) 現代スペイン語の主語人称代名詞	男性	女性
単数	él	ella
複数	ellos	ellas

主語人称代名詞では強勢が保たれたから、語頭の **e** は落ちなかったし、II も残った。音声は **illu(m)**, **illa(m)** [イツル] [イツラ] から **él**, **ella** [エル] [エリャ] に変わったけれど…。

□□：強く発音されると、元の形がしっかりと残るということだね。つまり、スペイン語の定冠詞と主語人称代名詞は同じ語源から、それぞれ弱勢となったり、強勢が保たれたりして、

今の形ができたわけか…。だから、(3)と(4)の表は似ているんだね。

直接目的語人称代名詞

〇〇：次に直接目的語人称代名詞を見てみよう

(5) 現代スペイン語の直接目的語人称代名詞	男性	女性
単数	lo	la
複数	los	las

□□：これって、定冠詞とよく似ているよね。だいたい定冠詞も直接目的語人称代名詞もどちらも弱勢だし…。

〇〇：そうだ。どちらも弱勢だったので、結果がほとんど同じになった。ただし、男性単数は定冠詞はさっき説明したように、定冠詞は *el* になっているけれどね。

□□：そして、どちらも弱勢だから、強勢語の支えが必要なんだね。定冠詞の場合は名詞とか形容詞がつくし、目的語の場合は動詞がついている。

〇〇：そうだ。1年生は定冠詞はしっかりと名詞につけて書くけれど、目的語人称代名詞は離してしまうことがある。目的語人称代名詞が動詞に関連する弱勢語である、ということをしっかり理解することが大切だ。

□□：定冠詞、主語人称代名詞、直接目的語人称代名詞がぜんぶ1つの起源にさかのぼることにつながるとだね。なんだか、おもしろくなってきたぞ。

(1) ラテン語の指示詞	男性	女性
単数	illu(m)	illa(m)
複数	illo:s	illa:s

間接目的語人称代名詞

それで、肝心の間接目的語人称代名詞はどうなったの？これが質問されたことなんだけど…。

- 〇〇：そう、ここまでが前置きだ。ここで **le lo** が **se lo** になる問題に入ることにしよう。まず、間接目的語の **le** と **les** は、これまでの話の流れから当然だけど、ラテン語の指示代名詞「あれ」の間接目的語形からできた。これには、男性と女性の区別がなかった。

(6) ラテン語の指示詞の間接目的語	男性・女性
単数	illi:
複数	illi:s

- ：なるほど、これらの形から、スペイン語の間接目的語人称代名詞ができたんだね。

(7) スペイン語の間接目的語人称代名詞	男性・女性
単数	le
複数	les

- 〇〇：そうだ。どちらも弱勢だから、語頭の母音が落ちた。そして、語末の母音 **i** も **e** に変化した。でも、ここで思い出してほしいんだけど、ラテン語では指示詞だったよね。だから、強勢があったし、指示詞の置かれる位置は自由だった。

- ：それは現代スペイン語の指示詞 **este**, **ese**, **aquel** と同じことだね。

- 〇〇：うん、その中の **aquel** は、実は <eccu 「(間投詞)ほら！」 + **illu(m)**> からできたので定冠詞とよく似ているよね。

(4) 現代スペイン語の指示詞	男性	女性
単数	<u>aquél</u>	<u>aquella</u>
複数	<u>aquellos</u>	<u>aquellas</u>

- ：なるほど…。eccu「(間投詞)ほら！」はイタリア語でよく使うよ。Ècco la pioggia.「ほら、雨が降ってきたよ」とか…。
- ：イタリア語もスペイン語も同じようにラテン語から発達した言語だからね。

le lo が se lo になった理由

- ：それで、le lo が se lo になった理由は？
- ：ここまできてやっと本題に入ることができるんだ。先に結論を言うと、次のような変化があった。

illi: illum > eliélo > gelo > se lo

つまりラテン語の指示詞が連続して、eliélo という形を作り、それが中性スペイン語で gelo [ジェロ] という形になり、近代スペイン語になって se lo に変化したんだ。

- ：なるほど…。たしかに gelo は中世の文学作品でもよく見る形だ。でも eliélo は見たことがないなあ。
- ：うん、これは文献以前の形だから推定形だ。つまり、illi: illum と gelo の間にこの形があった、と推定されているんだ。ここで、もしそれぞれのラテン語指示詞が独立して発達したら、illi: > le, illum > lo となるはずだ。だけど、2つがくっついて1語のように eliélo となったから、これが gelo の形を生んだと考える理由があるんだ。そうでないと、gelo という形が説明できなくなる。
- ：eliélo には強勢があったんだね。
- ：はじめはね。そこで、lie が[リエ]という硬口蓋音になったところに、人称代名詞となって弱勢になった。弱勢なので、語

頭の e が落ちて、さらに lie [リエ] > ge [ジェ] > [シエ] という変化があった。これは、たとえば mulier > muger となったのと同じ音変化だ。

- ：それが近代になって、mujer [ムヘル] となったんだね。だとしたら、gelo も [シエロ] から jelo [ヘロ] になってもよかったんじゃないの？
- ：うん、たしかにその可能性はあったと思う。でも、[シエ] と [セ] はよく似ている音だったこと、そして再帰代名詞 se が同じような場所で使われていたことから、最後は再帰代名詞 se に融合してしまったんだ。これがほとんど定説になっている説明だけど、僕はさらにワンポイント加えたいと思っているんだ。
- ：君個人の考えだね。
- ：うん、gelo の ge が再帰代名詞の se と同じように単複同形だったことも影響して、ge > se が起こった、という仮説だ。
- ：これで、le > se になった理由が僕にもわかったよ。もう一つの質問のほうはどうなるの？つまり、les + lo > ses lo とならなかった理由…。
- ：これは、再帰代名詞の se に複数形がなかったから合流した les もそれに従わざるを得なかった、という説明もできるけれど、それだと、なぜ中世スペイン語で illi:s > ges という変化が起きなかったのか、この説明が欠けていることになるよね。
- ：なるほど。現代スペイン語のレベルでの説明だけでは、言語史全体が説明できない、というわけだね。
- ：そう、逆に、原形の説明ができていれば、その結果として現代スペイン語の説明も同時にできてしまう…。
- ：うん、それじゃ、原形の説明はどうなるの？

一語説

〇〇: スペイン語の研究者たちは *gelo* の *ge* に複数形がないのは、単に「類推作用によって単数形が複数にも使用された」と述べているけど、この説明では、そもそもなぜ類推が働いたのかわからない。そして、なぜ直接目的語代名詞には類推作用が働かなかつたのかも説明できない。直接目的語代名詞では単数形(*lo, la*)と複数形(*los, las*)が区別されているし、間接目的語だって単独で使われれば、ちゃんと *le* と *les* という形で単・複が区別されている。「類推作用」で説明するのならば、なぜ、ここでも類推作用が起きなかったのだろうか。そして、なぜ一般の名詞や形容詞でも単数→複数の類推作用が起きなかったのだろうか。つまり、この類推作用がなぜ *gelo, gela, gelos, gelas* だけに限られるのか、ということが解決できていない。

□□: うん…。

〇〇: そこで、さっき見た古スペイン語期の推定形 *eliélo* だけけど、これが1語であった、という仮説を立てて、この仮説からさっきの疑問の解決に挑戦してみよう。

□□: 今日は仮説が多いね。

〇〇: 言語研究では、一応仮説を立てて、その仮説によって説明が可能になるさまざまな現象を見ていく、という方法をとることが多いんだ。それらの説明が納得がいけば、仮説は一応採用される…。

□□: *eliélo* が1語だという仮説、この一語説によって説明できる現象はどんなことがあるの？

〇〇: はじめに、*illi: illum* > *le lo* にならなくて、*eliélo* になったこと、このこと自体が一語説を支持する。このように1語になっていなければ *gelo* にはならなかったはずだ。

□□: うん。もし原形が2語だったら *le lo* になったはずだからね。

〇〇: 次に、文献に現れてくる *gelo* はほとんどの場合 *ge lo* のように離して書かれてなくて、*gelo* のように続けて書かれてい

たんだ。つまり、当時のネイティブの感覚では *gelo* は 1 語だったと思うんだ。次は、中世から近代にかけてのスペイン各地の古文書館にある公文書を分析した結果だ。

#gel[oae]s?# #ge# l[oae]s?#"	12c	13c	14c	15c	16c	17c	Total
<i>gelo</i>	1	62	65	54	9	0	191
<i>gela</i>	0	14	36	48	1	0	99
<i>gelos</i>	0	13	6	15	0	0	34
<i>gelas</i>	0	3	5	12	2	0	22
<i>ge lo</i>	0	2	0	0	1	0	3
<i>ge los</i>	0	2	0	0	0	0	2
<i>geles</i>	0	0	0	2	0	0	2
<i>ge la</i>	0	0	1	0	0	0	1
総語数	9,540	195,352	196,710	225,948	196,174	62,424	886,148

- : なるほど、確かに *ge lo*, *ge los*, *ge la* のように間にスペースがある例は少ないね。でも、間接目的語と直接目的語という 2 つの機能をもっている 1 語だった、というのはちょっとわかりにくいなあ。
- : たとえば、現代スペイン語の *al* と *del* なんだけど、これも 2 語というより、融合して 1 語になっているよね。中世スペイン語では弱勢語が連続すると 1 語になる傾向が強かったから、そのような例がもっとたくさんあった。
- : なるほど、*al* や *del* が 2 語だとすると、どこまでが最初の語でどこからが後の語がわからないし…。
- : それから、*gelo* はいつも一緒に、*le ... lo* とか *lo ... le* とかいう文は見つからないんだ。現代スペイン語でも次のように *se lo* が一緒なら OK だけれど、それらを分けると NG になる。

□ OK. Se lo voy a decirlo.

- OK. Voy a decírselo.
- NG. Le voy a decirlo.
- NG. Lo voy a decirle.

□□ : le と lo が一緒に使われるときは、それらを離してはいけ
ない、ということだね。だから 1 語だ、というわけか…。

○○ : そう。そして、もちろん、loge, lage という形も見つから
ない。もし、ge と lo がそれぞれ独立していたなら、順番が交
替していてもよかつたはずだ。現に、lo le という形は初期の
文献に散見されているけれど、gelo が生まれた段階で消えて
無くなった。ge no lo... というように ge と lo の間に何か他の
要素が入ることもなかった。

□□ : 現代スペイン語では、se lo のように離して書くけれど、や
はり、1 語ということになるね。lo se はないし、Le voy a decirlo
も Se voy a decirlo も言わないし…。

○○ : それから、もう一つ面白い現象があるんだ。ラテンアメリ
カのスペイン語に多いんだけど。たとえば、

- ¿Les dijiste que no venías? -- Ya se los dije.

□□ : これ、メキシコなんかではふつうに言うよ。文法的には、
Ya se lo dije としなくちゃいけないんだけど。

○○ : これは se lo が 1 語だとすれば理解できる現象だ。つまり、
「彼らに」という複数を示すのに、語中の要素(se)に s をつ
けるわけにはいかないから、ラストの lo を複数にした、と考
えられるんだ。

□□ : なるほど、gelo, se lo 一語説にはかなり根拠があることが
わかった。そのことが中世スペイン語で eliéslo も geslo もな
かった、という理由になるね。つまり、ここでも語中の要素
を複数化することができないからね。

○○ : そう、gelo / se lo 一語説が正しいとすればね。

- : いずれにしても *le lo* > *se lo* がエルの連続で口調が悪いから、
 というのは、説明になっていない、ということだ。
- : *se lo* の元の形が現在の *le lo* にさかのぼることがないのは、
 人類祖先が現在のサルにさかのぼることがないのと同じこと
 だよ。

11.2. 授業

今日の授業ではスペイン語 1 年生の質問を取りあげたいと思います。私たちの大学のウェブの「質問箱」に次の質問がありました。

なぜ、間接目的語の *le, les* が 3 人称の直接目的語の人称代名詞と共に使われるとき、*se* となるのですか？

これは文法的な理由からではなく、中世スペイン語で

illi: + illu(m) > gelo [ジェロ] > [シエロ] > *se lo*

という音変化があったためです。その結果、後で習う再帰代名詞の *se* と同じ形になりました。

...

以上が数年前にあった同じ質問に私がお答えした簡単な歴史的記述です。そこでは歴史的変化の事実だけを述べました。その後、中世スペイン語の大規模な資料を使うことができるようになりましたので、この機会にその調査結果と私なりの解釈を述べたいと思います。

ラテン語では常に間接目的語代名詞(単数 *illi:*; 複数 *illi:s*) + 直接目的語代名詞(*illum, illam, illud; illo:s, illa:s, illa*)の順番で繋がっていました。たとえば、*illi: illum* という順番です(ラテン語の代名詞は強勢があったと推定されます)。

それが、スペイン語の時代になると (e)lielo, (e)liela, (e)lielos, (e)lielas のように、語頭の母音が脱落し、かつ最初の音節が 2 重母音になりました。これらがさらに発達して、12 世紀以降の多くの文献で *gelo, gelos, gela, gelas* という形になって出現しています。発音は[ジェロ], [ジェラ], [ジェロス], [ジェラス]だったと想定されます。その音が無声化して[シェロ]となり、16 世紀からは *se lo* と書かれるようになって[セロ]と発音されるようになりました。

geslo がない

さて、ここから質問にお答えする段階に入ります。ラテン語や初期スペイン語の間接目的語代名詞はちゃんと単数形と複数形が区別されていたのに、なぜ 12 世紀以降では *gelo, gelos, gela, gelas* のように常に *ge* という 1 つの形になってしまったのでしょうか。なぜこの段階で *ges* という複数形ができなかったのでしょうか。資料をくまなくサーチしても *geslo* のような形は見つかりません。

スペイン語の研究者たちは単に「類推作用によって単数形が複数にも使用された」と述べています。しかしこの説明では、そもそもなぜ類推が働いたのかわかりません。そして、なぜ直接目的語代名詞には類推作用が働かなかったのかも説明できないのです。直接目的語代名詞では単数形(*lo, la*)と複数形(*los, las*)が区別されています。そして、間接目的語で単独で使われれば、ちゃんと *le* と *les* という形で単・複が区別されています。「類推作用」で説明するのならば、なぜ、ここでも類推作用が起きなかったのでしょうか。さらに、なぜ一般の名詞や形容詞でも単数→複数の類推作用が起きなかったのでしょうか。つまり、この類推作用がなぜ *se lo (los, la, las)* だけに限られるのか、疑問はこの点に集中します。

se lo は 1 語

私は *gelo, gelos, gela, gelas* という 12 世紀以降の中世の文献に頻繁に出てくる形に注目したいと思います。これらはあたかも 1 語のように扱われています。書かれた形をみると *ge lo* のように 2 語に分けないで、確かに *gelo* のように連続しています。しかし中世では 2 語が連続して書かれることもあるので、書かれた形だけでは「1 語である」という強い証拠にはならないかもしれません。そこで、もう 1 つ、二重母音化をとり挙げましょう。ラテン語 *illi* は単独では *lie* に変化していません。ラテン語の *illi:* は単独では *illi:* > *ille* > *le* となったからです。 *lie* となったのは次に直接目的語がついた場合です。

さて、*gelo* が 1 語である、と仮定するならば、それを複数形にするのは語尾だけが可能です。語中の要素を複数形にする、という文法ルールはスペイン語にはありませんから。そのために *ges* という複数形が生まれなかったのだと思います。

この説明は、まだ仮説に過ぎないので、さらに検証が必要です。傍証として、ちょっと弱いかもしれませんが、現代スペイン語でも *se lo* がネイティブの意識の中で 1 語のように存在している、と考えられる事実があります。たとえば、

- ¿Les dijiste que no venías? -- Sí, ya se los dije.
- 彼らに君が来ないということを使ったの? —うん、もう彼らにはそれを言ったよ。

というようなケース(*lo* > *los*)にしばしば出会うのです。これは大学などで習う文法規則には違反しているのですが(小テストでこのような文を書くと減点されます)、ネイティブの話すスペイン語でよく聞きます。ここで間接目的語の「複数」を示すマーカーが *lo* の後ろについていることに注目したいと思います。つまり、*se lo* が 1 語としてセットになっているので、それを複数化するにはこのセットの語尾に *s* をつけることになった、と考えられます。

ge lo > se lo という変化

説明がかなり長くなりましたが、最後に ge が se になった理由もここで挙げておきましょう。ge は近代になると[シェ]と発音されるようになり、この発音が se [セ]と似ていたため、そして、ge が再帰代名詞の se と文中の同じ場所で使われたために、その影響で再帰代名詞と混同して合流した、という説明がスペイン語研究者によってなされています。たとえば *Se lo hizo* ならば、「彼は彼（他の人～にそれをした）」という意味（Se は間接目的語の代名詞）と、「彼は自分でそれをした」「彼は自分のためにそれをした」という意味（Se は再帰代名詞）があります。

このように、gelo は近代スペイン語の時代になって se lo という形に変化しましたが、この変化の理由として、上であげた音韻的な類似性と構文的な類似性の他に、再帰代名詞の se が単一形態なので *ses lo* という形式がないことを加えたいと思います。これは ge には ges という複数形がなかったことと似ています。つまり、語形変化の形態的な類似性です。

なお、再帰代名詞 se が単複同形である理由は、その働きが「再帰」であるからです。つまり、普通の代名詞のように単数形や複数形によって区別される外界のものを指すのではなく、唯一「主語と同じものを指す」という機能に限られているので、単複形を区別する必要がないのです（単複の区別は動詞や主語によるものです）。再帰代名詞は古くさかのぼって推定される印欧語の時代から単複同形でした。

大学で習うスペイン語は、きちんと整理された規範的な文法に従っています。一方、現実のスペイン語では通時的にも共時的にもダイナミックな活動が観察されます。se lo のように2語をしっかりと分けて書く、というのは規範的なルールに従うものです。しかし、歴史的に常にそうであったわけではないこと、そして、現代のスペイン語の動きの中には、必ずしも規範に従うことがない、自然なスペイン語の姿が見られることをお話しました。

質問

スペイン語には **cualquier** という語形がありますが、これの複数形は **cualesquier** となります。このように語中でも複数にすることは可能ではないでしょうか。

たしかに、**cualquier(a)**, **quienquiera** の複数形は **cualesquier(a)**, **quienesquiera** です。これらの語形は完全な 1 語というよりも、関係詞 **cual**, **quien** + **querer** の接続法という構成になっています。そこで、その関係詞の部分を複数にします。動詞の **quiera** の部分を複数にするわけにいかないのです。これが正用法ですが、しばしば、やはり語中の要素の複数化を嫌って **<cualquier+複数名詞>** という形に出会います。**cualquier** は無変化になりつつあるようです。ちょうど **cada**, **más**, **menos** のように。

11.3. レポートから

- **Le lo enseño** にすると言いつらいから **se** に変わると教えられたけど、**se** にはいろんな用法があるので難しい。
- 自分は当時、再帰の **se** と近いものとして解釈していた。再帰の **se** も代名詞・指示詞的要素が強いものと思っていた。
- 一年生のときは確かに **se** でわからなくなった。性数をしっかり区別するスペイン語なのに、**le** も **les** も **se** になるのは不思議だと思う。
- **le lo** だと **l** が続いて読みにくいからでないか。単複を区別しないのは再帰代名詞でも区別しないからではないか。
- **ses** にすると、前も後ろも **s** にはさまれていて **s** がしつこいからかと思いました。
- **se lo** はセットにしないとイケないのではないか。離してしまうと聞き手が混乱してしまいそう。

- se が複数にならないのは、前の文章でもう複数であるとかかっているから変わる必要がないのだと思う。
- le でも les でも se になるのは確かにおかしいと感じる。定冠詞ならば los として変わるのに、代名詞では変わらない。ただ混乱を避けるために se になったと考えていた。
- le や les と lo や los が続くと似たような語が並んでしまうため、se lo, se los となったのはそれを避けるためにではないだろうか。
- 1年のときはなぜかわからずに se にするのに苦労した覚えがあります。きちんとした理由があるとは知りませんでした。gelo が1つの単語だったとするなら、間に s を入れることができないので、se > ses にならないと納得できました。南米で se lo になることや、Le (Se) voy a decirlo. とならないことから gelo / se lo が1つの単語だったのではないかと、ということがよくわかりました。
- se lo の2つがセットと考えると説明できる文法要素がたくさんあるな、と思いました。
- 「単語のまんなかにも複数の s を加えることができない」から seslo いはならない、では簡単すぎると思う。では、なんで加えることができないのか？と疑問が続いた。
- 今日の内容は言語学を学んでいる人が学ぶことはとても意味があるが、スペイン語の文法を学ぶ人にとっては、混乱するので必要ないと思う。

レポートを読んで

文法を学んでいる過程で不思議だと思えることがいろいろある。それについては、あまり深く考えないで、とにかく規則としてわりきって習得してしまうタイプの人と、理由までつきつめて考えるタイプの人がある。そして、どちらのタイプの人でも、自分の頭の中で合理化して納得する方法を探していることがある。

「le lo は言いにくいから se lo にする」という説明も、本当は「le lo は言いにくいから se lo にする、として覚えましょう」という便宜的な教え方がされているのかもしれない。学習者は、この説明を言語史や言語学で確かめられた知見・真実である、と誤解しているのかもしれない。それでも、結果がうまく出ていればそれ以上の追究はしない。

これは言語を学ぶ目的と教える理由にかかわる問題だ。実践的な力をつけるだけならば、とくに言語史や言語学の背景を知らなくてもかまわないだろう。一方、言語を歴史的・文化的・言語学的に考察することに意義を見いだすときは、別の提示の仕方も考えなくてはならない。



その提示の中には、一定のリスクをともなう「仮説」までも含まれるはずだ。言語研究の場では多くの甲論乙駁の議論がある。一定の仮説が多くの検証に耐えたとき定説に変わる。しかし、それもいつか覆されるかもしれない。提示された説は常に相対的な真実（の一部）だ。それを絶対的な真実だなどと思うとその瞬間で思考と発展を止めてしまうことになる。

12. 自分の実力を知る

12.1. 対話

単語の本

- ：学生からスペイン語の単語の本を推薦してほしい、と言われたんだけど、何かいい本ある？
- ：いろいろ出版されているけれど、その学生が何を目的にしているか、そして、どのような学習スタイルなのか、それによって違ってくると思うよ。
- ：そんなに各種出ているの？
- ：うん。単語だけのもの(1)、例文つきのもの(2)、例文だけでなく絵もついているもの(3)、それから練習問題までついているもの(4)など、各種多様なものが出ている。またアルファベット順(a)、意味による分類(b)、頻度順(c)でも違ってくる。

- (1a) 国沢慶一『スペイン語基礎 1500 語』大学書林
- (1a) 荒井正道・宮城昇『スペイン語常用単語 6000』大学書林
- (1b) 笠井鎮夫・大岩勉『分類スペイン語単語集』大学書林
- (2b) 野間一正・Juan J. Navarro『見る・読む・話すスペイン語 (上下)』芸林書房
- (2c) J. ベナビデス・三村具子・橋本一郎『頻度順スペイン語基礎単語集』芸林書房
- (3b) GIDE 語彙研究班『¡スペ単!』朝日出版社

- ：なるほど、たくさんあるんだね。
- ：うん、最近は教材がいろいろと揃っているからね。

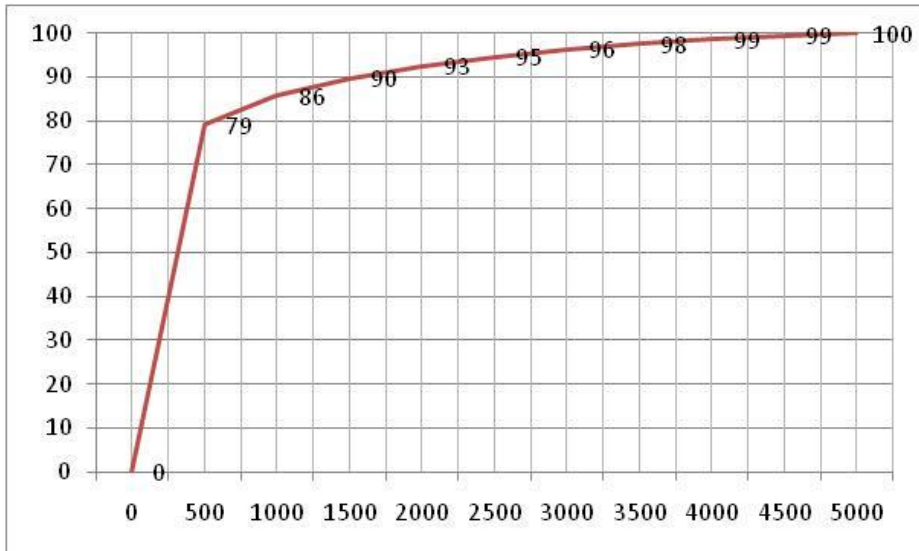
語彙量

- ：語彙はどの位知っているといいのかな。
- ：それも語学学習の目的にもよると思うけれど、日常会話だけならば、語彙数はそれほど多くなくてもいいんじゃないかな。むしろ、よく使われる単語を自然に使えるようにしたほうがいい。
- ：新聞などが読めるようにしたいなら？
- ：新聞の種類によるけれど、かなり語彙数が要求されてくる。そして、小説・随筆・評論などを読むときはさらに語彙が必要だ。2万～3万ぐらいかなあ。



- ：正確な数字が出せないんだね。数量的なことがわかるような研究はないの？
- ：かなり古いけれど、Juilland and Chang-Rodriguez (1964): *Frequency dictionary of Spanish words*. (London, Mouton)が、演劇、小説、随筆、科学、新聞という5のジャンルのサンプルを選んで10万語ずつ全部で50万語になるようにして調査したものがあるよ。次は、頻度の表だけれど、横軸が500語ごとの分類で、縦軸が全体に占めるパーセンテージだ。つまり、最初の500語でおおよそ79%カバーしていることになる。

12 自分の実力を知る

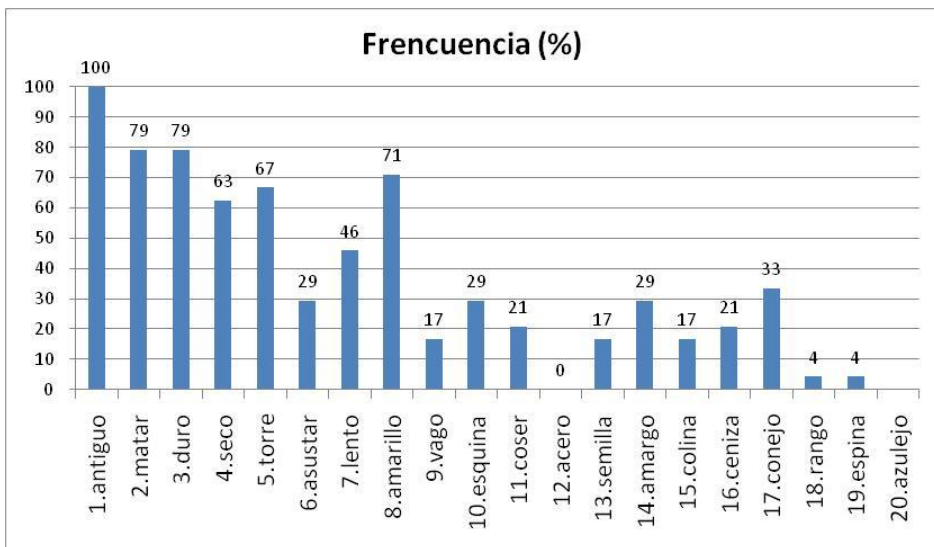


- ：なるほど、最初の 500 語だけでテキストのおよそ 80%は読めるんだ。
- ：実は、この調査の弱点は頻度数が 4 以下の単語を切り落としていることだ。でも大体の目安としてはこれでもいいと思う。
- ：でも逆に言えば最初の 500 語を知っていても、それがテキストの 20%は知らない単語になる、つまり、5 語に 1 語の割合で知らない単語に出くわす、ということになるね。
- ：うん、これでは読解がかなり厳しくなる。大体経験的にはテキストの 95%の単語がわからないと読解ができなそうだ。
- ：ええと、この表で見ると第 2 ランク(1000 語)で 86%、第 3 ランク(1500 語)で 90%、... このカーブなかなか上がっていかないね。
- ：そう、最初の 500 語で一気に 79%まで上がるんだけど、それからが大変だ。カーブの上昇率がだんだん上がらなくなっていく。

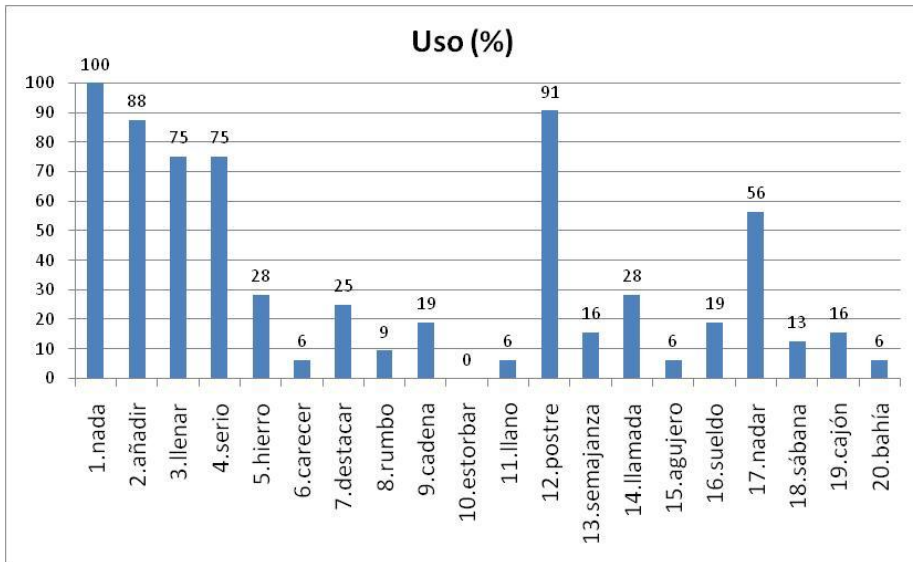
- ：それで、結局第 5 ランク、つまり 2500 語のレベルでやっ
と 95%になるんだね。
- ：このレベルまでいかないと、ほとんど書かれたテキストは
読めない、ということになる。でも、さっき言ったように、
この調査では頻度 4 以下の単語を拾っていないから、実情は
もっと厳しいはずだ。
- ：じゃあ、3000 語レベルかなあ。
- ：4000 語レベルかもしれない。

自分のレベルを知る

- ：そもそも、自分のレベルがわからないんだけど、それを知
るためにはどうしたらいいの？ 思いつく単語を並べてもし
ようがないし、辞書で全部チェックするのは大変だし…。
- ：この調査結果から、トップの 500, 1000, 1500... というふう
に取り出して、その単語を知っているかどうか、でチェック
すれば、一応の目安になる。次は「スペイン語教育法」の授
業中にやった語彙レベル調査の結果だ。



- ：なるほど、トップの antiguo 「古い」 はたしかに 100% の人が知っているね。そして、20 位の azulejo 「タイル」 はゼロだ。そうすると、自分がたとえば、ランク 5 の torre 「塔、タワー」 を知っていれば、 $250 \times 5 = 1250$ だから、1250 語ぐらい知っているということになるのかな。
- ：うん、一応の目安としてはな。でも、だいたい、1500 レベルの語がわからなくて、2000 語レベルの語がわかる、というようなケースも多いし…。同じレベルの単語を複数回使って調べてみるといいと思う。
- ：たしかに頻度は重要だけれど、語彙調査をするときは、頻度だけを問題にするの？
- ：いいや、他にもジャンルごとに広い範囲で使われているか、特定のジャンルだけで使われているか、ということを見る「拡散度」(dispersión) も計算している。これには、統計学で勉強した「標準偏差」という指標が使われている。
- ：そういえば、一般教養の統計でならったなあ。統計では、頻度や平均だけでなく、データのばらつき具合を見ることが重要なので、そのために標準偏差を使う、ということだった。そういうのが、外国語教育法でも応用されているんだね。
- ：うん、正確に言うと、標準偏差の他に平均とジャンル数も考慮して計算するんだけど…。それで、Juillard and Chang-Rodriguez は、頻度と拡散度を掛け合わせた「使用度」Usage という指標を提案した。次が、使用度を使ってのクラス内調査の結果だ。



□□：さっきの頻度を使った結果と比べると、分布がかなり変だね。12. *postre* や 17. *nadar* は学生がよく知っている単語なのに、使用度から見ると低い位置になる。それから、6. *carecer* や 11. *llano* のように、あまりよく知られていない語がかなり広範囲の順位に分布している。

○○：うん、これは頻度だけでなく、拡散度も考慮しているから、このような結果を示しているのだと思う。学生の意見でも、あまりぴんと来ない結果だって言っているよ。

□□：単純に頻度の合計だけでもよかったのかな。

○○：うん、そういう考え方もできると思う。

学習法

□□：自分の単語レベルがわかったら、次はそれを向上させたいものだけど、どんな方法があるのかなあ…。

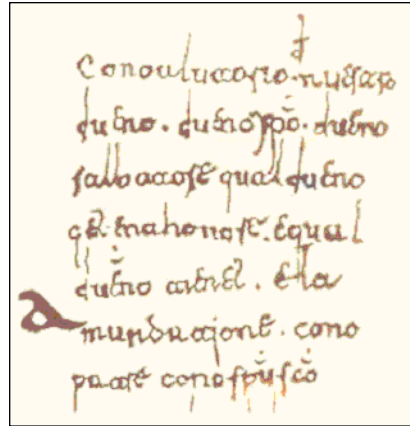
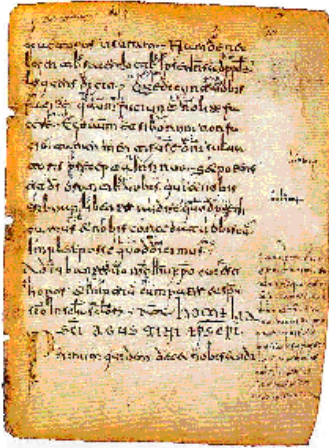
- 〇〇：これはいろいろな学習スタイルがあって、経験者の話や本に書かれていることが参考になる。学生たち自身のレポートを読んでいるといろいろな工夫をしていることがわかるよ。
- ：つまり「学習ストラテジー」だね。
- 〇〇：うん、人から聞いた話だけで、この人は海外ツアーの添乗員をしている人なんだけれど、はじめは家の中にあるもので、外国語で知らない単語があれば、すべて付箋に書いて貼り付けたそうだ。家中が付箋だらけになって、すごかったそうだけれど。
- ：少しずつはがしていく楽しみがあるね。
- 〇〇：他にも、本をマークしたり、欄外に書き込んだり…。
- ：その方法は、中世の修道院でも行われていたよね。たとえば、『サンミリヤンの注解』Glosase Emilianensis。スペイン語の最初の文献…。



【写真1】 サンミリヤン修道院

- 〇〇：そう、ラテン語テキストの欄外に、ちょこちょここと当時のスペイン語で書き込みがある。
- ：これが、僕らにはラテン語よりもむしろスペイン語の歴史を知るためにとても役に立つ。

〇〇：それから、もちろん、さっきあげた市販の参考書を利用している人も多い。



聖ミリャン修道院の注解¹⁶

自分で教材を作る

□□：君はどんな方法を使っているの？

〇〇：僕は、いつも試験勉強のときにやっていたんだけど、自分自身の教科書を作っていたんだ。自分で作った教科書ならば、好きなように作ることができる。単語帳も自分専用のノートを作ったよ。絵とか、例文とか、語源とか入れて。

□□：それって、大変だよ。時間がかからない？

〇〇：確かに時間がかかって、単語帳が出来上がったのが、試験の当日だった、ということが何度もある。試験勉強一般にそうだった。つまり、勉強道具を作っているうちに、準備時間が終わってしまい、せっかく作った勉強道具を使わないうちに、試験に臨む、というわけさ。

□□：がっかりだなあ。

¹⁶ 転載許可：Real Academia de Historia. 2008/2/19

- ：うん、たしかに焦燥感があった。でも試験中に気付いたんだけれど、こうした勉強道具を作っていること自体が試験準備になっていた、ということだ。
- ：それなら、僕にも覚えがある。僕らは教材を作るよね。教材を作りながら、勉強していることが多いんじゃないかな。
- ：僕の勉強はほとんどそれだよ。教えているうちに自分の知識ができてくる。
- ：逆に、いつも教わっているのではちっとも頭に入ってこない…。
- ：これは個人的な経験だけれど、教科書や参考書はいくら読んでも身につかないのは、そこから知識を借りて学ぼう、としているからじゃないかなあ。参考書なんて参考にしかならない。むしろ借り物ではなくて、自分で自分専用の教科書や参考書を作って、逆に人に貸してあげるぐらいにすると、しっかりと身につくと思う。
- ：たしかにそうだ。僕が確かに知っていることは、たいてい自分で調べたり発見したりして、それを論文にしたことだ。どこかで読んだことがある、というような知識は、あやふやで確かなことは何も言えない。
- ：君も同じ考えなんだね。もしかしたら、これって一般性があるのかなあ。授業で学生たちに勧めてみようかな。

12.2. 授業

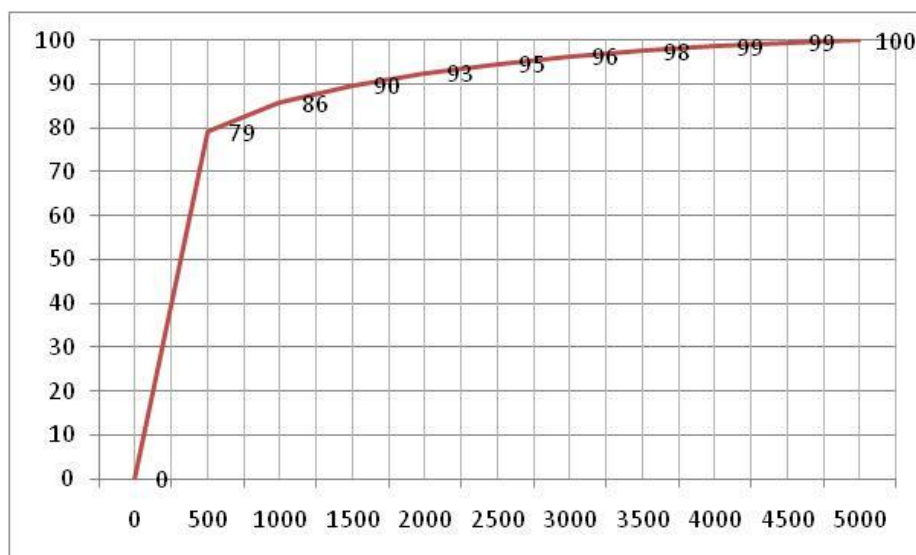
これまでの授業ではいろいろな文法の問題を扱ってきましたが、今日は語彙について考えてみたいと思います。

皆さんは、スペイン語の語彙を増やすためにどのような方法を使っていますか。自分で単語帳を作る人、市販の単語の本を使っている人、新しい単語に出会ったとき、何らかの工夫をして覚えている人、とくに単語だけを意識しないで言葉に触れながら自然

12 自分の実力を知る

に覚えていく人、…、さまざまだと思います。私個人の方法ですが、自分で教材を作ってみる、ということをしています。そうすると、確実に覚えられることが多いので、試してみたいでしょうか。私は与えられたものは参考にする程度で、むしろ自分で好きな形に編集するのが好きです。

語彙の量は多ければ多いほどよい、というのではなくて、一定のレベルを目指すべきだ、という考え方があります。どの位のレベルの単語量が必要なのでしょう。はじめに次のグラフを見てください。



これは、ある語彙調査の結果を示すものです(Juilland and Chang-Rodriguez. 1964: *Frequency dictionary of Spanish words*. London, Mouton)。この調査では演劇、小説、随筆、科学、新聞のサンプルを10万語ずつ全部で50万語になるように選んであります。そして、グラフの線は頻度が高い語から、ランクをつけていって、頻度数が高いもののなかから最初の何語で、全体の語彙量の何パーセントまでカバーするのかを示しています。たとえば第1ランクは最初の500語を示しますが、このグラフによるとおよ

12 自分の実力を知る

そ 80%をカバーしていることになります。つまり、学習の初期に学ぶような重要な単語は、繰り返し使われる可能性があり、それだけでテキストの5分の4を占めていることになります。

単語力というと、自分にどのくらいの語彙数があるのか、気になるところだと思います。辞書や市販の単語帳を使って、チェックしてみると大体の様子がわかります。

しかし、語彙数はふつう 1000 語以上になりますから、この作業をすると大変です。そこで、先にあげた語彙調査の結果を利用して、頻度順に並べた 5000 語を 20 のランクに分け、そのランクにある語だけについてチェックをしてみましょう。それぞれの単語の意味と自由な例文を書いてください。

ランク	レベル	語
1	250	1.antiguo
2	500	2.matar
3	750	3.duro
4	1000	4.seco
5	1250	5.torre
6	1500	6.asustar
7	1750	7.lento
8	2000	8.amarillo
9	2250	9.vago
10	2500	10.esquina
11	2750	11.coser
12	3000	12.acero
13	3250	13.semilla
14	3500	14.amargo
15	3750	15.colina
16	4000	16.ceniza
17	4250	17.conejo

18	4500	18.rango
19	4750	19.espina
20	5000	20.azulejo

Juilland and Chang-Rodriguez は、語彙の重要性を計測するとき頻度だけでなく、拡散度も考慮しなければいけない、と主張しました。拡散度というのは、語彙頻度調査をするときに選ばれるさまざまなジャンルに平均して分布しているかどうかを示す指標です。統計学で教わる「標準偏差」や平均そしてジャンル数を使って計算します。そうすると、語彙は次のように4つの種類に分かれます。

頻度 (大)	頻度 (小)
拡散度 (大)	拡散度 (大)
頻度 (大)	頻度 (小)
拡散度 (小)	拡散度 (小)

この中で、いちばん重要な単語はもちろん「頻度 (大) + 拡散度 (大)」の単語です。これは、どの分野でも平均してよく使われている単語です。次に重要だと思われるのは、自分に関心がある分野に限るけれどそこでは頻度が高い語、たとえば、日常会話や手紙文などでとくによく使われる語などがあげられます。これが「頻度 (大) + 拡散度 (小)」の単語です。次は「頻度 (小) + 拡散度 (大)」の単語です。これは、あまり頻度が高くないけれど、どの分野でも平均して使われる語です。最後は、「頻度 (小) + 拡散度 (小)」の単語です。これは、とくに覚えていなくてもあまり支障がありません。

このように頻度と拡散度を考慮した、新しい指数が提案されました。これを「使用度」(Usage)と呼びますが、頻度と拡散度を掛け合わせた数値です。次が使用度による単語のランク表です。

12 自分の実力を知る

ランク	レベル	語
1	250	1.nada
2	500	2.añadir
3	750	3.llenar
4	1000	4.serio
5	1250	5.hierro
6	1500	6.carecer
7	1750	7.destacar
8	2000	8.rumbo
9	2250	9.cadena
10	2500	10.estorbar
11	2750	11.llano
12	3000	12.postre
13	3250	13.semajanza
14	3500	14.llamada
15	3750	15.agujero
16	4000	16.sueldo
17	4250	17.nadar
18	4500	18.sábana
19	4750	19.cajón
20	5000	20.bahía

そうでは、もう一度、この表を使って自分の語彙レベルをチェックしてみましょう。それぞれの単語の意味と自由な例文を書いてください。

(…)

語彙レベルチェックの結果については、1週間以内にウェブで発表します。

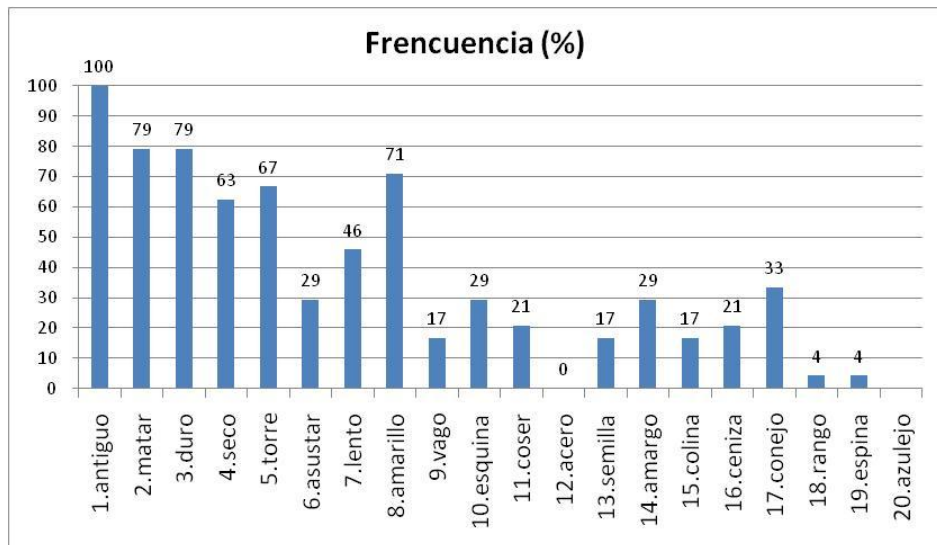
(…)

これで夏学期の授業を終了します。教科書の本文の解釈について皆さんの感想を読むと、だんだんとアカデミックな内容の文の解釈になれてきた、構造や語句のとらえ方も失敗が少なくなったという意見がたくさんありました。12回の練習をがんばった成果だと思います。授業の後半では、スペイン語についてのさまざまなテーマを一緒に考える材料にしました。これについても、皆さんはたくさんの意見を書いてくれました。とても参考になりました。それぞれの意見はお名前を出さずにウェブに載せてありますから、ぜひ読んでください。

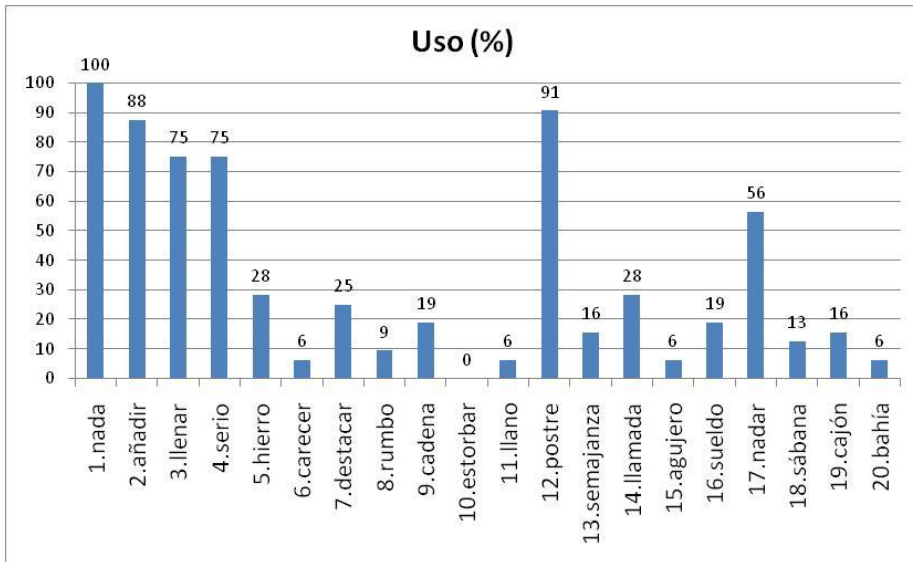
夏学期はおもにスペイン語の仕組みについて理論的に考察してきましたが、冬学期は学習・教育の方法について実践的に練習したいと考えています。それでは、これで授業を終わります。どうもありがとうございました。

*

語彙レベルチェックの結果（1）：頻度



語彙レベルチェックの結果（2）：使用度



レポートから

- 単語帳を買うより、本を読んで分からない単語から覚えていったり、実際にスペイン語圏で生活した上で、分からないものから覚えていくのがいいと思う。
- 単語を文中で覚えることをしていたのに、いざアウトプットしようとする、その単語しかでてこない。
- 単語を覚えるときは、よく青ペンで3回書く+3回発音する、という作業を受験期はよくしていました。
- 「頻度」について、番号が上がるにつれてわからなくなる、という自然な結果だった。
- 「頻度」のほうが「使用度」より、自分の単語の実力を測るのに適していると思う。
- 「使用度」について、何を基準にこういった単語があげられているのか理解できません。 **postre** や **nadar** といった単語は日常会話で非常によく使われている単語です。そのよ

うな単語がどうして 1000 語までに入っていないのかすごく不思議に感じます。逆になぜ *añadir* といったあまり使われない単語が 500 語までに入っているのか、これも理解できません。今日あげられた単語だけでは、自分がどのくらいのレベルに相当するのか全く見当が付きません。

- *semejanza, sueldo, nadar, sábana, cajón* は意味を聞いて、そうだ！と思い出したので、文脈次第では推測できるかもしれませんが。
- 見たことがある単語でも、意味を言えない単語がたくさんありました。その単語を使った例文があれば、意味をある程度特定できるかもしれません。
- なんとなく文脈で意味を読み取ることもできますが、それが 100% あっていることはないので、あまりあてにならないように思えます。
- 自分で単語帳を作らず、市販のものを使って覚えた。語彙力はとても大切だと思う。せつかくコミュニケーション能力があっても単語がでてこなければ意味ないし、*academic* な文章は読めないと思う。語彙力を高めるために、私は必死で覚えたのですが、ひたすら声に出して読んで覚えました。
- モチベーションは「やらされている」という感じでは下がってしまうのではないか。だから学習スタイルを自分なりに工夫して、能動的になることでモチベーションは上がっていくと思う。
- 「自分で教材を作る」どんな作り方があるのだろうか。
- 私自身単語を覚えるのが大の苦手で、今でも苦戦しています。なので、どのようにしたら、効率よく、しっかり単語が覚えられるのか知りたいです。

- 自分がどのような環境にして、どの単語を使うのか…、どの単語をよく使う環境にいるのか…おかれる環境によって、かなり違ってくると思った。
- 5000 のレベルまで行くには、かなり距離がありました。スペイン語を専攻しているので 5000 レベルぐらいは知っておくべきだと思いました。
- 私の中で、分からなかった単語にはノートやテキストの中でとりあえずマーカーで印をつけておいて、後で確認するようにしています。
- 日本で単語の本を読んで覚えるよりも、アメリカで友人と話しながら様々な単語に接するうちに、とくに辞書で調べなくても、自然にたくさんの単語が覚えられたように思えます。
- 単語を覚える際のモチベーションをどうやってあげるか、というと、無理矢理にでもいいので、好きなものと関連づける方法です。ただ単に覚えるのは退屈だが、たとえば音楽が好きならば歌いながら歌詞を覚えたらいい。
- 単語帳は持っているし、やるべきだと分かっているが、実際テストなどがないと自分を追い込めない。

レポートを読んで

「頻度」のほうが「使用度」より単語の実力をよく示しているのではないか、という意見が多かった。これには2つの原因があると思う。調査したジャンルが日常生活をとくに反映していないこと、そしてもう1つは「使用度」は拡散度によって影響されるので、総頻度の実態が反映されていないことが考えられる。

語の重要度を計測するときは、頻度を重視し、頻度が同じときに「拡散度」を追加的に考慮する、という方法が考えられる。頻度が下がるにつれて、同じ頻度の語の数が大きく増えていくので、その差異化のために拡散度を使うことを提案したい。

12 自分の実力を知る

いずれにしても、ただ一回の調査では問題を一般化できないので、機会があれば他のリストで調査を繰り返したいと思う。

学習者は学習方法に興味をもっているようだ。後期の授業では、学習スタイルや学習ストラテジーに重点をおくことにしよう。